
KAGUYA ~別にあんたの為に月に帰るんじゃないんだからねっ！~

かじゅぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KAGUYA ~別にあんたの為に月に帰るんじゃないんだから

ねつー

【Zコード】

N3926V

【作者名】

かじゅぶ

【あらすじ】

月の裏側に存在する王国メシャム。はるか昔、人類を作りだした創造主達の国である。そこでは日本のアニメが空前の大ブームとなつており、彼らは大いなる平和を満喫していた。しかし王太子の謀反により内乱が勃発。彼らの平和は突如として終息を告げる。結果、国王は戦死。内親王はNASAへの亡命を余儀なくされるが、脱出途上、時空震に巻き込まれてタイムスリップ。たどり着いた先は奈良時代の日本であった。そこで讃岐造麻呂に拾われ一時の平穏を取

り戻す内親王ではあつたが、その平穏も長くは続かなかつた。

プロローグ

創造主。

遙かなる昔、高度に発達した遺伝子工学によつて人類を作り出した者達である。

現在、彼らは月の裏側にある月面都市と、その上空六万一五キロメートル、地球と月の重力が織りなすラグランジュポイントのひとつであるレ2.2ポイントに数百にも及ぶコロニー群を築きあげ、一大国家を形成していた。

チャーチワーデン朝メシャム王国。それが彼ら創造主達の国である。

彼らの存在を知るものは、地球ではNASAの上層部など仅仅一部の人々だけであろう。

そんな彼ら創造主達の中で、ここ数十年来、爆発的大ブームとなつてゐるものがあつた。

社会現象にすら発展し、もはや彼らの生活からは切つても切り離せないもの。

それは日本のアニメである。

当初、彼らはその卓越したソフトウェア・テクノロジーにより、アニメ音声をリアルタイムで自動翻訳して放映していた。それはそれで素晴らしい技術と言えるであろうが、創造主達に不満がなかつたわけではない。その音声は限りなく棒読みに近く、また、彼らの言語は簡潔に過ぎ、文学的表現力に乏しかつたのもその一因である。NASAに相談したところ、字幕での対処を提案してきたが、それは事態の解決になんら寄与するものではなかつた。

そもそも彼らの言語は地球の英語圏のそれと同じく字幕には向きであり、何より文学的表現力の欠如がこの際はネックだったのである。字幕にしたところでその欠点は補いようもなく、ましてや近年、更なる進化を続ける日本語に対応するのは困難と言わざるを得

ない。『萌え』や『シン・テレ』をどう訳せばよこといつのか。彼らの悩みは深刻であった。

そこで創造主達は考えた。そしてある結論に至る。

「そうだ！ 日本語を覚えてしまえばいいのだ！」

最初にそう考へ、この「ロングバスの卵」を孵化させたのは、メガネつ娘萌えの急先鋒として有名な、当時、宇宙軍第三艦隊に所属する通信参謀だった、ツバイス・ラ・グロリア子爵であったと伝えられているが、真偽のほどは定かではない。

何はともあれ、ひとつの方針性が示された時、彼らの行動は敏速であつた。日本語は幼年学校の必須科目となり、あちこちに日本語学校が設立され、宇宙港前留学は長蛇の列をなす。

結果、現在では創造主達の若者の実に九十九パーセントが日本語を解する時代となつていた。翻訳なしで日本のアニメを堪能できる時代が到来したのである。

彼ら創造主達の世はまさに平和だつた。平和なはずだつた。

しかしその平穏を揺さぶる深刻な事態が突如として彼らの頭上に舞い降りたのは、王歴四一二五年。西暦二〇一一年の事であった。世に言つ王太子の乱である。

第一話

「エグゼル王太子謀反！　軍及び政府の主要機関はことごとく反乱軍の占拠するところとなれり！」

宇宙軍第六艦隊分艦隊司令官、フェイ・トリー・ダッド准将がこの急報に接したのは、月面にある王都エネオポリスへと向かう小型連絡艇の中であった。軍務省憲兵局にあるセクハラ委員会より出頭を命ぜられ、多すぎる心当たりに辟易しつつ不景気な面を王都へと運ぶ途上だったのである。

しかしこの事態により急遽転進。乗艦である戦艦フロロモンへの帰途を余儀なくされていたのであるが、フェイとしては些か複雑な心境であった。

「誰かこの憐れな子羊をセクハラ委員会の魔の手より救い出してくはくれんもんかと期待してはいたが……、これはちと素直に喜べんな」

「誰が憐れな子羊ですか！　加害者が被害者面するんじゃ ありません！」

そう言ってフェイを睨んだのは同行していた副官、ドロシー・ナットシャーマン大尉である。彼女はフェイの好色そうな視線から太股を守護せんと、短いスカートの裾を握つて、膝近くまで伸ばして座っていた。

もつとも創造主、地球人を問わず、世の男どもからすれば露わな太股を見せつけられるよりも、女性のそういう仕草を見ている方がよほど萌えるというものであろう。むろん、創造主にしては珍しい黒い髪と黒い瞳を持つこの青年提督とて例外ではない。

しかし萌えてばかりもいられぬこの状況。

「なんと王太子が謀反とはな。そのような暴挙に出ずとも、いずれは正当なる王位継承によつて王冠をその頭上に戴き得たであらうこ「まさかあの噂をお信じになられたのでは？」

「あれが……」

その噂とは、最近まことしやかに流布されているものであった。その内容は、エグゼル王太子を廢嫡し、リディア内親王に王位を譲らんとの意向を、国王が諸大臣に洩らしたというものである。しかしそれは、フェイなどからすればまさに噴飯ものであつた。

「ふん、愚にも付かんと太話だな。民衆の願望が作りだした幻想にすぎん」

「リディア様は人氣者ですものね」

ドロシーの言うとおり、目に見える事実として、創造主達からの人氣はエグゼル王太子よりもリディア内親王の方が遙かに高い。エグゼルは無能ではないが、良くも悪くも凡庸に過ぎ、内向的な性格とパツとしない風貌とが相まって、見る者に暗い印象を与える。一方でエグゼルの異母妹であるリディアは絶世の美女、とまではいかないまでも、まず美人と言つて大過ない容姿を有しており、何よりも居るだけで場を明るくする快活な性格がエグゼルとは対照的であった。些か気が強いのが玉に瑕ではあるが、それはそれでツンデレ萌えの創造主達からは絶大な支持を寄せられている。国務省の試算によれば、男性創造主達の実に半数近くがツンデレ萌えであるとの統計が出ている昨今、リディアの人氣が如何に大きいかは想像出来よう。

だが、しかし　とフェイは断ずる。

「だからと言って、なんの落ち度もない王太子を廢嫡など出来ようはずがない。そもそも女性に王位を譲るなど他の王族方も賛成すまいし、何より王太子の外戚であるアップマン公爵家が黙つてないだろ？」「うう」

「確かにそうですわね」

「噂はあくまでも噂に過ぎんさ」

「でも今、問題にすべきは噂の真偽にあるのではなく、王太子殿下がそれをお信じになられたか否かにあるのではありませんか？」

「今さら問題にしても詮無いことだが、まあこうなつてみると疑心

暗鬼に陥つた殿下が噂を信じ込んでしまつたと見るべきかもしけんな

苦々しげにそう言つた後、フェイは不意に表情を曇らせた。

「しかしこの噂、どうも気にかかる。誰かが故意に流したものだとすれば……。これは何か裏があるかもしれんぞ」

この時、フェイは必ずしも自身の発言を支持しているわけではなかつた。ただ漠然とした不安が脳裏を過ぎつたにすぎず、我ながら深読みも度が過ぎる　と、その表情を苦笑で塗り替えたものである。もつとも、その苦笑も一秒足らずで塗り替えられる事となるのだが。

「私の尻から手を引けて下さい！」

痛烈な平手打ちがフェイの右頬に炸裂した。

後にフェイはこの時の会話を憮然と思い出す事になる。尻の感触と共に。頬の痛みと共に。

フェイの所属する宇宙軍第六艦隊は、現在、月と地球の中間地点であるFL-D3ポイントに集結。ここを戦場に設定すべく陣形を整えつつあつた。フェイが指揮する分艦隊も当然ながらその一翼を担つてゐる。

フェイ達がその宙域へたどり着き、旗艦である戦艦フェロモンの後部ハッチに着艦したのは、フェイの頬の色が左右の均衡を取り戻してしばらく後の事であった。

この戦艦フェロモンは元の艦名をカピートというが、フェイの旗艦となつた時に若干の改造が加えられ、艦名もその時に変更されたのであつた。その理由は小型連絡艇から降り立つたフェイが満足げに言い放つたこのセリフにある。

「フェロモンよ！ 私は帰つて來た！」

そう、彼はこれが言いたいが為に艦名を変更したのである。はつきり言ってバカであるが、こういつたバカは現在の創造主達の中に

は数多いる。

重力制御エレベーターで艦橋に上がったフェイを艦隊参謀のレイ・ロツキー・パテル大佐が出迎えた。この艦橋スタッフではフェイを除けば唯一の男性である。他は全て若い女性の士官や下士官であり、この人選は当然ながら司令官のフェイであった。

急場の司令官代理であつたレイは、残念そうに肩をすくめて上官を出迎えた。

「もう少し司令官席の眺めを堪能したかつたんですがね」

「まあ次の機会を待つていてくれ。艦隊の指揮を引き継ぐ」

「はっ、艦隊の指揮権をお返しいたします」

本来、旗艦の司令官席ともなれば、艦橋フロアの後方一段高いところに設えられているのが常であるが、このフェロモンは違つた。フェイが改造した結果ではあるが、この艦ではフロアの中央一段低いところに司令官席はある。座れば丁度フロアの床と田線の高さが同じになるのだ。

何かを見下ろすのは趣味じゃない そう囁くフェイではあるが、短いスカートを穿いた女性クルー達が歩き回っている場所である。フェイの魂胆など推して知るべしであろう。レイが残念がるもの無理はなかつた。

「状況を報告せよ!」

司令官席に腰を下ろしたフェイの第一声である。この声にひとりの女性士官が立ち上がつた。最近この艦に赴任してきた新米士官である。彼女は司令官席からの視線を意識してスカートの前を必死なつて押えていた。実に初々しい。フェイにとつては萌えるひとときである。

「現在、艦隊総司令部の指示により、我が分艦隊は最左翼に展開中であります。これまでの経緯を要約して申しますれば……」

下半身をモジモジさせながらの萌える報告を彼女は続けた。フェイはそんな彼女の下半身に舐めような視線を這わせつつ、その報告を頭の中で整理していた。萌えと仕事の双方を同時にこなせないよ

うでは艦隊の司令官など務まらないのである。

彼女の報告によると、どうやら今回の反乱には第一、第五艦隊司令官他、かなりの高級士官が加担しているらしい。反乱勃発直後、瞬く間に軍や政府の主要施設は占拠され、宇宙港も封鎖。第一、第三、第四艦隊の司令官等、軍の主立った者らは拘禁、その艦隊も反乱軍の監視下に置かれた。宇宙に出ていた第六艦隊だけが難を逃れる結果となつたのである。

国王アレクサンドル・チャーチワーテンはリディア内親王と共に辛うじて王都を脱出、現在はこの第六艦隊に合流を果たしたようである。しかし、反乱軍の追撃は苛烈を極め、国王に従つた近衛艦隊の実に九割以上を失い、残つた艦艇は一隻に満たなかつたといつ。

第六艦隊司令官、アベル・モンテクリスト中将は、この近衛艦隊の残存艦艇と、その他、脱出に成功した軍艦や警備艇などを糾合し、反乱軍六万隻にほぼ拮抗する約五万六隻という戦力を揃えるのに成功した。これはモンテクリスト提督の功績と評してもいいであろう。しかし寄せ集め艦隊という感は拭いようもなく、些か心許ないと言わざるを得ない。そもそも補給をどうするのか。燃料は？武器弾薬は？ 食料は？ 戦が長引けばこれらの問題も表面化していくのである。そうさせない為には短期決戦で決着を付ける以外の選択肢は存在しないのである。

フェイは報告に耳を傾けつつ、頭の中を整理しながら、レイから手渡された書類に目を落した。反乱軍に加担していると曰われる高級士官のリストである。そこに並んだ名前があまりの多さにフェイは唸つた。

「反乱に加担した者がこれほどいたとはな……、王太子殿下にそれほど人望があるとも思えんし、これはやはり陛下に対する不満が原因か？」

アレクサンドル四世はこの年五一才。これまでの在位期間中、特筆すべき事績はないものの、まず良識派として知られる国王であつ

た。しかし近年、ある重大な失政をやらかしていたのである。良識派ゆえの失政というものがあるとすれば、これがまさにそつである。その失政とは、アニメ画像に対する規制であった。

これまで、地球でかけられたボカシ処理などは創造主達の高度な画像解析技術により、瞬時に復元されていた。しかし王政府はこの復元をしなくなつたばかりか、きわどい映像には更なるボカシを入れたのである。

萌えキャラ達の尻や胸に白いモヤがかかつた時。創造主達の怒りは爆発した。

「創作に対する冒涜だーー！」

「乳首を見せろーー！」

「王政府は男のロマンをなんと心得るのか！」

この創造主達の切実なる訴えを王政府は黙殺したのである。このことへの不満は思つた以上に大きく、且つ深刻であった。フェイ自身、何度もモニター画面にリモコンを叩き付けたことか。しかし反乱にまで発展する事にならうとは、フェイは努々予想だにしていなかつた。

「……以上です閣下」

報告をそう締めくくり、その女性士官はホッとしたように席に着く。

「うむ、『」苦労」

フェイのこの声は違う声にかき消された。オペレーターが悲鳴に近い声で報告を始めたのである。

「敵艦隊発見！かなりの高速で接近中。現在 F - D 1 ポイントに到達。至近です！その兵力は約六万隻。第一、第五艦隊のほぼ全軍と思われます。推定接触時間は約十分後！」

戦艦フローモンの艦橋に緊張が走る。

「なぜこれまで分からなかつた！」

そう口にした後、フェイは自分の迂闊さに気づく。これは恐らく味方がこの周辺海域に散布した長距離レーダージャミングポットに

よるものである。しかし早い。Jijiは敵の索敵能力を壊めてやるべきか。

「我が艦隊が陣形を整えるのに後どれくらいかかる？」

「約十分です！」

「ギリギリだな。で、他の艦隊は？」

「分かりません！ 分かりませんが糾合した艦艇を多数割り振られたところもありますので、再編に手間取る艦隊もあるかと推測されます！」

「チツ、Jijiやあ前途多難だな」

Jiの時、艦橋のメインスクリーンに第六艦隊司令官、アベル・モンテクリスト中将の厳めしい顔が映し出された。全艦隊に向けての通信である。決戦に先立ち、兵たちを鼓舞しようとしているのである。全艦に告ぐ！ 王国の興廃はこの一戦にあり！

モンテクリストの演説はどこかで聞いたようなセリフから始まった。地球戦史研究の第一人者として有名な彼らしい言いだしである。「賊軍など恐るるに足らず！ 義は我ら官軍にあり！ これより我が家は敵艦隊を迎撃しこれを殲滅！ 加えて電撃的侵攻により王都を奪還せしめ、最終的な完全勝利を手にするのだ！ 私は今作戦を電撃作戦と命名した。良いか諸君！」

Jiでモンテクリストは大きく息を吸い込んだ。そして言い放つた。

「電撃だつちや つ！」

「…………」

全艦隊に氣まずい空気が漂つた。創造主達の換気システムをもつてしても浄化不可能なこの空気。

「おい、今のは笑うところか？」

「古くね？ ネタ古くね？」

「聞かなかつた事にしてさしあげり」

ひそひそ声で創造主達は語り合つ。これが精一杯の大人の対応と

やらであろう。こんなもので笑いや喊声を期待されても困るというものである。

しかし全ての創造主達が精神的大人だつたわけではない。わざわざ通信機を手に取り、全艦に向けて声を発した者がいた。フェイである。

「聞いたか野郎ども！ これで笑いがとれると信じて疑わぬ総司令官閣下のコーモアセンスに敬意を表し、ここは大いに笑い飛ばしてやろうではないか！」

この時、全艦隊の約九割が笑い、残り一割が顔を青くした。顔を赤くした者は若干一名。言わずと知れたモンテクリスト中将である。フェイのこう言うところが上層部から忌避される要因なのだが、当人は一向に気にする様子もない。憤然とした表情をスクリーンに焼き付けて、モンテクリストは通信を切る。その残像を眺め、フェイの部下達は暗澹とした面持ちになつた。後々、どんな無理難題を吹つかれられる事やら。敵に体当たりしろとでも命令されかねない。そうなればとばっちりもいいところである。

「フェロモンよお私は帰つて來たあ、なんて言つてる人がよく言いますわね」

副官のドロシーが鋭いツツコミを入れた。せめてこれくらいの嫌味は言つてやらねば気が済まぬところである。

「俺は別に笑いを取る為に言つてるわけじゃないからな」

フェイのこれが精一杯の言い訳であった。どこで新たな報告がふたつ。

「我が分艦隊の陣形、整いました！」

「敵艦隊、主砲の有効射程まであと一分！」

「よーし…」

気勢を上げてフェイは立ち上がつた。しかし思い直した様にまた指揮座に腰を下ろした。やはり眺めがよろしくなかつたのだろう。わざとらしく咳払いし、フェイは通信機を手にする。

「全艦、主砲用意！ 各艦、正面の敵に対し、照準を俯角コンマ

「一に修正！」

いよいよである。創造主達の緊張は極限にまで達した。静まりかえる艦橋内で、皆の呼吸音がやけに耳をつく。もう少し耳を憲らせば心臓の鼓動まで聞こえてきそうな錯覚に、誰もが陥つた。

その静寂をオペレーターの張り裂けんばかりの大声が破る。

「敵艦隊、主砲の有効射程に入りました！」

「撃てえええっ！」

こうして戦いの幕は切つて落とされた。

宇宙軍第一艦隊、第五艦隊を擁する王太子軍対宇宙軍第六艦隊を主軸とした混成艦隊である国王軍。後に「五六会戦」と呼ばれる事となる戦闘の、これが最初の砲火であった。

第一話

フェイの艦隊が放つ荷電粒子砲の閃光が、無数の煌めく槍となつて宇宙空間を走る。

この砲撃を真正面から受ける事となつたのは、宇宙軍第一艦隊に所属するふたつの分艦隊、右翼に位置するコルト・パルタガス准将とボリス・コイーバ少将の艦隊であつた。

「ふん、照準が甘いわ」

冷笑と共に眩き、コルトは部下に指示を出す。

「減速しつつ進路変更、仰角……いや待て！ 命令を変更する。進路そのまま！ こちらも主砲で反撃しろ！」

コルトのこの判断は正解であつた。フェイが第一波をわざと艦列の中央ではなく下部に集中させたのは、相手の進路を操作しようとの意図からである。コルトはこのフェイの意図を咄嗟に看破した。案の定と言うべきか、第一波は先ほどとは比べものにならない苛烈さを伴つて彼らの頭上に降り注ぐ。いくつかの艦が犠牲になつたが、進路を変更していたら被害はもつと甚大であつたろう。

さらにもうひとつ問題。戦艦の主砲である荷電粒子砲は威力こそ絶大なもの、小型化が不可能である為、艦それ自身を砲門として打ち出す兵器である。つまり仰角に進路を取つてしまえば当然ながら主砲は使えない。主砲か長距離射程ミサイルしか届かないこの距離でそれは致命的であつた。反撃出来ぬまま敵の砲火に晒される事となるのである。

現にボリスが指揮する艦隊の方はその事態に陥つていた。

さらにボリスは愚かであつた。狼狽と混迷の挙げ句、彼は長距離射程ミサイルによる反撃を試みたのである。猛烈な砲火に晒される中でミサイルを発射した為、そのいくつかは発射直後に爆発した。そして誘爆。その爆風は発射口を伝わつて艦内を吹き荒れる。ボリスはこの判断ミスにより、艦隊の実に三割を消滅せしめた。

艦には電磁シールドが備わっている。よほどの直撃でもない限り艦の被害は軽微なのだから、多少の犠牲は覚悟の上で、艦首の向きを戻すべきだったのだ。

「愚か者め」

コルトは味方の不甲斐なさに歯噛みしたが、ここは敵を評価すべきかもしれない。コルトなればこそ敵の意図を看破し、艦首を上げずに済んだのである。

「あの敵が誰の艦隊か分かるか？」

コルトが部下に問う。数秒間コンソールと格闘した末、その部下は報告を返す。しかしその声色は恐怖で縁取られていた。

「せ、戦艦フェロモンの存在を確認！ フェイ・トリニダッド提督の艦隊です！」

フェイ・トリニダッド！

その部下の恐怖はたちまち他のクルー達にも伝播した。

飲み屋やアニメイベントで出会ったなら、これほど楽しい相手もないが、戦場では絶対に出会いたくない相手である。数々の演習で卓越した技倅を示し、一世前半にして将官にまで登りつめた男。艦隊戦でこの男と互角に渡り合える者など宇宙広しと言えど、ただのひとりしか存在しない。

そのひとりが静かに席から立ち上がった。フェイとは宇宙軍士官学校の同期であった、コルト・バルタガス准将である。

「何を狼狽える事もある。第六艦隊が敵と知れた時、フェイと相まみえる事など想像し得たではないか」

コルトは左の掌に右手の拳を叩き付け、口角の片側をつり上げて見せた。

「良い機会だ。あの巨乳萌えセクハラ野郎の初陣を敗北の一二字で彩つてやるうではないか」

自信に満ちたこの表情を見て、恐慌状態一歩手前のクルー達は辛うじて平静を取り戻す。普段は冷たい印象を与える冷笑癖のあるコルトの顔も、この時は皆の鎮静剤となり得たようであった。もちろん

んそれは実力という裏付けあつての事である。フェイを前に他の者が笑つて見せても気が狂つたとしか思われなかつたであろう。

「ボリス・コイーバ少将に連絡。艦隊を下げるよう」に言え。邪魔だ、
退け とな」

コルトのこの命令を実行した通信士官は若干の、いや、かなりの修正を余儀なくされた。苦心の末、言葉を選んでの通信は、しかしボリスには届かなかつた。彼の旗艦は撃沈した三割にこそ含まれなかつたものの、ミサイルの誘爆により大破。ボリスは意識不明の重体となつていたのである。しかし僅か数分でその報も覆る。彼は死への門をくぐり、重体から解放されたのであつた。ボリスは己のミスを死を以て償う事となつたのである。

死者を罵る趣味はコルトはない。コイーバ少将戦死の報を受け、彼は「そうか」とのみ呟いた。そして半恐慌状態で敗走に転ずるボリスの艦隊を援護すべく、艦の両翼を広げ、敢然とフェイの艦隊の正面に立ちふさがつた。

この時、コルトの副官、メアリー・ベグエロス大尉はこれに危惧を抱く。彼女は可愛らしい童顔を露らせてコルトに具申した。

「敵の陣形は左翼が突出した、いわゆる斜形陣です。これは我が軍側面へ回り込んでの側背攻撃を企図してのものではないですか？ だとすれば両翼を伸ばして陣容を薄くするのはかえつて危険かと思われますが」

「なるほど……」

コルトはそう言って笑い、メアリーの艶やかなブロンドの髪に指を絡ませた。頬を赤く染める彼女にコルトは言葉を続けた。

「しかし今のところそれはない。今後、状況が変化し、フェイが独断でそれをなす可能性はゼロではないが、少なくともモンテクリスト中将の考えは別にある」

メアリーの言う通り、敵は左翼を前面に押し出し、右翼を後方に下げた斜形陣を形成している。故に現在、全戦線の中で戦端が開かれているのは敵左翼に対峙するコルトら右翼の艦隊のみである。

しかしこの斜形陣。モンテクリストにしてみれば満を持してのものではなく、いわば苦肉の策であった。

ひとつには艦隊編成の時間稼ぎであり、混成部隊である弱兵を右翼へ集め、後方へ下がらせる事で中軍からの援護を容易にする為である。それともうひとつ。突出させた左翼に最強の精銳を当て、序盤での局地的な戦力優勢の状況を作り出し、物心両面において戦の全局面を有利に展開しようとの考え方からである。なればこその左翼＝フェイ・トリニダッド艦隊であった。モンテクリストはフェイの性格を嫌つてはいても、その能力は高く買つていたのである。この敵将であるモンテクリスト中将の思惑を、コルトは的確に洞察していた。

「つまり我々はフェイとの戦いを互角に演じればいいだけだ。敵右翼は取るに足らん弱兵に過ぎず、全体としての優勢はこれで確保できる。理解できたかな、メアリー」

「はい、閣下」

「しかし……」

尊敬の眼差しでコルトを見上げるメアリーの首に手を回し、コルトは彼女の朱に染まつた顔を引き寄せた。メアリーの頬がさらにつやの色を増す。

「しかし、能うことならば互角などと言わず、あのフェイを我が足下に跪かせたいものよな」

「閣下なら必ずお出来になりますわ」

「勝利の女神の接吻があればそれも能うるか」

コルトは微笑と共にそう言つて、メアリーの唇に唇を重ねた。

フェイ・トリニダッドとコルト・パルタガス。彼らは宇宙軍士官学校の同期であり、共に一四歳で准将に昇進し、共に現在二六歳。共に貴族の嫡子であり、共に軍上層部からの受けが悪い。と、ここまでなら似たもの同士という感があるが、実は何もかも正反対の一

人であつた。その一番顯著な例は、コルトの貧乳萌えに対するフェイの巨乳萌えであろう。その正反対であるが故にいつも喧嘩が絶えず、公の場での取つ組み合ひも一度や一度の事ではない。

「巨乳などと、無意味に自己主張ばかりが肥大した、あんな脂肪の塊を信奉するとは雅さを解せぬ愚か者めが！」

「貧乳が雅だと？　こいつは新しい辞書が必要なようだな。女の肋骨に欲情する変態野郎が何をぬかすか！」

て感じである。

そんな彼らではあるが、互いに相手の能力は高く評価しており、常に対抗意識を燃やしてきたのであった。簡潔に言つてしまえばライバルであろう。良き　と冠してよいかどうかは疑問であるが、少なくとも当人達は冠してほしくはあるまい。

フェイとコルト。共に艦艇数約五　隻。雌雄を決するに相応しい舞台上に、今彼らは立つていた。

「ふん、もしこの舞台に脚本家がいるとすれば、そいつは血の衣を纏つた運命の気まぐれとやらかもしれんな」

前面に展開する敵がコルトの艦隊だと知れた時の、これがフェイの偽らざる感慨であつた。

「コルトが反乱軍に身を置いているのは何故か？　自らが望んでの事なのか、上官の命に従つてやむを得ずの事なのか。フェイとしてはそこに思いを致さざるを得ない。コルトとの決戦はフェイとしても望むところではあつた。しかし、彼が意に沿わぬ戦いを強いられてこの戦闘に臨んでいるのであれば、フェイとしては興ざめもいいところである。

「さて、どうしたものか……」

数分間を沈思黙考に費やし、フェイは結論を得た。答えがでたのではない。答えが出ないので当人から聞く事にしたのである。

「コルトの旗艦バリューゼとの間に通信回線を開け。奴に真意を聞いただす。秘匿回線を使え」

通信士官にそう命じ、フェイはさらにワインを持ってくるよう指

示した。

「グランジヒリエの四〇一一年物があつただろう。あれを持つてこい」

つまり、これはコルトに対して余裕を見せつける為の小道具である。フェイはワイングラスを片手にコルトからの映像を待った。我ながら負けず嫌いも度が過ぎる　と彼自身そう思い、苦笑を漏らしたその時。

「バリューゼからの接続を確認。通信繋がりました。映像でます」
通信士官の報告と共にサブスクリーンに映像が入り、それを見たフェイは思わず苦笑を引きつらせた。フェイ以上の負けず嫌いがそこにはいたのである。

コルトはソファーかと見紛うばかりの広い指揮座に深く腰掛けて足を組み、手に持ったブランデーグラスを揺すつて琥珀色の液体を波打たせていた。と、ここまでならばフェイと似たようなものであるが、なんとコルトの胸元には副官のメアリーが頬を埋め、恍惚とした横顔をフェイ達に向けていたのである。コルトはそのメアリーの髪に指を絡ませ、挑発的なまでの冷笑をフェイに向かって投げつけていた。

どうだ、羨ましいか。出来るものならば貴様もやってみるがいい。

コルトの無言の嘲笑が、フェイには聞こえた。ここで引き下がれば男が廃る。従順な副官を有しているのは、何もコルトだけではないという事を、あの童顔好きロリコンの貧乳萌えの髪フェチ野郎に思い知らせてやらねばなるまい。

「ドロシー、ちょっと来い

「いやですっ！」

フェイの困惑は一瞬で潰え去った。

今度は明らかな音声となつて嘲笑が響く。

「さすが未来の侯爵閣下は部下からの人望に厚いと見える

「ふん、未来の伯爵閣下には及ばんさ」

負け惜しみにすらなつていかない事を知覚しつつ、逆恨みに近い感情をドロシーに抱きつつ、後でどんなお仕置きをしてやうつかと思案しつつ、フェイは本題に入った。

「そんな事はどうでもいい。貴様、自分のやっている事が分かっているのか？」

それは予想していた質問であったが、コルトは眼を細めて数秒間フェイを見やり、納得したようにひとつ頷いた。微笑を湛えたそのまま元が静かに動き出す。

「分かっている。貴様が何を聞きたいのかもな。だから答えよう。この反乱、俺が知ったのはつい数時間前の事だ。不本意ながら俺が反乱軍に身を置いているのは、第一艦隊に席を置く身としてのやむを得ざる仕儀……だった」

コルトはこの時、故意に過去形を強調してみせた。フェイもそれに気付く。

「だつた？ 今は違うと？」

「ああ、聞くまでもなかろう。それは貴様がそこにいるからだ、フェイ・トリニダッド准将。貴様と戦つて勝つ。その為に今、俺はここにいる」

答えは得た　とばかりにフェイは会心の笑みを浮かべた。

「それを聞いて安心した。これで遠慮無く貴様を叩き潰せるというものだ」

「ほほう、貴様にそれが出来るかな？ 俺は先ほど勝利の女神より祝福を戴いた。接吻という名の祝福をな」

一瞬、何かの比喩かと思ったフェイだが、この時、コルトにしがみついているドロシーが身を捩りながら頬を赤らめたのを見て、それが比喩でもなんでもない事を悟つた。

負けてはならじとフェイは胸を反らせ、虚勢を張ろつと試みる。

「それはどうかな？ 勝利の女神ならこりらも……」

「いやですっ！」

ドロシーの横槍が虚勢の完成を待たずして一撃で粉碎してのけた。

「コルトの高笑が傷心のフュイにさらなる追い打ちをかける。

「はつはつは……、どうやら宇宙に勝利の女神はただのひとり暮らし

い。さて、その勝利の女神は貴様にどんな顔をするかな？」

「コルトがそう言つと、メアリーがフュイの方に顔を向けた。そしてあろう事か舌を出し、フュイに向かつてあつかんべーをして見せたのである。

その可愛らしさに怒りよりも萌えを覚えてしまうフュイであつたが、それにしても良く躊躇したものだと感心せずには居られない。ドロシーとの違いを思うとその差は歴然であろう。

「では互いの健闘を祈つて」

勝ち誇った表情でコルトがブランデーテーグラスを掲げ、そこで通信が切れる。

「ふん、ここは素直に敗北を認めてやう。だが戦闘ではそういうかんぞ」

フュイは消えたサブスクリーンを眺めてそう独語した。そしてワインを飲み干し、グラスをフロアに叩き付けた時。彼の表情は一変していた。それはまさに武人の顔であった。飛散する煌めきの欠片には目もくれず、彼は副官の名を呼んだ。

「ドロシー！」

「いやですっ！」

「お前……、いつか覚えてろよ」

フュイは武人としての顔をもう一度作り直す羽目となつた。

王太子軍の前進と共に、戦闘は全戦線へとその広がりを見せ、時間と共にその過酷さは刻一刻と増していく。陳腐な表現を用うるならば、そこは大多数の創造主達にとって、まさに地獄であつたろう。誰しもがフェイやコルトの様に、戦場で己の存在意義を見いだせるわけではない。

主砲の閃光が走り、その後にはいくつもの火球が一瞬の煌めきとともに消滅する。そのオレンジ色の明滅は、命の灯火が消える瞬間でもあつた。

現在の宇宙船はオートメーション化が進み、乗員数も昔ほどではない。しかしそれでも戦艦クラスで約一一〇〇名。駆逐艦クラスで約五十名の乗員を必要とし、ひとつずつ輝きはそれらの乗員、全ての命を要求するのである。

前線の遙か後方、一一〇〇〇隻の護衛艦と共に中軍の背後に布陣している戦艦グランドキャラバッシュの艦橋で、国王アレクサンドル・チャーチワーデンはこの無音の遠雷をただ悄然と眺めていた。

「なんと愚かな……いや、愚かなのは他ならぬ余、自身なのかもしけぬな」

深い悔恨の念が溜息と共にその口元を衝いて出る。しかし弱気な姿を臣下に見せるわけにはいかない。侍従長、ルビ・ラモン・アロネス子爵がやってきた時、国王は悠然とした面貌を作つて振り返つて見せた。

「リディアはいかが致しておる。大人しくしておるか?」

「はあ、それが……」

この質問の答えはルビの無残な姿が物語つていた。彼はすっかり染まりきつた白髪頭を搔き乱し、皺だらけのその顔を無数の引っ搔き傷で補飾していたのである。その上、歩き方がどこか変なのは、宦官製造マシーンとの異名を奉らされているリディアに股間を蹴り上

げられたからである。

苦い笑いが国王の表情を覆つた。無論、同情もした。男ならば誰もが同情せずにはいられぬところであろう。それはもう痛いのだ。いやマジで。

ルビは苦痛に顔を歪めながら国王の質問に答えた。

「内親王殿下におかれましては、前線へ艦を進めるとの無理難題。それは出来んと私が申しますと、ならば小型艦を一隻よこせと、それでフェイのところへ行つて活を入れるのだと言ひ出しまして」

「フェイのところへ行つて……」

リディアは一時期、フェイから日本語を教わっていた事があった。これはリディアの母である今は亡き国王の愛妾カレンと、フェイの母であるシャーリー・トリニダッド侯爵夫人とが、同じ魔女っ子アーメファンクラブに席を置いていた縁によるものである。

しかしリディアとフェイとは仲が悪い。との噂がまことしやかに流れていた。フェイはおよそ阿ねるという事を知らず、誰であれズケズケとものを言つ。その辺りがリディアの瘤に障るのだろうとうのである。この噂はかなりの信憑性をもつて創造主達の間で語られており、実際、リディアとフェイとの罵り合いを田撃した者は三桁を下らないであろうと言われている。国王自身、リディアに股間を蹴り上げられ、跳躍と着地を繰り返すフェイを一度ならず目撃しているし、食事の時なども、リディアは寄ると触るとフェイの悪口ばかり言つている。しかし、父親としてはそんな娘の、ましてや一七歳の小娘の心情など、手に取るようにならぬのであつた。

「で、リディアはいかがした？」

「はあ、何を言つても聞きませず、まことに恐れ多き事ながら、当て身によりお眠りいただきました」

「それはまた、そちには苦労をかけたのう。あれが相手では難儀であつたる」

「はつ、日頃の意趣返……あ、いやいや、抵抗が激しかったもので、ジャブを数発と、フェイツシューにガゼルパンチとロークスクリュー

ブローをお見舞いしてしまいました。どうかお許し賜らん事を」「はっはっは……、それはリディアには良い薬であつたろう。そちは悪くない。陳謝には及ばぬ」

「恐縮にござりまする」

「」でいつたん会話が途切れた。アレクサンドルは静かに目を閉じ、そんな国王をルビは複雑な面持ちで見守った。

現在、戦況は必ずしも良いとは言えない。左翼だけが何とか善戦しているようだが、それ以外は苦戦の真っ直中にあり、右翼に至っては壊滅に近い打撃を被っている。それでもモンテクリスト提督の奮戦には目を見張るものがあるが、もはや戦線を維持できるギリギリの限界点に来ていると、ルビは見ている。

無言の時間が静かに流れ、静寂の秒針が艦橋内を一周した頃。意を決したように目を見開いたアレクサンドルが、その静寂に無形の砲弾を投じ入れた。

「余はNASAへ一命しようと思つ」

「そ、それは！」

驚愕とこう召の爆風がルビをなぎ払つ。

「どうかご再考のほどを。アステロイドベルトのケレス資源発掘基地からも国王派であるとの声明がございました。ケレス駐留艦隊は健在でござります。」これは一度、ケレスへ向かい、けんどちょうらい捲土重来を期するものが上策かと」

ルビの言は誰が聞いても正論であつたろう。しかし……。

「そんな事をしていつたい何になるのか！　いたずらに戦乱の世を長引かせ、無用の犠牲を増やすだけの事ではないか！　あれを見よ！」

国王は心に渦巻く激流を吐き出した。さらに前線が映し出されたスクリーンを指さす。その瞬間、彼らの目の前で光点が約一〇個。

一瞬の燐めきを残して消えた。国王は言つ。

「見たか！　今この瞬間に失われた命だけでも一〇〇〇名を下るまい。この先、いつたいくつの命が失われる事になるのか。余には

……、余には堪えられん。余は血の海に浮かんだ玉座などに座つて
いとうはない！」

「陛下、然りながら……」

「もう言つな！」

「

国王の怒声を浴び、ルビは言葉を失つた。行き場のない感情が老臣の両眼から溢れ出す。嗚咽に奮えるその肩に手を置き、国王は口調を改めた。

「もう言つな、ルビよ。もう決めたのじゃ

「陛下……」

止めどなく溢れ落ちるルビの涙が、艦橋のフロアに染みを作つた。

フェイ・トリー・ダッド艦隊とコルト・パルタガス艦隊との間で戦端が開かれてより約一〇時間。彼らの戦闘は膠着状態にあつた。元々、戦力も能力も伯仲する両名である。この膠着状態は当然と言えば当然の経緯であつたろう。

「アルファ、狙点をSD K3に固定。ベータ、狙点をDG R3に固定。シータ、狙点をDG E1に固定。撃てえええつ！」

フェイは艦隊を三つに分け、敵艦列の急所とも言つべき絶妙なポイントに火線を集中させる事で、コルトの陣形を突き崩しにかかる。しかしコルトも見事な艦隊運動で即座にこれを修復にかかり、容易に隙を見せない。そればかりか、艦隊の右翼と左翼が交互に前進と後退を繰り返すことで、フェイの艦隊に心理的圧迫を加えてくる。フェイはともかくとして、各艦乗組員達の精神的疲労は極限にまで達していた。

「ちつ、可愛げのない用兵をしやがる。さすがはコルト・パルタガスと言つたところか」

罵りというよりは、むしろ嬉しそうにフェイはそう口走つた。フェイのこのふてぶてしい微笑みはクルー達に安心感をもたらす為でもあるが、無能な敵と戦う事ほどつまらぬものはない、と、そう思

うフロイであつたから、これは本心からこじみ出たものでもあつた
わ。

フェイのこの剛胆な横顔を見て、副官のドロシー・ナットシャーマン大尉は頼もしさを感じてはいたが、相手がコルトである以上、一方的な勝利など望めようはずもなく、この接戦が永久に続くかのような錯覚に陥るのであつた。

もはや、この均衡を崩すには、長久の時間、運命の悪戯、外的な要因。この三者の何れかが必要であろう。ドロシーはそう痛感せざるを得なかつた。

その矢先である。運命の悪戯、外的な要因、何れともとれる事態が訪れた。艦隊総司令官であるモンテクリスト中将より通信が入ったのである。

スクリーンに現れたモンテクリストは見る影もなく窓際で、苦渋に満ちた表情をフェイに向けていた。

「なんだと？」

クルー達は予期せぬ事態に絶句した。これにはさすがのフエイも驚いたようである。ケレスからの声明が届いたばかりだつたので、これは予想外であつた。しかしフエイは思惟の坑道を一步踏み込んでみて納得した。あの国王らしいと苦笑いを禁じ得ない。それで、いつたい総司令官は我々にどうしろというのか。フエイのこの疑問にモンテクリストは答えた。

「我が艦隊はこれを援護すべく後方へ下かり、一度陣形を再編せねばならぬ。ついてはトニー・ダッド准将。済まぬがほんの一瞬でいい。貴官に敵の足を止めて貰いたいのだが、出来るか？　これは命令ではない。貴官には拒否権を与える」

これには皆、国王の亡命以上に驚いた。コルトの艦隊だけで手一杯のところへ持ってきて、敵全ての足を止めるなど、出来ようはずがない。仮に出来たとしても、それはトロニーダッジ艦隊の犠牲の上に成り立つものではないか。総司令官はトロニーダッジ艦隊を生け贅

の子羊に供しようと言つのか。

一瞬、皆はフェイへの仕返しを田論んでの事かと疑つたが、それはなさそうであった。それは『済まぬ』という言葉に拒否権、何よりもモンテクリストの苦悩を滲ませた表情が物語つている。皆は息を飲んでモンテクリストとフェイに交互に視線を走らせた。フェイの返答いかんで全クルーの運命が決するのである。

この時、コルトの艦隊が艦列を立て直す為、一時後退したのを見て、フェイは決断した。

「やつてみよう」

スクリーンに映るモンテクリストは、やや驚きの表情を浮かべて、しばらく無言でフェイを見下ろしていた。こうすんなり承諾するとは予想外だつたのだろう。やがてモンテクリストはひとつ頷き、疲れ果てたその顔に笑みを浮かべた。

「ではよろしく頼む。貴官とは色々あつたが、一度酒でも酌み交わしたかつたものよ。卿の父君、トリニダッド侯爵からは卿の事を人々もよろしくと頼まれていたが、どうやら最後の最後で世話になるのは私の方だつたようだな」

「最後だと？　あんたのそんな弱音は聞きたかねえな。いつものあんたは何処へ行つた」

「ふん、そうであつたな。ではお互い生きて帰るとしよう。その時は貴様に敬語の使い方というものを教えてやる」

「ぜひご教授いただこう」

不遜な笑みを浮かべてフェイは敬礼した。モンテクリストは威厳に満ちた、軍人の模範とも言つべき敬礼で応じ、両者の会話は終息を迎える。

「さてと、一丁やるか」

気楽につぶやくフェイとは違い、皆、唖然と息を飲んで佇んでいた。右舷のモニターに田をやると、そこはまさに地獄絵図である。そこに今から突入し、敵の全艦隊を相手にするのかと思つと、遺言のひとつも書き残したい気分なのであった。

「こつたこづりあるんですか！　びりあるんですか！　びりするんですか！」

皆を代表して副官のドロシーがフェイに迫った。あまりフェイに近づくと、その仰角が変化し、スカートの中が丸見えなのだが、そんな事にも気づかないくらい、彼女は狼狽していた。

フェイはそんなドロシーの三連斉射を平然と受け流しつつ、絶景を堪能しつつ、命令を発する。

「全艦左舷九十度回頭！　メインエンジン始動！」

「え？　左舷？　右舷の間違えじゃ」

「左舷だ。何度も言わせるな」

「いつたいどういう事なんですか？　ま、まさか逃げ出しつもりじゃないでしょ？」

疑惑の眼差しを向ける副官に、フェイは作戦を説明した。それを聞き驚きの表情を隠せないクルー達。

「そ、そんな事が可能でしょ？　それにあのゴルト准将を騙せるでしょ？」

「騙せるわけがない。しかし騙すのはやつの上官であり同僚だ。分かつたかな？　水玉ちゃん」

自信満々にそう言って、フェイはウインクして見せた。ドロシーのスカートの中に向かって。

その視線にやつと気付いたドロシーが悲鳴を上げつつ足を振り下ろす。

「エッチ！　スケベ！　変態！」

軍靴が三度強襲し、フェイの顔面にめり込んだ。

今回の三連斉射を平然と受け流す事に、フェイは失敗したのであった。

「あのフェイが敵前回頭だと？」

艦列の立て直しを目的とし、主砲の射程外へと後退したコルトの眼前で、それは起こった。拡大投影スクリーンに映し出されたフェイの艦隊が左舷回頭し、まるで撃つてくださいと言わんばかりに艦の横腹を晒したのである。

「戦は最終局面に差し掛かっているからな。フェイに何か新たな動きがあるかもしかんとは思つていたが……」

「閣下、艦を前進させて攻撃なさいますか？」

「いや、これは何かの誘いやもしかん。もうしばらく様子を見よう」
これはコルトとしては当然の判断であつたろう。あのフェイに対しては慎重に慎重を重ねても度が過ぎるという事はないし、必要な局面ならばいざ知らず、この勝ち戦で敢えて罷の可能性がある敵の不可解な艦隊行動に合わせてやる必要を、コルトは微塵も感じなかつたのである。しかし……。

「あ……」

フェイの艦隊が最大船速で戦場を離脱し始めたのを見て、コルトは彼らしからぬ間の抜けた声を発した。メアリーにすら届かぬ小さな呻きでしかなかつたが、この時、コルトはその頭蓋の中でフェイの思惑の断片ピースを垣間見た気がしたのである。それは漠然としたものでしかなく、形にすらなつてはいなかつたが、そのパズルが完成を見た暁には不吉という文字が浮かび上がるに違いないとの予言、といつよりは確信に近いものがコルトにはあつた。

やがてフェイの艦隊が右に進路を軌道修正し、緩やかに弧を描くような軌跡を宇宙空間に刻み始めた時、コルトの脳裏で全ての断片ピースが繋がつた。

「してやられた！」

今回この呻きは先ほどとは違い、メアリーのみならず、全ての

クルー達に届いた。何をどうしてやられたのか、皆は不思議そうに顔を見合っていたが、その内のひとりがコンピューター画面を見て報告という名の奇声を発した事により、クルー達の疑問は一気に氷解した。だがそれは絶対零度の冷氣となつてクルー達の心胆を寒からしめる事となる。

「敵艦隊の軌道計算が出ました。彼らは月の王都、エネオポリスへ向けての最短ウェーブコースをとつているものと推測されます！」

「まさか彼らの転進は王都奪還を企図しての？」

クルー達に動搖が広がつた。無論、コルトにとつてその報告はなんら驚きをもたらすものではない。自分の導き出した回答の一部に対し、コンピューターが正解を告げたに過ぎず、しかも当たつたらと喜んでいられる類のものでもなかつた。

そこへ通信士官より更なる報告が入る。

「戦艦フロモンより本国へ向けての暗号電文を傍受しました」「本国へだと？」

「はい、計四通を確認」

「なるほど、念の入つた事よ」

笑いの成分をほとんど含まぬ苦笑を浮かべ、コルトは深く指揮座に体重をあずけて艦橋フロアの天井を睨んだ。考え方をする時の彼のクセである。

「暗号パターンは我が軍で使われているものとほぼ同じでしたので解読は容易でした」

「読んでみる」

「では読み上げます。宇宙軍幕僚会議本部への電文です。『パンティは青かつた』続いてコロニー姿勢制御センターへの電文。『パンティは萌えているか』次に宇宙港中央管制センターへの電文。『パンティは死語に非ず』最後に陸上治安軍本部への電文。『パンティは永遠に不滅です』以上の四通です。ふふ」

緊張感に欠ける内容を何とか読み上げ、その通信士官は最後の最後で噴き出した。副官のメアリーもこの状況でどういう表情を作つ

てよいものやら判断に困った様子で天井を見上げるコルトの顔を見下ろしていた。

「何やらおっさん臭い暗号ですね」

「ああ、フロイの野郎は母親の胎内から生まれ出でたその瞬間からすでにおっさんだからな。それにやつは何故かやたらとパンティといつ呼称に固執するんだ。パンツだらうがパンティだらうがその本質は変わりなかろうに。しかしそれを言つとやつは必ず怒り出しながら。まったくもつて始末に負えん」

「それで、この内容にはどういった意味が隠されているのでしょうか？」

「意味？ 意味なんぞないわ。受け取った方はさぞ困惑しているだろうな。断言してもいいが、これはフェイの欺瞞工作であり、やつが王都へ向かおうとしているのも見せかけに過ぎん。理由は……」

この時、味方の発する悲鳴が通信波に乗つていくつも飛び込んできた。

「王都が敵に奪われるぞ！」

「こまままでは我らの方が宇宙の孤軍になってしまつー！」

「王都を守れ！」

「ひなるだらうとは想像していたものの、コルトは歯ぎしりを禁じ得なかつた。

「理由はこれだ。見る、味方の足が完全に止まつてゐる。あのまま追撃していれば敵本隊は確実に瓦解していただろうに。このままではモンテクリスト提督に態勢を立て直す時間を与えてしまっただろうよ」

忌々しげに吐き出し、コルトは通信機を手に取つた。全艦隊に向けて喚起を促す為である。

「何を狼狽えておるか、この低脳どもが！ あれはフロイの擬態だ。そんな事も分からんのか！」

それはどうも目に見ても罵倒でしかなかつた。その数十秒後、スクリーンに現れた第二艦隊司令官、クラムゾン・ボウザ中将も不

快感を隠せない様子でコルトに問う。

「その低脳どもとやらには私も含まれておるのかね？」

「まさか含まれていないとでも？」

「」
口をあんぐりと開き、やがてそれはピクピクと痙攣を始めた。彼は時と場所をわきまえ、その怒氣を爆発させる事こそなかつたが、それを押さえる為にかなりの忍耐を必要としたようであつた。

「まあいい。貴官の反抗的な態度は後日問題にさせてもらつとしてだ。パルタガス准将にはトリー・ダッド艦隊を追つてもらおう」

「フェイを追えですと？ 必要な」と思われますが。やつが行きたいと言つなら勝手に行かせてやればいい。どうせやつの艦隊だけでは王都の対空防御網を突破する事は不可能なのですからな」

「それはそうだが、あの暗号電文の存在にも留意すべきだろ。王都でフェイの動きに呼応する者が現れぬとも限らんではないか」

「あの暗号電文はやつのハツタリですよ。論ずるに足りませんな」「貴官がどういう論理的思考でもつてその結論に至つたのかは知らんが、なんら確証のあるものではあるまい。王都の防衛は最重要課題であり護るには出来ん。第五艦隊からは三つの分艦隊を割いて王都の防衛に向かうそうだ。彼らは月の反対側から回り込んでフェイの頭を叩く。貴官はフェイを追つてやつの背後を突け」

「分艦隊を三つも？」

コルトは思考を柔軟なものに改めてみて、総司令部のこの判断は当然なのかもしれないと思つた。自分のように絶対の確信が持てない以上、ましてや向かつているのがあのフェイである以上、彼らとしては後背の守りに不安を感じずにはいられまい。しかし分艦隊を三つ、約一万五隻もの艦艇を差し向け、今まで自分までもとは、兵力分散の愚もここに極まれりというものではないか
コルトは心の中でそう罵らずにはいられなかつた。

「ではパルタガス准将。フェイ・トリー・ダッドの企図を挫折せしむるにおいて、貴官の才幹に期待させてもらつがよろしいな？」

疑問形を投げかけておいて、ボウザは一方的に通信を切った。これは命令であり議論の必要を認めず、と言つた意思表示であり、不愉快な相手との対話を早々に打ち切りたかったからでもあろう。

コルトは再び天井を見上げて思惑に耽つた。

「ここまではフェイ。お前の目論見通りだらうな……」

ここで自分がフェイの艦隊を追えば、それはフェイに対する戦略的敗北を意味するものではないかとの思いがコルトにはあった。それはひとつ側面から見れば事実であつたろう。フェイの思惑の中に、コルトを引きずり回して戦場より引き離す、といつものも確かに含まれていたのだから。

「ふん、フェイ・トリー・ダッドの企図を挫折せしむるにおいて、俺の才幹に期待する か。よからう！」

コルトは決断した。軍靴で床を踏み鳴らし、颯爽と立ち上がった彼はその指先で、フェイのいる四時の方角ではなく十時の方角を指示示した。

「全艦に通達！ 進路変更左舷三十度、機関最大船速！ 陣形を横陣から密集隊形に移行しつつ近接戦闘用意！」

この瞬間、国王軍の運命は決した。

宇宙軍第六艦隊司令官、アデル・モンテクリスト中将は、フェイに与えられた時間を最大限に利用し、後退しつつ陣形の立て直しを果たした。その手腕は見事の一言に尽きるが、寄せ集め艦隊の欠点である艦隊編成の不備は如何ともし難い。

その急所とも言える場所へコルトの突撃を受けた時、モンテクリストの艦隊は一瞬にして分断された。

本来、フェイが相手であればコルトもこのよ^うな策は使わなかつたであろう。中央突破は相手に柔軟で敏速な艦隊運動能力があれば、逆に半包围される危険を伴う。あるいは普段のモンテクリストであれば、その方法でコルトを危機に陥れたかもしない。しかし今、

彼の艦隊に柔軟で敏速な艦隊運動など望むべくもなく、動かそうとした手足は緩慢な動きを見せた挙げ句、痙攣にのたうち回る羽目となつたのである。

もはや戦火は地球へと向かう国王の旗艦、戦艦グランドキャララバッショの周辺にも届き始めていた。突破を果たした敵の一部が追撃してきたのである。

「グランブリア撃沈！ カルパチオ・フォンセカ提督戦死！」

「カルストラーク大破！ クライスラ・ボリバール提督戦死！」

踵を接して届く訃報にオペレーターの口は休む暇無く動き続けていた。そして更に、国王にとつては極めつけの訃報が届く。

「せ、戦艦グオルグ撃沈！ アデル・モンテクリスト提督戦死！」

「あのアデルが……」

国王アレクサンドル・チャーチワードンは愕然とつぶやいた。彼は良き忠臣であり、かつての学友でもある無一の友を失つたのである。戦場を振り返り、アレクサンドルは深い默祷を捧げた。固く閉じられたその瞼からは哀惜の零がにじみ出て重力に身を委ねている。その時。許容量を超えた、強烈な閃光が艦橋内に走り、目を閉じていた国王以外の乗組員、全ての視力を奪つた。護衛艦の一隻が被弾して傾ぎ、グランドキャラバッショに接触して轟沈したのである。その凄まじい破壊エネルギーは電磁シールドを突き抜け、爆風はグランドキャラバッショの艦橋をもなぎ払う。隔壁が吹き飛び、酸素が流出する。艦橋内は一瞬のうちに阿鼻叫喚の巷と化した。一瞬の後、開いた穴は新たな隔壁が閉じる事により自動修復され、酸素の流出は止まつたが、艦橋内は嵐が過ぎ去つた後のような悲惨な状態であつた。

侍従長のルビ・ラモン・アロネス子爵も転倒をまぬがれず、床に後頭部を強打してほんの数瞬意識を失つていたが、負傷者の悲鳴で我に返り、起き上がつて国王の姿を探し求めた。

国王の姿は直ぐに見つかった。しかし、ルビはその姿を見て啞然となる。

国王アレクサンドルはこの時、高速回転しながら飛び交う壁面パネルの破片により、負傷していたのである。ひとつは左腕を肩口から切断し、もうひとつは右胸部へ突き刺さり肋骨を碎いて肺にまで達していた。致命傷であった。左肩から血を噴き出し、口から血のあぶくをしたたらせ、それでもなお、国王アレクサンドルは立っていた。

「陛下！」

その声に国王がルビの方へ顔を向ける。その惰性のままに姿勢を崩し、国王は床へ倒れ込んだ。

「陛下！」

国王を見下ろすルビの表情は絶望に染まっていた。これが致命傷である事はルビにでも分かる。アレクサンドルはルビを見上げ、残つてゐる右手でルビの手を掴んだ。

「リティアを地球へ。国王としてではなく父として、あの娘にはせめて平穏な生涯を送らせてやりたいと思う。頼んだぞルビ」

「陛下の御意のままに」

アレクサンドルの右手を両の手で握り返し、ルビは涙ながらに何度も頷いた。聴力と視力。どちらかが失われていても国王に伝わるようになるとの配慮からである。それを見、あるいは聞き、安心したかのように国王は笑つて見せた。

「そちにも苦労をかけたのう。その後の事はそちの好きにするがよいぞ。國へ帰つてエグゼルの沙汰を待つもよし。あの者にとつてもそちは育ての親。そちに對してそう惨い仕打ちもすまい。余生を静かに過ごすがよい。余にはなかつたものだが、せめてそちには……」

そう言つて、国王は静かに目を閉じた。

「へいかーつ！」

「もうそつとしておいてくれ。アデルが呼んでおるでな」

その言葉を最後に、国王アレクサンドルは息絶えた。享年五二歳。長いとも短いとも言えぬ生涯を送り、それは今までに閉じられたのであった。

ルビ・ラモン・アロネスは呪つた。この戦を呪い、神々を呪い、この世の全てを呪つた。呪わざにはおれなかつた。

「天地人の神々よご照覧あれ！ 今、あなた方の子孫で在らせられるアレクサンドル四世陛下があなた方、神々の元に召されましたぞ。私は神々に問わん。陛下はまこと明君で在らせられた。それがなぜ、何故にこの様な場所でこの様な惨い死に様を強要されねばならぬのか、お答え下され。さあ、答えよ。答えぬか！」

血涙の水脈は枯れるところを知らず、ルビは国王の遺骸に取りすがり、いつまでも肩を揺らしていた。

慟哭が、やがて咽び泣きへと変化した頃、その肩に手を置いた者がいた。戦艦グランドキャラバッシュの艦長、アレン・グリフィノス大佐である。

彼はまだ三〇歳の若さではあるが、自慢の髭が風格を醸し出しており、実年齢よりも上に見える。そして今は顔の右反面を血で真っ赤に染めており、さらに凄みが増していた。彼は右目に突き刺された金属片により負傷していたのである。グリフィノスは残った左目でルビを見下ろしていた。

「ルビ殿、お気持ちは痛いほど良くな分かる。しかし今は時間がございませんぞ。陛下のご遺言をお忘れではござるまい」

「遺言……」

リディアを地球へ　この国王の言葉がルビの脳裏で鮮明に蘇る。肩の震えが止まつた事を手の感触と自身の左目で確認し、グリフィノスは現在の状況をルビに説明しようと試みた。説明と、それに加えて説得せねばならぬ事があつたのである。

「先ほどの衝撃により、この艦には甚大な被害が出ております。動力炉の損傷により機関は停止し、今は慣性航行の状態です。コースも外れてしまい、もはや我々が地球の周回軌道に到達する事は不可

能となりました

「なんだと？」

驚愕に顔を歪めるルビ。しかしこんなものはまだ序の口だと言わんばかりの口調でグリフィノスの説明は続く。

「まだあります。格納庫が被害を受け、小型艇もほとんどやられてしましました。今この艦に残っている機体で地球の大気圏突入に耐えうるものと言えば、一人用のP-3脱出ポットが一機あるのみです」

「P-3だと？ 自走能力もないそのようなもの、機体とも呼べん代物じゃないか。それでいつたいどうやって……」

「まあお聞き下さい」

グリフィノスは両手を広げてルビの言を制した。敵は一刻と迫つてくる。今は護衛艦が楯となつて防いでくれてはいるが、それが突破されるのも時間の問題であろう。ゆっくりと問答している暇はないのである。

「P-3をここから射出しても地球へ到達させる事は実質可能ですが、実行は困難と言わざるを得ません。地球までの距離があまりにも遠く、また、大気圏突入コースに乗せる為には速度も制限されるからです。必ずや途中で敵に捕捉されてしまうでしょう。そこでひとつ的方法があります。時空震発生装置を使用し、P-3を地球の大気圏突入コースまで空間転移させてしまうのです。後の回収はASAに頼めばいいでしょう」

「そんな事が可能なのか？」

「理論上は可能です。成功率は九五パーセントと言つたところをどうか」

「九五パーセント……、残りの五パーセントはどうなるのじゃ？」

「さあ、亞空間を永遠にさまる事になるが、原子レベルにまで分解されるか、見た者はおりませんので何とも」

「そ、そんな危険な目に内親王殿下を！」

「しかしそれ以外に内親王殿下をお逃がしする方法はありません。

このままだと殿下に待ち受けている運命はこの艦もろとも爆死するか、敵の虜囚たる身に甘んじるかのどちらかしかない。そしてこれは私見ですが、恐らく内親王殿下が敵の虜囚となつた場合、彼らは殿下を生かしてはおきますまい

このアレン・グリフィノスの私見はルビの見解に一致した。ゼロパーセントと九五パーセント。議論の余地はなさそうであった。

「わかった。貴官の言う通りにしよ」

ルビがそう言つと、グリフィノスはホッとしたように長い溜息を吐き出した。

「では右舷射出口へ急ぎましよう。すでに内親王殿下はボットの中です。後は簡単な微調整を残すのみ」

「なんじゃと？ もしわしが許可せなんだらどうつもりだったのじゃ」

「ああ……」

グリフィノスは笑つてルビの後方を指をした。ルビが振り返つて見ると、士官がひとり、ルビの後頭部に銃を突きつけていた。

「貴殿を殺さずに済んで良かつた」

笑顔でそう言つてグリフィノスは歩き出す。ルビは首を竦めて彼の後に続いた。

現在、重力制御エレベーターは止まつていて、彼らは階段を駆け下り、通路を早足で駆け、グリフィノスが右舷射出口へたどり着いたのは約五分後であつた。この時点ではまだルビは到着していない。文官であり老人なのでその辺りは仕方ないであろう。

グリフィノスが振り返つて見ると、遠くにルビの健在な、とは言い難い姿を認める事が出来た。苦笑を漏らしつつ、技術士官のスカル・ファン・ロペス大尉から差し出されたタオルを受け取り、グリフィノスは顔にこびり付いている血を拭つた。

「どうだ？ 補助電力で出力は足りるか？」

「その辺は問題ありませんよ。ただメインの時とは違つて全て手動ですからね。逆にオーバーフローしないように制御するのが難しい」

「大丈夫か？」

「なあに、何とかやつてみせますよ」

「頼んだぞ」

この後、一二、三の技術的な事を確認し終えた頃、ようやくルビが到着した。肩で息をしつつ、彼はヨタヨタと△ 3脱出ポットに歩み寄った。ポットはまだ閉じられておらず、その周囲にはメイド服を着込んだ数人の侍女が、悲しげな表情でリディアを見守っている。ルビが見ると、リディアは胸の上で手を組んだ状態で、安らかな寝息を立てていた。彼女はルビにノックダウンされて以降、麻酔により眠り続けているのである。創造主達の高度な医療技術により、ガゼルパンチと「一クスククリュー」による顔の腫れもすっかりと消えている。

とは言え、リディアに仕える侍女達の、ルビを見る目は冷たかつた。

「許せませんわッ！ 殿下に近づかないで下さいましッ！」

ひとりの侍女が立ちふさがってそう言つと、他の全員が力強く頷いた。

「い、いや、あれは仕方あるまい。その方らも見ていたであらッ」「見てしまつたわッ、しつかりとね！ 殴るのは仕方ないでしょ。でも同じ殴るにしても限度つてものがあるでしょう。殿下は女性なんですよ！」

「そうですッ！ あのガゼルと「一クスククリュー」のコンボは酷すぎますわッ！ お吹き飛び遊ばされた殿下はピクピクと「痙攣遊ばし」それはもう「不憫で」不憫で……、ううう……」

「それにその後が許せませんわッ！ あのガツツポーズはいつたい何なんですか？」

「嬉しそうに、ざまあみろとも言つてましたわね」

「そうそう、それから正義は勝つとも。てことは殿下は悪ですか？ どうなんですか？」

ここで全員が揃つて一步踏み出した。

「はつきり仰つて下さいませっ！」

非難の大合唱を受け、ルビはタジタジとなつた。助けを求めるようにグリフィノスに視線を向けるが、彼はそんな事にかかずらわっちゃおれんとばかりに作業に専念している。

「畜生め！ みんなで寄つて集つてわしを悪もんにしおつてからに。わしがこれまで、どれだけの苦渋と苦痛を味わつてきたと思つともんじや。股間を蹴り上げられる事數十回。これまで宦官にならなかつたのが奇跡というものじやで。貴様ら女どもにあの激痛と苦しみは理解できまい！」

と、心の中で毒づきながら、ルビは頭を下げる。

「いや、済まんかった。これ、この通りじや」

感情的になつた女性を黙らせるにはひたすら頭を下げるしかない。長い人生の中でルビはそれを学んでいたのである。

侍女達は顔を見合させ、不承不承の体で引き下がつた。

「内親王殿下……」

ルビはリディアの寝顔を見下ろした。涙腺が弛み、リディアの凜とした美しい顔が滲んで見える。

「思い起こせば殿下とは色々とございましたな。もつ一度とお会いできる機会はござりますまい。名残惜しうございますが、どうかご息災で。地球での殿下の平穏な生活を臣は心より祈つておりまするべ」

ルビのこの言葉は真摯さに満ちていた。侍女達も涙ぐみ、ひとりの侍女がルビにハンカチを差し出した。心を打たれたからであり、和解の意思表示でもあつたうつ。ルビはそれを受け取り、涙を拭うとリディアに手紙をしたためた。彼女は父である国王の死をまだ知らない。その経緯を事細かに記し、彼はリディアの胸元にそれを置いた。国王の最後の願いをリディアに伝えたかったのである。

「そろそろいいですかな？」

グリフィノスの声がした。

P 3 脱出ポットの蓋が閉じられロックされると、強化特殊ガラ

スの小窓から覗くりディアの顔を、侍女達はその目に焼き付けるようになつめていた。いつまでもその場を離れようとしない彼女達を兵達が抱えて制御室へと連れて行き、皆の移動が完了すると、ハッチが閉じられ、代つて射出口が開いた。やがて時空震発生装置の照射が始まり、四ヶ所から放射される白いビームが宇宙空間を走る。それらは徐々に集束していき、やがてビームが一点に集まつた時、白い火花が走り時空が歪んだ。

「今です！」

「ポット射出！」

ファン・ロペスが叫び、グリフィノスが叫ぶ。

だがその瞬間、被弾により戦艦グラントキヤラバッシュに衝撃が走つた。電磁シールドによつて弾かれはしたもの、凄まじい振動が艦を揺さぶる。侍女達は悲鳴をあげつつ転倒しかけ、ルビ達男性陣がそれを支えたが、誰も発射口からは目を放さなかつた。この時、時空震発生装置の出力が異常をきたし、オーバーフローを起こしていたのである。瞬間、白い火花が青白く変化し、そこを射出されたP-3脱出ポットが通過した。と言つよりも消えた。

皆、啞然とポットが消えた宇宙空間を眺めていた。これが成功なのか失敗なのか、判断に窮したのである。やがて、思い立つたように全員同時にファン・ロペスの方に視線を向けた。そのロペスは言う。

「今の感じじゃ大丈夫。成功ですよ。まあこれは長年の感みたいなものなので、理由は聞かないでくださいね」

自信満々に笑つてロペスはそう言つた。皆はホッと安堵の溜息を漏らす。グリフィノスはロペスの肩をポンポンと二度叩き、無言で労をねぎらつた。

「さてと、じゃあシメと行くか」

グリフィノスが独り言のようにそつ言つて、ルビはその意味するところを的確に理解し、苦笑を漏らした。

「貴官は戦ったからうな」

「まあね。しかし自分のメンツの為だけに部下を死なせるわけにはいかんでしょう」

片眼の大佐はそう言って笑い、通信機を手に取った。艦橋へ向け、全護衛艦へ向け、敵への降伏を指示する。

肩の荷を下ろしたようにグリフィノスは床へ座り込み、ルビを見上げた。

「ところで、そう言うあなたの方こそ、これからどうするんです？まさか陛下の後を追おうなんて思つてるんじゃないでしょうね」

「そうしたいところじゃが……」

ルビも疲れ切ったように床に腰を下ろした。

「きつと陛下はお許しにならんだろう」

「じゃあ、生きるしかないですね。生きてりやうやつって美味しい煙草も吸える」

グリフィノスはポケットから取り出した葉巻の吸い口を歯で噛み千切つて咥え、ライターで火を付けた。ルビにも一本進めるが。

「申し訳ありませんが艦長、制御室は禁煙です」

ファン・ロペス大尉が仁王立ちでそう言って窘めた。

やがて、降伏した戦艦グランドキヤラバッシュに乗り込んできたのは、敵将、コルト・パルタガス准将であった。それを艦橋で出迎えたのは、今回の戦いで右目を失った艦長、アレン・グリフィノス大佐である。彼はあれから一応の応急処置を受け、今は黒い眼帯を装着していた。中々に渋い、と本人は満足そうである。

国王アレクサンドル・チャーチワードンの亡骸はすでに別室へと運ばれ、侍従長であるルビ・ラモン・アロネス子爵が付き添っているが、コルトは先ずそちらへ赴き、敬意と礼節とを以て国王の遺骸に拝謁した。副官のメアリー・ベグエロス大尉を伴い、暗く沈んだ面持ちを艦橋へと運んできたのはその後の事である。

艦橋に一步足を踏み入れたコルトは、その無残な有様を見て一瞬、啞然と佇んだが、グリフィノスの存在に気づき、僅かに頬を弛ませた。

「しばらく見ぬ間に男ぶりが上がりましたね、グリフィノス先輩」「ああ、これでモテるようになれば貴様に礼を言わねばならんところだろうな。おっと、今は准将だったな。これは閣下と呼ばねばならんかな？」

「いや、先輩に閣下などと呼ばれるところばゆいですよ。これまで

通りコルトで結構」

「ではコルト。降将であるこの身を貴官にあずける。煮るなり焼くなり好きにしてもらつて構わんが、部下達には寛大な処置が下らん事を切に願う」

「お任せ下さい。先輩の部下はもちろん、先輩にも指一本触れさせませんよ」

このグリフィノスはコルトやフロイの四つ年長であり、彼らが士官学校の学生だった頃、艦隊戦術の特別講師をしていた事があった。国王アレクサンドルに見込まれ、国王の御座艦である戦艦グランド

キヤラバツシユの艦長に就任した為、大佐に据え置かれたままとなつてゐるが、本来であればとつゝの昔に将官になつていてもおかしくない逸材である。フェイやコルトが一日も一日も置く男であつた。もつとも、フェイがグリフィノスに敬語を使った事など一度もないのだが、そんな事には頓着しない良き先輩である。

「こんなところで立ち話もなんだ、場所を移そうか」

グリフィノスの案内で彼らは士官専用のラウンジルームに移動した。彼はソファーを指し示してコルトに座るよう促すと、自らも腰を下ろし、ポケットから出した葉巻を咥えようとした。しかしその途端、その動作を硬直させ、キヨロキヨロと周りを見回し始めた。その様子を見たコルトが訝しげに問う。

「どうしたんです、先輩？」

「いや、我が艦にはとんでもない禁煙家がいてな、我が物顔であちこちに禁煙ステッカーを貼つて回つてるんだ。あいつに見つかったらつひさいのなんの」

苦笑と共にそう言つたグリフィノスは、安全確認を終え、改めて葉巻を咥え火を付けた。コルトが周りを見渡すと、確かに禁煙ステッカーが方々いたるところに張つてある。部下に喫煙を咎められているグリフィノスの姿を想像し、微笑ましい気分になるコルトであった。

グリフィノスは美味そうに煙を吐き出し、コルトにも葉巻を勧めながら、久しぶりに会う後輩にマジマジと視線を注いだ。

「そう言えばコルト、貴様が准將に昇進してから初めて顔を合わせんだつたな。暫く見ぬ間に随分と立派になつたもんだ」

「先輩の方こそ、この艦の艦長になつていなかつたらとつゝの昔に将官に列していたでしょ？」

「いや、階級の事を言つてるんじゃない。今回の貴様らの戦いを後方から拝見させてもらつたが、実に見事だつた。貴様にしてもフェイにしても、もう既に俺を越えたな。まったくもつて不愉快な後輩どもだ」

そう言つて快活な笑い声を上げるグリフィノスであった。この時、受け取つた葉巻に火を点したコルトがやや表情を硬化させた。煙に呑せたわけではない。この数秒後、コルトの暗い声がグリフィノスの耳に届く。

「先輩、陛下がNASAへ亡命しようとしていたという噂を聞きました。まことの事ですか？」

グリフィノスはこの時、コルトが先ほどより時折見せる、重苦しい表情の意味をようやく悟つた。笑いを収め、暫く無言で応じたグリフィノスではあつたが、ここで隠してもいづれはコルトも知ることになるう。彼はこの質問に答えた。

「ああ、陛下はこれ以上戦火が長引かぬよう、ケレスへ向かう事を拒否され、NASAへの亡命を決意されていたのだ」

この言葉にコルトは深々と頭を垂れた。まるで目に見えぬ何者かに押さえつけられでもしたかのように。

「そうでしたか……。部下達にはこの艦への攻撃は差し控えるよう伝達していたのですが、命令が行き届きませんでした。我が身の不明を呪うばかり」

「いや、この艦の損傷は僚艦の爆沈によるものだ。貴様が気に病む必要はない。それにまあ、あれだ。勝つも負けるも平家の常、生きるも死ぬも時の運つてな。陛下も貴様を恨んじやいないだろうぜ」

「恐縮です」

グリフィノスの優しさが身に染みる。コルトは僅かに微笑を取り戻してそう答えた。

この後、取り留めのない話を一、二、三、消化し、不意にコルトが話題を転じた。

「時に先輩。内親王殿下はどうなされたのですか？」

グリフィノスは一瞬、その瞳に警戒の色を浮かべ、頭を搔きつつ視線を右へ左へと泳がせた。この仕草が嘘をつく時のグリフィノスのクセだという事をコルトは知っている。

「ああ、殿下はお亡くなりになられた。艦橋の隔壁に穴が開いた時、

宇宙空間に投げ出されてしまつたんだ」

完全な棒読みである。芝居の下手な人だ コルトは失笑を堪えるのにかなりの労力を必要とした。

「こちらおう報告しておきますと、我々の方で時空震の歪みを観測しました。先輩はこの事を『ご存じで?』

「さ、さあ、それは知らんかったなあ。はつはつは……」

笑い声まで棒読みといつ、この不器用極まりないグリフィノスの嘘に、危うく噴き出しそうになるコルトだったが、それをなんとか喉元で留め、意味ありげな笑みを浮かべて見せた。

「そうですか、我が艦隊でそれを知つてゐるのは私とこのメアリーの他、数名だけです。これについては既に箇口令を敷きました。内親王殿下の事はまあ、そう言つ事にしておきましょ。上にもそう報告しておきます」

「よろしく頼む」

グリフィノスは複雑な表情を浮かべたが、素直に感謝の気持ちをそう表した。彼としては自分が嘘の付けない体質だという事など重々承知しているが、こうもあからさまにバレバレですよという顔をされると、さすがに不愉快なものがあつたのである。しかしそれを補つて余りあるコルトの好意であり、そこは素直に受けておく事にした。

「しかし……」

「コルトは人の悪い笑みを改め、表情をやや深刻なものに変化させた。

「一度開いた時空トンネルはその消滅までに数年を要します。その存在も使用目的も、隠し果せるかどうかは運次第と言つたところでしょうね」

「まあ、その辺りは祈るしかないな」

そう言つた後、グリフィノスは誘導尋問に引っかかつた容疑者の様に表情を引き攣らせたが、コルトにしてみれば何を今さらといったところであつたろう。彼は敢えて見なかつた事にして話題を転じ

た。

「まあ何はともあれこれで戦も終わりです。第六艦隊も降伏し、後はフェイの艦隊だけですが、やつの降伏も時間の問題でしょう。本隊無き今、やつの艦隊だけではケレスへたどり着くまでの食料はないでしようからね。降伏か玉碎か。やつなら玉碎という道は選ばんでしょう」

この三時間後。コルトの予想は当たった。フェイは月へ取つて返した三つの分艦隊に対しても降伏の意志を示すと共に、「出迎えご苦労」と言い放つたのである。これを伝え聞いたコルトとグリフィノスは、フェイらしいとの笑いを禁じ得なかつた。

何はともあれ、彼ら創造主達の戦はこれを以て集結した。

斯くしてこの王太子の乱は成功したかに見え、次の玉座に座る者は王太子であり勝者であるエグゼル・チャーチワードンであろうと誰もが思つた。しかし戴冠式の当日、王冠をその頭上に戴いたのがエグゼルの三歳の息子、セレムト・チャーチワードンであつた事に創造主達は驚愕した。この幼少の新国王を抱きかかえていたのは、彼の大叔父であり宰相であるトニオーレ・アップマン公爵であつた。彼はこの時、後見人としての絶対的な権力を以て屹立し、創造主達を睥睨していたのである。

王太子エグゼルはこの叔父であるアップマン公爵により、謀反の罪で拘禁され、良心の呵責に耐えきれず服毒自殺を遂げた。と公式には発表された。しかしエグゼルの自殺を発見したという兵の顔や腕に、無数の歯形や引っ搔き傷があつたという事が公にされる事はなかつた。だがそれは創造主達の口の端に上り、風聞となつて月面を覆う事となる。事ここに至り、創造主達はこの反乱の眞の黒幕が誰かという事を、苦い思いと共に知る事となるのであつた。

それから一年。

地球へたどり着いたリティアは一応の平穏を取り戻し、月での喧

騒とは無縁の時間を過ごしていた。とはいっても、彼女はNASAへの亡命を果たしたわけではなかった。グリフィノスらが予想だにしなかつた事態が、彼女の身に起こっていたのである。

着弾による衝撃が時空震発生装置のオーバーフローを引き起こし、発生させた時空震に計算外の誤差を生じせしめていたのだ。空間軸はともかくとして、それは時間軸にまで影響を及ぼしていており、その差はざっと一千数百年。グリフィノス達は意図せずしてタイムマシーンを発明した事になる。彼らがこの事に気付くのはもう少し先の話であるが、何はともあれ今はリディアの事である。

現在、初のタイムトラベラーであるリディアは過去の日本にいた。一〇一一年から正確に数えると一二二八年前、西暦六八三年の日本にである。

大和にある奈良盆地の夏は暑い。彼女は最近、近所の葛城川で近隣の子供達と川遊びに興じるのが日課となっていた。

「あおじーっ、こむらーっ。あんまり遠くに行くと流れちゃうわよーっ！」

「平気だよーっ！ かぐやもおいでよーっ！」

かぐや。これが地球でのリディアの名前であった。竹藪に軟着陸したリディアは、発見された当初、記憶を失っていた。タイムトラベルの後遺症によるものか、大気圏突入時の衝撃によるものか、はたまたガゼルとコードスククリューによるものか、それは判断のしようがない事ではあるが、リディアが記憶を取り戻すまでに数ヶ月間の時を要したのは事実である。

その間、リディアを拾つた讃岐造麻呂さぬきのみやつこまろは知人である御室戸斎部みむろどさいぶの秋田を呼んで名付け親になつてもらつた。リディアの輝かんばかりの黄金の髪を見たその秋田は、竹藪で発見された事と合わせ、リディアに『なよ竹のかぐや姫』と名付けたのである。

その後、リディアは徐々に記憶を取り戻し、讃岐造麻呂さぬきのみやつこまろが保管していたルビからの手紙により父の死を知つた。しばらくは悲しみに沈み込んでいたリディアではあったが、生来の楽天的な性格と持ち

前のポジティブさとでそれを克服し、今では普段の明るさを取り戻しつつある。

「かぐやーっ、早くおいでのーっ！」

「あたしはここでいいわ。深いところは怖いもん」

リディアは着物を脱ぎ、下に着ている白く薄い着物を太股辺りまでたくし上げ、膝丈までの浅瀬を行ったり来たりしていた。

「きつとかぐやは河童が怖いんだぜ」

「そう言えば昨日も河童を見たって言つてたね」

「やーい、かぐやの嘘つきーっ！」

「本当に見たんだもん。あれは絶対に河童だったんだもん。昨日なんて、緑色の物体がぬーって私の股の間をくぐり抜けていったんだもん。本当に本當なんだからねっ！」

リディアは力説するが子供達は信じない。人数分の疑惑の眼差しがリディアに注がれていた。

「まだ言つてら」

「おい、みんなで嘘つきかぐやに水ぶつかけてやろ!」

ひとりがそう提案すると、みんながリディアに群がった。

「わーい、わーい」

子供達は嬉しそうに声を上げ、リディアに向かつて水をかけ始めた。

「きやつ、冷たい！　みんな止めて！」

「わーい、わーい」

四方八方から水飛沫を浴び、リディアは瞬く間に水浸しなった。濡れた薄い着物が肌に吸い付き、リディアのプロポーションをくっきりと際立たせていく。

「ちょっと、みんな止めなさい。止めなさいって言つてるでしょー。」「わーい、わーい」

子供達は面白がって、止める気配など微塵もない様子だった。最初は笑っていたリディアもだんだんと顔が引き攣ってきた。

「ちょっと、止め、止めなさいってば。止めて！　止めっ、やつ、や」

……や……、や、め、ろ、つってんだろーが、こんクソガキどもが
つ！」

子供がひとり宙を飛び、水面に大きな水飛沫を上げた。

「うりや つ！ 往生せえや つ！」

ひとり、またひとりと宙を飛び、その度にザップーンと大きな水飛沫が上がる。やがて、なだらかな流れを取り戻した川面で、泣き声の大合唱が始まった。

「あらま、あたくしとした事が、おほほほほ」

西暦六八三年、天武天皇一二年。暑い暑い真夏の昼下がりの出来事であった。

「うわーん！ うわーん！」

「母ちゃんに言いつけてやるーっ！..」

「うえーん！ うえーん！」

「かぐやなんて河童に尻子玉抜かれちまえーっ！」

「うおーん！ うおーん！」

騒々しい子供達の泣き声と捨て台詞が徐々に遠ざかっていき、代わつて蝉の鳴き声と川のせせらぎがリディアの聴覚を支配し始める。ちょっとやり過ぎたかと反省しつつ、リディアは川面から突き出した岩に腰を下ろした。

まあ子供達の事である。明日になればすっかりと機嫌を直し、いつもの笑顔でリディアに接していくであろう。これまでもそうだった。小憎たらしいガキどもではあるが、そんな子供達をリディアは愛し、子供達も彼女の事を慕っている。

「エヘッ」と声に出して笑い、リディアは川に膝下まで浸けた足で交互に水を蹴り上げ始めた。

水飛沫が上がり、バシャバシャと音を上げる。小さな水滴のいくつかが風に乗つて流れ、リディアの顔に清涼な息吹を注いでくれる。実に心地よいひとときであった。

だがリディアはふと気付く。水飛沫のバシャバシャといづ音に混じり、背後から小石を踏み鳴らすジャリジャリといづ音が響いてくる事に。

気のせいではなかつた。リディアが振り返つて見ると、男が三人歩いていた。それも、明らかな意志をもつてリディアに向かつて歩いてくる。その表情は殺氣に満ち、彼女を睨むその目には憎悪が煮えたぎつている。

リディアが立ち上がり身構えると、彼らは速度を上げ、彼女を三方向から包囲するように立ち塞がつた。じわじわと包囲網を狭め

つつ、真ん中に立つ男が叫んだ。

「見つけたぞ、この疫病神め！」

疫病神。聞き慣れたその言葉にリディアはうんざりした。ここ一年、そう言って何度も罵られた事か。それはいくら聞き慣れたとて耳に心地よいものではない。

何故にリディアが疫病神呼ばわりされるのか、呼ぶ方にもそれなりの理由はあった。土俗的で身勝手な理由ではあるのだが……。

黄金の髪に青い瞳という特異な容姿を持ち、空から降ってきたと噂されるかぐや。そんな彼女の出現は、迷信深いこの時代の人々の関心を集めずにはおれなかつた。いつたい何者なるやとの憶測が飛び交い、結果として人々はリディアの存在に一喜一憂する事となる。何か吉事があればかぐや大明神だと言つて崇め奉り、いざ凶事があれば、災いをもたらす疫病神だと言つて憎悪の対象となす。疫病が流行ればかぐやのせい。凶作もかぐやのせい。家人に不慮の死であればそれもかぐやのせい。何でもかんでもかぐやのせい。いい加減にしろとリディアは言つた。この時代に来る前の日本を彼女は知つている。仕事がないのは社会のせい。貧乏なのも社会のせい。何でもかんでも人のせいにして自分は被害者だと主張する。一年以上の時を隔てた今も未来も、人間のメンタリティーにそう大した違ひがない事を彼女は知つた。

もつとも、それは創造主達とて同様であり、先祖達が自分達に似せて造つたという人類に、自分達の短所まで似ている事がリディアには滑稽ですらあつた。人々に罵られ、石を投げられる度にリディアは皮肉めいた冷笑を心の中に浮かべたものである。

とは言え、今は表情であれ心中であれ、冷笑などを浮かべている余裕は無かつた。目の前の人間達が手にしている物が小石などではなく刀である以上、これは当然の事であつたろう。この時代特有の反りのない真つ直ぐな直刀が鞘から抜き放たれ、その平作りの刀身が陽光を不気味に乱反射させていた。

「あつ、あたしがあんた達に何したつてのよつ！」

声が震えた。かつて無かつたこの大ピンチを前にしては、さすがに強気のリティアも啖呵にキレがない。

「何したかだと？ オラ達の畠は全滅だ。この疫病神め！」

「そうだそうだ、黄金の髪に青い眼なんて人じやねえ、こいつは疫病神に違ひねえだ」

「オラ達百姓はなあ、年貢を納めらんねえと村を逃げ出すしかねえ。何もかもお前のせいだ！」

「許しちゃおけねえ、殺つちまうだ！」

「そうだ、殺つちまうだ！」

彼らが発散する凄まじい殺氣にリティアは気圧された。彼女ははじめじわと後ずさる。走って逃げたいところではあるが、濡れて重くなつた着物が肌に密着し、思うように身体が動かない。そればかりか、濡れそぼつた白く薄い着物が肌に吸い付くと、何もかもが透けて見える。それはリティアのツンと尖つたピンク色の乳首と、僅かに生えそろつた黄金色の恥毛とを赤裸々に浮かび上がらせていた。どちらかと言えば幼児体型のリティアではあるが、それはそれでエロさを醸し出していくと言えよつ。

男達はゴクリと生睡を飲み込み、田の血走りを別のベクトルへと全力で転換させた。この邪念とも言ひべき桃色の視線に気付いたリティアは慌てて胸と股間に手をやるが、時すでに遅し。

「オ、オラ、こいつのおいどにぶち込みたくなつただ」

「オラもだ」

「オラもだ」

意見は満場の一致をみた。

「姦つちまうだか？」

「そうだ、姦つちまうだ」

「オラ、もう我慢できねえだ。姦つちまうだ」

彼らの殺つちまうだが姦つちまうだへと変化し、リティアの生命の危機が貞操の危機へと変化した。

「乳房は少し物足りねえが、顔は中々ええだ」

「確かにちょっと物足りねえだな」「てか、全然ねえだな」

近代以前、日本では女性の乳房は小ぶりなものが是とされてきたという歴史がある。この時代とて例外ではなく、その人々をして物足りないと言わしめるリディアの胸は、かつて、かの「コルト・パルタガスが大絶賛したと言われるほどの貧乳であった。

「ふつ、ふ、ふ、ふふつ、ふざけんじやないわよっ！」

気にしている事をズバリと言われ、リディアの怒りが恐怖を遙かに凌駕した。両の拳を振り上げるリディアだが、透けて見える乳首と恥毛に気づき、再び身体を縮こまらせてそれを隠す。

しかしその隙にひとりの男がリディアの背後へ回り込み、後ろから組み付いてリディアの喉元へ刃を突きつけた。これにより、リディアは完全に身動き出来なくなる。

「へつへつへ……」

しかもそれだけではなかつた。その男は左手を着物の中に突つ込んで、彼女の乳首を摘んでコリコリと騒りだしたのである。揉む胸がないのでこれは当然の責めスポットであろう。

「ちょ、ちょっと、何すんのよ！ 止め、止めてっ、あ、ああ……、あ、あん……」

貧乳は乳首の感度が良い 　 という事を、何かの雑誌で読んだ事があるリディアだが、彼女はそれを身をもつて思い知らされる事となつた。男はこのリディアの反応にますます興奮した。

「うおおおおおおおおっ！ オラもう我慢出来ねえだ！」

さらに男は後ろから身体を密着させ、腰を力ク力クと動かし始めた。乳首への刺激と相まって、快感とも悪寒とも名状し難い戦慄がリディアの背筋を走り抜け、彼女の全身をザワザワと総毛立たせる。

「いやーっ！ 助けてーっ！ 誰か助けてーっ！」

リディアが他人に助けを求めたのは、あるいは人生の中でこれが最初であつたかもしれない。道からはかなり外れた人通りのないこの場所では、助けなど期待できようはずもないものを。

しかし天はリティアに味方した。ひとりの男が通りかかったのである。

年の頃は二十四、五だろうか。その青年は標準よりも遙かに長い直刀を、帯びるでもなく、佩くでもなく、飄然と肩に担いでいた。貴公子然としたその顔だちは、だがしかし、この世の全てに絶望でもしたかのように暗い影を落している。

とは言え、中々に腕は立ちそつた。少なくとも暴漢どもはそう思い、刀を向けて身構えた。だが……。

その青年は何事もなかつたかのように通り過ぎていく。

男達は啞然とその背中に視線を送つた。当然ながらリティアもである。この状況では彼女の方がよほど深刻な事態であつたろう。

「ちよつと、そこのおこにやーん！」

無視。

「ちよつと待つてよーっ、そこのイケメンのおこにやーん…」

さらに無視。

「待つてつてんでしょう、このすうとじじつここ… 乙女のピンチに何シカトこいてんのよー…」

ここでやつとその青年は立ち止まつた。

「すうとじじつこことは聞き慣れぬ言葉だが、それはわしの事かな？」

「あんたしかいないでしようがっ！ この状況見てあんた、何も感じないの？ 助けてやろうとか思わないわけ？？」

「はて……」

その青年は眼を細めて周囲を見渡し、改めてリティア達に視線を注いだ。

「これはどちらを助けたらよいものやら」

意味不明の言葉を吐き、その青年は坦いでいる長刀を肩から下ろした。その動作に男達は色めき立つ。リーダー格の男が青年に刀を突きつけた。

「や、やめうつてのか？ 言つとくがオラ達は義賊だぞ！」

「ほほう、義賊だと？ 義賊が白毬堂々と女性を襲うとはな。ビンの義賊だ？」

その青年はそう言った。リディアも口を挟む。

「あんたらさつき百姓とか言ってなかつた？」

「お、お前は黙つてろ！」

狼狽の声を上げ、リディアに組み付いている男が彼女の口をふさいだ。

「フガフガフガ……フガフガ……」

冷や汗を垂らしつつ、リーダー格の男が話を続ける。

「どこの義賊かだと？ 聞いて驚くな。オラ達はなあ、なかとみのふひと中臣史なかとみのふひと率いる義賊団だ！ どうだ恐れ入つたか。オラ達に手を出すと史様が黙つちやいねえだぞ！」

虎の威を借る狐とはまさに彼らの事であろう。しかし、この青年は彼らの思惑通り、虎の威に恐れをなしてはくれなかつた。そればかりか。

「なかとみのふひと中臣史なかとみのふひとだと？ 黙つて立ち去るつもりだったが、その名を聞いては捨て置けんな」

青年は鞘から刀身を抜き放ち、両刃造の鋭い切つ先を男達に向けた。

「オッ、オラ達に手を出すと史様が黙つちやいねえだぞ！ いいだか？ ほんとうにいいだか？」

「ああ、かまわんさ。なんならここに連れてこい」

「いいだか？ ほつ、ほほつ、ほんとうに連れてきていいだか？」

男達は明らかに怯えていた。青年に刀を向けてはいるものの、その切つ先から足のつま先まで、全身をブルブルと震わせ、その表情は恐怖に引き攣つっている。こんな男どもにいいように翻られていたのかと思うと、情けなくなつてくるリディアであつた。

この事態に多少の強気を取り戻したり、リディアは、スキを見て組み付いている男の腕にガブリと噛みついた。そして振り向きざまの股間蹴り。しかしこれは水の中から蹴り上げた為に威力は半減する。

リディアはそのまま走つて逃げ、何とか青年の背後までたどり着く事ができた。

「ここので青年に向けられる刀は一本から三本になるが、青年に動じる色はまったく見られない。寧ろ三人の男達の方が怯えきり、どちらが大人数なのか分かつたものではない。

「いつ、いいだか？ オラ達に手を出すと後でどうなつても知らねえだぞ！」

「ああ、わしは逃げも隠れもせん。いつでも来るがいい」「では、なつ、なつ、名を名乗れっ！」

「わしの名か？ いいだろう、教えてやるつ」

青年はそう言うと、刀を上段に構え、一歩踏み出して見せた。

「我が姓は中臣、名を史と言つ」

「へつ？」

男達が呆気に取られた瞬間であった。史と名乗った青年は一瞬にして間合いを詰め、刀を一閃させた。としかり、ディアには見えなかつた。しかしその瞬間に三つの刀が高々と宙を舞つてゐる。さらに一閃させると、男達の衣服がバサリと落ち、全裸となつた彼らの股間がむき出しどなつた。

「あらやだつ」

リディアはそう言って両手を顔に当てるが、大きく見開いた眼を薬指と小指の間からチャツカリと覗かせている。

そのリディアがよほど魅力的だつたからであろうか、戦いに怯えつとも、血を滾らせた男達の陰茎は、未だなお隆々と天に向かつてそそり立つていた。だがしかし、その大きさたるやリディアの親指ほどもない。

「なんかこやつらが可哀想に思えてきた

それをマジマジと眺めつつ、史は刀を鞘に収めた。

「オ、オラ達を許してくれるだか？」

「許すも何も、わしが助けたのはお前達もあるんだぞ。お前達、自分が死地に立つていた事に気付かなかつたのか？」

「死地にですかい？」

男達は顔を見合させて首を傾げた。

「ならば教えてやろう」「ひつ」

そう言つと、史は懐から小刀を取り出し、事もあらうとそれをリディアに向かつて投げつけた。みんなが驚いたのは言つまでもない。だが、さらに驚いたのは次の瞬間であった。その小刀が何処からか飛んできた苦無^{くない}によつて、空中で弾かれたのである。

男達は啞然と佇んだ。

「見たか。お前達はもう少しで死ぬところだったんだぞ」

史がそう言つと、男達は腰を抜かしたようにへなへなとその場に崩れ落ちた。今ではその陰茎も小指の先ほどの大きさしかない。史は哀れみをもつてそれを眺めていた。その視線に気付いた男が泣きながら語り出す。それはなみだなみだの物語。

「そうや。オラ達はまだ一度もまぐわつた事ねえだよ。こんななんじや女からも相手にされねえだよ。凶作で年貢も納められねえし、村もおん出るしかねえ。オラ達はいつたい何の為に生まれてきたのか分からねえだよ」

これには史も同情を禁じ得なかつた。彼は自分の事を不幸だと信じてはいるが、上には上が居る事を知つたのである。史は何食わぬ顔でリディアに提案してみせた。

「これほど小さければ害はあるまい。少しくらい挿れさせてやつたらどうだ?」「…」

この提案に男達は目を輝かせ、史からリディアへと視線を転じるが。

「誰が挿れさせるか! あんたバカじやないのつ!」

リディアがそう言い。男達はガックリと肩を落した。しかし今度はリディアが提案してみせる。

「そう言つあんたの方こそ義賊の頭領なんでしょ、子分にでもしてやればどうなのよ?」「…」

この提案に男達は目を輝かせ、リディアから史へと視線を転じる

が。

「こんな情けないやつらほいらん」

史はあつせりと言つてのけ、男達はガツクリと肩を落した。

やがて彼らは力なく立ち上がり、史らに頭を下げるトボトボと歩き始めた。その背中には壮絶なまでの哀愁を漂わせている。これにはさすがの史も見かねてしまつた。

「おこ、お前達。明日わしを尋ねてこい。暫く面倒を見てやる」
男達は喜び、こちらに向かつて頭を下げた。歩いては振り返り、振り返つては歩き、彼らはその度に何度も何度も頭を下げる。やがてその姿が見えなくなると、リディアは先ほどの苦無くないを拾い上げ、史に尋ねた。

「ねえ、あんた。さつきのこれつていつたい何なの？」

「ああ、どうやらあなたは何者かに守られていくようだな」

「何者かつて誰よ？」

「さて、それは天狗なるや、はたまた河童かなるや、わしは存ぜぬ。
……とは言え」

ここで史は苦笑を漏らした。

「この尋常ならざる鬼気はちと首筋に痛いな」

史はそう言つて、辺りに聞こえるようつ大聲で叫んだ。

「先ほどの戯れ事は許されよ。この娘に対し我に害意なし。その鬼氣を收め候らえ。蟬せんどもも驚いておるではないか。風流なる蟬時雨。聞こえぬは寂しかろ」

その数秒後。史は無言で頷き、やがて蟬の鳴き声が辺り一面を覆い始めた。

「ふん、蟬時雨か……」

史はどこか無感動にそう呟いた。

この青年にはどこか暗い影がある。そつリディアは感じていた。これまでもそうだったが口調がどこか投げやりで、笑って見せても上辺だけ。まるでこの世の全てに希望を失いでもしたかのような悲壮感と絶望感がその表情を覆い尽くしており、それがリディアにはどうにも息苦しかった。

その史がその無感動な表情を自分の身体に向けているのを見て、リディアは今さらながらに己の姿を思い出した。

「な、何見てんのよ、この変態！」

「別に見たくて見ているわけではない。そなたが勝手に見せてるだけであろうが」

つまりなさそうに史は言ひ。リディアとしては目を血走らせて凝視されるのもいやだが、こつもあからさまに無感動な目で見られるのも、それはそれで女性としてのプライドを傷つけられるのであった。

「ちょっとあっち向いててよねっ！」

そう言つと、リディアはそそくさと濡れた薄着を脱ぎ、置いてあつた着物に着替えた。その間、史がちょっととでもこちらを見ようものなら石でも投げつけてやろうかと思つっていたが、史は興味なしとばかりに背を向けたまま動く気配を見せない。それもまた腹が立つ。乙女心とは複雑なのであった。

「もういいわよっ！」

こたさか怒氣を含ませてリディアがそう言つと、史は面倒臭そうな仕草で振り返つた。色艶やかな赤い着物を纏つたりディアの姿を見ても、その表情には何の変化もない。少しくらい眉を動かして見せるとか、お世辞のひとつでも口にすれば可愛げがあるものを、と

憤慨するリディアに向かって、彼が口にしたのはこうである。

「どうでもいいが、わしはいちおうそなたの命の恩人であろう。礼

くらには言つてもらいたいもんだな」

別に感謝していないわけではないが、これにはつにリディアも反発してしまった。

「べ、別にあんたに助けてくれなんて言つた覚えないんだからねつ

！」

「ほほう？」

史の口元が歪み、嘲笑を形作つた。それでいて全体的な雰囲気は無表情を維持しているのだから、これはこれで器用だとリディアは呆れる。しかしこの後、この器用な若者はさらなる器用な技を披露してのけた。彼はこう言つたのである。

「では聞くがそなた、『いやー、助けてー、誰か助けてー』に始まり『ちよつと、そこのおにこせーん』とわしを呼び『ちよつと待つてよ、そこのいけめんのおにこせーん』とさうに引き留め『待つつつてんでしょ、このすつとじどっこい、乙女のピンチに何しかとこじてんのよ』と暴言を吐き『あんたしかいないでしちうが、この状況見てあんた、何も感じないの？ 助けてやるのとか思わないわけ？』と、わしに言つた事を覚えてないとでも？」

これにはリディアも驚いた。

「あつ、あつ、あんたねえ！ 男がそんな細かい事いちいち覚えてんじゃないわよつ！ それも一言一句の間違いもなく覚えてるなんて、あんたの頭どうかしてんぢやないのつ？」

「ああ、わしは記憶力には自信があつてな、一度見聞きした事は絶対に忘れない。父の愛読書であつた六韻三略（つぶねさんりゃく）も諳んずる事が出来るぞ」

「ふん！ 自慢？ ねえ、それ自慢？ そんな地味でチンケな能力、自慢してんぢやないわよつ！」

「ちんけ……そなたの言葉には時々理解出来んところがあるな。いけめんといつ、すつとこどつことい、ぴんちとい、それに鹿とこくとはどうこつ意味だ？ わしが鹿と何をしたとこつのだ？」

「もういいわ、あなたと話してると頭がおかしくなるわ」

「それはこっちの台詞だ。そもそも先ほどよりのわしに対するあなたの暴言、許し難いものがある。我が中臣家落ちぶれたりと言えど、女人にここまで馬鹿にされた事など一度もないぞ」

「あつそ、じゃあいい経験したじゃないの。それに何？ はつは一

ん、あんたのその如何にも私は不幸でござりますってな顔の理由がようやく分かったわつ！ 家が落ちぶれた？ バツカじやないの？」

そんな事でいちいち落ち込んでんじやないわよつ！ 男ならねえ、そんなもん笑い飛ばして、這い上がつてやるつてくらいの気概を持ちなさいよねつ！」

この時、史は初めてその表情に激しい感情を浮かび上がらせた。正負何れとも判断しがたい複雑な表情ではあったが、閉ざされていた彼の心に何かが吹き込まれたのは事実であつたろう。

史はその形相のまま何か言おうと口を開くが、何も発せずそのまま口を閉ざした。やがて再び口を開いた時、彼は穏やかな表情を取り戻し、その口元には感情の発露たる微笑さえ浮かべていた。

「どうでもいいがそなた、もう少しօ淑やかにしていいと嫁のもらい手がないぞ」

「へつへーんだ、お生憎さまつ！」

リティアは勝ち誇ったようにない胸を反らし、左手を腰に当てて右手の親指で自慢げに鼻を弾いた。そしてそのまま右手を史の方へと伸ばし、親指だけ曲げた手の平を突きつけて見せた。

「あたしにだつてねえ、求婚者くらい居るんだからねつ！ それも四人よ、四人！ どう、驚いた？」

「こいつは驚いた。てか嘘だろ？」

「嘘じやないわよつ！」

「そりかそりか、ではそういう事にしておこつ

この日一番の笑顔を浮かべ、史は愉快そうに声を上げて笑つた。

リティアがたどり着いた西暦六八三年。この時代の日本を一言で言つならば、動乱から収束へと向かう過渡期と言えるのではなかろうか。その過程において、史の一族である中臣氏は現在、没落の一途を辿つていた。

中臣氏とは、かぐやの名付け親である御室戸斎部秋田の一族、忌部氏等と共に、代々この国の神事、祭祀をつかさどってきた氏族である。

だがその中でも史の父である中臣鎌足は異彩を放つていたと言えよう。まず鎌足は中大兄皇子に協力して有力豪族であつた蘇我入鹿を暗殺、蘇我氏を衰退へと追い込んでいく。いわゆる乙巳の変である。それに連なる大化の改新でも鎌足はその能力を遺憾なく發揮し、中大兄の懷刀として活躍した。

しかしその後、朝鮮半島が風雲急を告げ、日本もそれに巻き込まれる事となる。百濟が唐の援軍を得た新羅によつて攻め滅ぼされ、その百濟残党の要請を受けた中大兄が出兵を決意したのである。日本は朝鮮半島へと兵を送るも白村江の戦いでこれに大敗。中大兄はその後、百濟難民を大量に受け入れ、近江の大津宮にて大王に即位し、親百濟政権を樹立した。

しかしこれには不満や反発の声も多かつた。鎌足は中大兄に協力するが間もなく死去。さらに中大兄が死に、その息子である大友が大王に即位すると、その不満は一気に爆発する。

そもそもこの国は、豪族達の統治する小国家が集まつて出来た連合国家であった。元々の首長國は倭ウワイマトがそれを凌駕し、実質的な支配権を手にしていたのである。

この時、この倭の王である大海人おおあまが動いた。彼は現政権に不満を持つ諸豪族を糾合し、この近江朝に対し、決戦を挑んだのである。そしてこれに見事勝利し、日本を乗っ取ることに成功するのであった。

後に壬申の乱と呼ばれるこの戦争当時、史はまだ子供であり、これには参加していない。しかし中臣家の長であり右大臣の位にいた

中臣金が大友方について敗走、処刑されるに至り、中臣氏は大海人
が飛鳥淨御原宮に開いた新王朝では、完全に中央から一掃されてしまつたのである。

史は全てに絶望した。近隣のあぶれ者達を集めて義賊団なるものを結成したのも、志しあつての事ではなく、単なる暇つぶしであつた。彼は前途に明るい未来を描くことなど出来なくなつていたのである。……だが。

「男ならそんなもん笑い飛ばして、這い上がつてやるくらいの気概を持つ　か。中々に面白い事を言う娘だな。なよ竹のかぐや姫か

……」

リティアの事を思い出し、史の頬が緩む。「一ヤ一ヤが止まらない。史が帰宅すると義賊団の子分が出迎え、この史の変わり果てた表情に驚いた様子であつた。数歩後ずさりながらその子分が報告する。

「ふ、史様にお客人でござります。先ほどからお待ちで」

「わしに客人だと？」

史が門を潜ると、庭先には馬が一頭と、その客の家人らしき十名ほどの男達が畏まつて控えていた。馬の装備とその家人達の身なりから、その客人がそれなりの身分であるという事が窺い知れる。

史は客人の待つ居間へと足を運んで見て納得した。そこには見知つた顔があつた。

「やあ、史殿。おじやましてあるぞ」

「これは大伴殿でござつたか」

大伴御行。おおとものみゆき壬申の乱では大海人方に付き、功のあつた人物である。年は三七歳。しょうしきんじょう冠位は一六階中一〇位の小錦上。現在は大海人の下で兵政官大輔を務めている。無位無冠の史などとは雲泥の差がある人物であつた。

「没落氏族である私のところへ今さら何のご用で？」

「まあまあ、そう嫌味を言わつしやるな。そこもとほどの才覚があればこの先いくらでも機会はおじやうつ。麻呂も折を見て推挙いたそうほどに」

大伴は機嫌を取り繕つように笑顔でそう言つと、そわそわと落ち着かぬげに本題に入つた。待ちきれなかつたと言わんばかりの様子である。

「いや、本日伺つたのは他でもない。博学多識との噂が高い史殿にちと教えを請いたい事がござつてな」

「教えを請いたいとは?」

「つむ、史殿は東風亀とうふうめといつのをござ存じか?」

「東風亀でござるか? はて、そのような亀、聞いた事もございませんな」

「つむ、史殿も知らぬとは參つたの?」

「その東風亀とやらがいつたいどうしたというのです?」

「いや、さる女性じょせいに求婚いとねりしたのだが、それを持つていかん事には祝言を承諾しようのくしてくれんのじや」

「なるほど、その東風亀とやらをその女性は「所望なわけですね?」正確には東風亀ではない。東風亀の最新巻しんせいまきというもののじや。麻呂の見立てでは東風亀の事が書いてある何がしかの巻物であろうと思つのじやが……、やはり東風といふくらいのじやから東国ひがいの蝦夷えぞ地じへ参るしかいかのう」

がつくりと肩を落し、大伴は溜息をついた。別に慰めてやる義理は史はない。突き放すように彼は言つ。

「お役に立らず申し訳ない。まあつくりと探すんですね」

「そもそも言つておれんのじや。麻呂以外にも求婚者がおつてな。早いもん勝ちなのじや。阿倍御主人殿は象とやらいう動物を求めてすでに唐へと旅立つてしまつた。他の二人も旅仕度をしてあるとの噂じやしの?」

これに史は驚いた。まさかとは思うが確かめずにはいられない。

「お、お待ち下され。という事は求婚者は全部で四人ですか?」

「そうじや」

「大伴殿が求婚したという相手。名を聞いてもよろしいか?」

「つむ、なよ竹のかぐや姫ひめじや」

やはり！

「あれは本当だつたのか……」

史は小声で呻いた。すっかり嘘だと思い込んでいたのである。あのような騒々しくがさつな女によくぞ四人の求婚者が、と思う反面、自分の本心を覗いてみて史は納得した。自分もあの騒々しくがさつな女とやらに惹かれ始めているのではなかつたか。

そう思つて静かに苦笑を漏らした史は、別の事に興味を抱き、それを大伴に聞いた。

「ちなみに他のお三方はどういった品物を持つてこいと言われておるのでですかな？」

「うむ、ちょっと待つてくりやれ。書き留めておるでな」

大伴は懐を探り、巻物を取り出して史にそれを読んで聞かせた。

「阿倍御主人殿は『ふえるなんですの象さん』というもののじや。それから多治比嶋殿は『青鼻駒鹿のふいぎゅあ』それから石上麻呂殿は『ぶらだの猿』じゃ。みんな動物かそれに類するもののようにな」

結局、大伴御行はなんの収穫も得られぬまま、史の屋敷を後にした。トボトボと帰途につくその大伴の後ろ姿を見送った後、史は屋敷に戻ると部屋には入らず縁側に腰を下ろした。夕暮れ時、薄暗い東の空には満月がうつすらとその丸い姿を浮かび上がらせている。その月を眺め、史は思案に耽つた。

大伴より聞いた、かぐやが所望する品々は、数多の書物に通じた史も初めて聞くものばかりである。およそこの世に存在するのかさえ疑わしい。ここで史はある結論に達した。これはあのかぐやが求婚を断る為の口実ではないだらうかと。

確かにこの求婚者四人はそれぞれ身分ある者達である。並みの女性であれば泣いて喜び嫁ぐであろう。しかし彼女はそんなものに頓着するような女性には史には見えない。もっと別の価値観を有した女性であろうと史は睨んでいた。

それに年齢も釣り合わない。四人の中で一番若くして今日尋ねて

きた大伴御行の三七歳である。次が石上麻呂の四三歳。^{いそのかみのまる} その次が阿^あ
倍御主人の四八歳。^{べのみうし} 多治比嶋に至つては五九歳である。もつとも、
大半の女性は相手が高貴な男性であれば、たとえ何十歳年が離れて
いようとほいほい尻尾を振つて嫁ぐであらう。別にこれは卑下され
る事ではない。この時代ならば当然の事である。だがかぐやはそつ
いう女性ではない。史は確信をもつてそう断言できる。
「さて、わしは何を持つてこいと言われるかな？」
史は月を見上げ、そう呴いていた。

王太子の乱から約一年。史が見上げた月の裏側では、彼が知り得ようもない存在が、知り得ようもない歴史を紡ぎ続けている。

乱の終息後、新国王の戴冠に伴つて、トニオーレ・アップマン公爵は国王の後見人たる地位についた。宰相の地位はそのままである。これには長老院議会からの反発があつた。宰相は如何なる役職であれ兼任を禁ずとの不文律の掟があつた為である。しかしアップマンは後見人という地位がメシャムの憲法上、正式な役職ではないと強弁、長老院議会のこの訴えを黙殺した。

さらにアップマンは反乱の事後処理を利用して軍部の掌握にも着手する。

第一艦隊司令官クラムゾン・ボウザ中将、第五艦隊司令官サム・ホワント・クレメンテ中将他、反乱に加担した高級士官、貴族等、八五名が即決裁判の後処刑され、反乱の勃発に際して何ら為す術もなく手を拱いていた軍上層部も、かなりの人数が更迭されると、アップマンはその空いた席に自分の息の掛かった者を次々と据えたのである。これにより軍上層部はほぼアップマン派一色に塗り固められ、軍隊はさながらアップマンの私兵と言つても過言ではない存在へと変貌を遂げた。

この武力を背景に、アップマンは自分に批判的な言動をとり続ける長老院議会を解散へと追い込み、その大多数を国事犯として収監するに至る。

これにより本来、王政府、宰相府、長老院議会と三つに分散されていた権力は完全にアップマンただひとりのものとなり、彼はもはや如何なる者からも掣肘も受けぬ絶対的な権力者となり果せたのである。

表面上、創造主達は乱以前の平穏を取り戻しているかに見えた。しかしそれは強制され、抑圧された静けさに過ぎず、彼らは諦めに

も似た沈黙を余儀なくされていたのである。

しかし水面下では小さな反抗の渦が水面に波紋すら立てず、密かに息づいてた。

「アップマンの野郎め、どうやら宮内省に圧力をかけて、禅譲とう形でこの国を乗っ取ろうとしているらしい。このままでは遠からずチャーチワードン王朝は滅ぼされ、アップマン王朝とやらが誕生してしまうぞ！」

軍務省内の混雑した土官食堂で、大胆にもそう歎いて見せたのはアレン・グリフィノスであった。

彼は現在、准將に昇進を果たし、近衛艦隊司令官に就任している。当初、国王を守りきれなかつた事により、グリフィノスを処断せよとの意見も軍部内にはあつた。しかし国王の王都脱出に付き従つて戦死した近衛艦隊司令官ビクトーレ・ダビドフ中将と、国王を守つて獅子奮迅の働きをなし、壮絶な戦死を遂げた宇宙軍第六艦隊司令官アベル・モンテクリスト中将は二階級特進。共に元帥として盛大な国葬が執り行われている。国王を守りきれなかつたという一点においては彼らも同罪であり、その地位職責からしてもより大きな責任があるはずであつた。にもかかわらず、この一人を功ありとして賞し、一艦長の罪を鳴らすわけにはいかない。軍上層部はそう判断し、結果としてグリフィノスは准將へと昇進し、近衛艦隊司令官に任命されたのである。本来、艦隊司令官は中将をもつてその任に当てるのが妥当ではあるが、今回、近衛艦隊はその規模を約五〇〇〇隻という分艦隊クラスに縮小され、司令官は准將が務める事とされたのであつた。

「アップマン王朝ですか……、そなう前になんとしても内親王殿下にお戻りいただき、我らの旗頭になつていただかねばなりませんね」

グリフィノスの言に、彼の部下、スカル・ファン・ロペス大尉はハンバーグを頬張りながら返した。どうせ話し声は周囲には届かない。ひそひそ声で話すよりこういう事はどうぞと話した方が

人目もひかず、じついう場所の方がかえつて盗聴の心配もない。

「しかし内親王殿下が生きておいでと聞いた時はホッとしましたよ」

当初、NASAよりの連絡でリディアが地球へ到達していない事を知り、ファン・ロペスは愕然となつた。グリフィノスなどはリディアの生存を絶望視していたほどである。しかしファン・ロペスは時空トンネルの開通には成功しており、必ずどこかに抜けたはずだと信じていた。では何処へ抜けたのかとなると分からぬ。地球へたどり着いていないのであれば生存は絶望的であり、着陸地点が外れただけならば生存の可能性はゼロではない。

彼らは密かに時空トンネルの調査を開始した。宰相派に知られぬよう事を運ばなければならず、調査は難航するが、最近になつてようやくそれは判明する。なんとそのトンネルは過去へと通じていたのである。時間軸と空間軸のズレも計算され、リディアの到達地点が正確に一三二八年前の日本、それも近畿地方である事まで判明した。

しかしそれは宰相派にも知られる事となる。結局のところ、彼らは泳がされていたのである。

「アップマンめ、地球へ暗殺者を送り込んだらしいが、これは失敗したらしい。どういう事情で失敗したのかは分からんがな」

ミックスベジタブルのグリーンピースを器用により分けて排除しながらグリフィノスは言った。彼らにも宰相派へ潜り込んでいる同志はおり、これはその者からの報告である。

ファン・ロペスはグリフィノスの動作に非難の目を向けつつ大きな咳払いをした。グリフィノスがそれに気づき、無言で『ダメ?』と左目で問うとファン・ロペスは『ダメ!』と両目で返す。

「取りあえず、内親王殿下は未だご健在だという事ですね。しかしそういう事情であれば早く救出して差し上げなければなりませんね」

「ああ、一度の失敗で諦めるほど可愛げのある御仁ではないからな、あのアップマンは」

忌々しげにグリフィノスは顔を顰めた。それがアップマンに向け

られたものか、グリーンピースに向けられたものが、ファン・ロペスには分からぬ。

「しかし我々もいつ拘束されるか……、今日なんてずっと尾行されてしましましたよ」

「ふん、俺もだ。そろそろ腹を括るべき時なのかもしれんな。準備は急るなよ」

「はい、しかし内親王殿下の方は?」

「そっちの方は既に手を打つてある。上手く行けば宇宙で合流できるだろ?うよ」

グリフィノスはそう言つて皿を震り、皿を持ち上げてグリーンピースを一気に掻き込んだ。

リディアが住んでいる讃岐造麻呂の屋敷は大和国の広瀬郡散吉郷にあつた。讃岐造麻呂はこの年六〇歳。竹細工を生業とする人物で、近隣の人たちからは竹取の翁と親しみを込めて呼ばれている。妻はいるが子はない。そのせいもあってか、夫婦共々リディアの事を我が子のように可愛がつていた。

「かぐやや、お客人がお見えになつたぞえ」

妻である竹取の嫗が奥に声を掛けると、スタタタタッと廊下を走

る音が響き、リディアが顔を覗かせた。

客人とは中臣史であつた。史がリディアと出合つてよつ二十日あまり。彼はあの日以来、毎日のよつにリディアのもとを訪れていたのである。

「なに、またあんたなの?」

口ではそう言つたものの、リディアはそそくさと草履を履き、出かける用意にかかっている。

「じゃあ、おばあちゃん、行つてくるね!」

声を弾ませリディアが玄関を飛び出すと、史は嫗に頭を下げた。

「では、かぐや殿をお借りします。あ、これ、先ほど釣つたばかり

の鯉ですがよろしければ」

「まあまあ、いつもすみませんねえ」

などと数秒ほどの会話をしている間にリティアは表で足踏みを続いている。

「何やつてんのよー 早くしなさいよねー！ ムービツ！ ムービツ！ ムービツ！」

史が見えない絲に引きずられるように出ていくと、一人の背中を笑顔で見送りつつ、嫗は背後に声をかけた。

「居るかね、じいさんや？」

「居るぞい、ばあさんや」

「大丈夫ですかね、かぐやは」

「まあ、あの御仁は腕は確かじや。心配はないじゃろつが……」

その言葉を残し、嫗の背後で不意に翁の気配が消える。

「じゃあ私はこの鯉を料理して皆の帰りを待つことにしましょうかね」

嫗はそう独語して調理場へと向かった。

さて史だが、彼は一十口あまりの時を費やし、未だかぐやに求婚を果たしていない。それには彼なりの理由があるにはあった。焦つて求婚し、入手不可能な品物を持つてこいと言われるよりも、彼女が真に欲するものを見極め、それを渡して求婚する方が気が利いているのではないかと思つたのである。また、そつする事でその日までに親睦を深める事もでき、一石二鳥であるとも。

しかしこれは半分以上、自分に対する言い訳でもあつたろう。日に日にかぐやへの慕情を募らせ、それに比例して臆病になつていく自分自身に失笑すらしてしまうが、為す術もなく今日に至つている、というのが史の偽りない実状であつた。

「わしがこれほど腰抜けだつたとはな……」

「ん？ 何か言つた？」

「あ、いや、別になんでもない。ただの独り言や」

そう言って苦笑を浮かべ、頭を搔いている自分の姿など、つい一

月前には想像すら出来なかつた史である。

彼らはいつものように葛城川沿いを歩き、いつもの場所へと向かつた。それは葛城川を眼下に見下ろす事が出来る小高い崖の上である。昔から史がひとりになりたい時に訪れていた場所であった。リディアもそこからの眺めがすっかり気に入り、今では一人にとっての憩いの場所となつてゐる。

史とリディアはそこに腰を下ろし、涼しげに吹く横風に身を晒した。川のせせらぎ、蝉時雨、鳥の轉り。耳に飛び込んでくる何もかもが心地よい。

無言で過ぎ去る至福の時を暫く堪能し、やがて史はリディアに問い合わせた。

「前から聞こうと思つていたんだが、聞いていいかな？」

「何よ？ 聞きたいなら聞けばいいじゃない」

リディアの口調は出会つた時から変わらない。では心中はビビりだろうか？ 自分が変わつたように彼女も変わつたのだろうか？ などと考えながら、史は口を開いた。

「そなたの黄金の髪に青い眼。書物では読んだ事がある。唐にはそういう人がたくさん居るそうだが、そなたは唐より参つたのか？」

「違うわ」

「では何処から來たのだ？」

「うーん、どうしようかしらね」

リディアはもつともらしく腕組みをして空を仰ぎ見た。史がその視線を追つてみると、天頂からやや下がつた夕暮れ間近の南の空に、上弦の月がうつすらとその姿を見せ始めている。

「まあいいわ。どうせあんたは信じないでしょ。うから言ひやうけど……」

リディアはそう言つてその月を指さした。

「あたしはあそこから來たのよ」

「月？」

「そうよ。それにきっと時代も違うわ。あたし、この国の歴史に詳

しいわけじゃないけど、ここがずっと過去だって事くらい分かるもの。あたしは今から何百年後か何千年後かの世界からやって来たのよ

「ふ

「何百年後、何千年後の世界?」

「そうよ。あの月にはねえ。王国があつて、あたしはそこ内の内親王なの。いえ、だつたのと言つべきかしらね」

リディアはこれまでの事を史に語つて聞かせた。史にとつては荒唐無稽な話ではあつたろうが、彼は黙つてそれに聞き入つている。

「つまりあたしは未来からやって来た宇宙人でその国の内親王殿下つてわけよ。どう? 信じる?」

「ああ、信じるよ。信じるとも」

史がそう言つたその瞬間、彼は咄嗟に振り返り、背中に帯びた長刀に手をやつた。リディアを庇うように自分の背後へと移動させ、彼は静かに鯉口を切る。刀が鞘から抜き放たれ、刀身が夕日を浴びて赤々と光つた。

やがて木の枝をガサガサと揺さぶる音が響きだし、史はやや警戒心を解いた。こんな不器用に物音を立てる曲者はいないだろう。そう思つて暫く待つと、見知らぬ男が一人やって來た。史が知らぬその男を、だがリディアは知つていた。

「待つてくれ、怪しい者ではない」

史の警戒心を解く為、日本語で語りかけたその男はルビ・ラモン・アロネス子爵であった。

「ルビッ! ルビじゃないの!」

リディアは吃驚の声を上げる。ルビはリディアの姿を見、目にいっぞいの涙を浮かべた。

「内親王殿下、お迎えに参りましたぞ!」

それを聞き、今度は史が吃驚の声を上げた。

「そなた、内親王だつたのか!」

「あんた、さつき信じるつづたじやないのつ!」

「あ、いや、それはそうだが、あんな話、俄には……」

リティアに怒鳴らされたモーモードによる史を尻目に、リティアはルビに歩み寄った。

「あんたどうやつて？ とか取りあえず……」

「ゴグアッ！」「

強烈な金的蹴りがルビの股間に炸裂した。

「あの時のお返しよつ！」「

ノックダウンされた時の事をリティアは忘れてはいなかつたのである。ささやかな仕返しを果たし、ジャンプを繰り返すルビに彼女は問う。

「どうしてここが分かつたの？」

「そ、それは……」

激しい苦痛に悶えつつ、ルビは震える手で小型探知機を見せた。

「事後報告で申し訳なき事ながら……、こぞとこう時の為に殿下のそのイヤリングには発信器を取り付けさせて頂きました。それが役に立つたようで」

「普通だつたら怒るところだけど、緊急時だつたもんね。まあいいわ、許してあげるつ！」

「はつ、ありがたき幸せ。ご寛容に甘えまして、そのイヤリングについてもひとつお伝えしたき事が……、怒らずに聞いて下さりますや？」

「怒らないから言つてみなさいよ」

「はつ、その発信器ですが、高性能盗聴器にもなつておひまして、小さなオナラの音も難無くキャッチし、ゴグアッ！」「

再びの股間蹴り。ルビは膝から崩れ落ちた。

「あんたねつ！ 乙女のプライバシーを何だと思つてんのよつ！ そんなの許すわけないでしょつ！」「

これはまあ、当然であろう。

「怒らないって言つたのにいいいい……」

「前言撤回は乙女の特権なのよつ！」「

この一連の会話は彼ら創造主達の言葉で交わされていた為、史に

はさつぱり理解できなかつたが、この成り行きにはただただ啞然と眺めるのみであつた。入り込む余地すらない。しかし史にはただひとつ気になる事があつた。それはこのルビといつ男が最初に日本語で語つた、迎えに来たという言葉である。

かつて無い強烈な胸騒ぎに、史は心を乱していた。

第一〇話

史の不安げな表情を他所に、リディアは久しぶりに会つたルビを前に高揚していた。もう一度と月の住人たる彼らに会う事は叶わぬだろうと諦めていたのだから、これは当然と言えば当然であったろう。

しかし約一年ぶりに再開したルビは見る影もなく^{ヤフ}疲れ果てていた。目の中にはくまがで、頬の肉もすっかりと痩け落ちている。この一年、さぞかし苦労してきたのだろうとリディアは察したが……。

「まあこんなところで立ち話もなんです。取りあえず私が乗つてきました宇宙船へお越し下され」

そのルビがそう提案し、暗黙のうちに彼らは歩き出した。ルビを先頭にリディア、史と後に続く。

「あ、そつそつ、我が妻達も殿下に一日お会いしたいと申し、付いてきております」

「え？ 妻？」

思い立つたようにルビがそう言い。その背後でリディアが首を傾げた。彼女の記憶違いでなければルビに妻はない。

「あんたの奥さんって亡くなつたんじや……、つてか達つて何よ？」

「はあ、実は殿下が地球へ行つてしまわれた後、六人の侍女達の面倒を私が見ておつたのですが、つい半年ほど前に結婚いたしまして」これにはリディアも驚いた。リディアの侍女と言えばまさに粒揃い。みな美人で教養もある。それが爵位ある貴族とはいえ、ルビのような老人に嫁ぐとは信じがたい。誰が嫁いだにしてもこれは奇跡だとリディアは思った。

「マジ？ やるわね、あんた！ で、誰と結婚したのよ。セイラ？」

ララア？ それともイセリナ？ あんたの好みからするとハモンかマルダつて線もあるわね。キシリアつて事はないだろうし……、で、誰よ？」

「はあ、それはですね……」

言いにくそうにルビは口元もり、短気なリティアは当然のよう元キレる。

「んもうっ！ もうたいぶらすに早く言になさによつ！」

「では言いますが、我が妻となつたのはセイラとララアヒイセリナとハモンとマチルダとキシリアです」

「ふんふん、セイラとララアヒイセリナとイセ……って、全員じゃないの？…

「はい、そういう事になつてしましました」

創造主達に一夫一婦制などという因習はない。器量に応じていくらでも妻は持てるのだが、その器量がこのルビのどににあるのか？

リティアには不思議でならない。

「むむむつ、やるわね、あんた。つてか、あんたが何でそんなにげつそり寝てるのか、ようやく分かつたわ。若い奥さんを一度に六人も貰つちゃつたんじゃ仕方ないわねつ」

ルビは背中を大きく動かして溜息を吐いて見せた。

「まことその通りでして、月曜はララア、火曜はハモンと、土曜まで夜のスケジュールはビッシリとして、ゆっくり出来るのは日曜しかございません」

「なんだか地球人達の天地創造神話みたいねつ」

天地創造とは、旧約聖書の創世記に書かれているもので、神は一日目に光を作り、昼と夜が出来た。「一日に空を……」というあれである。こうやって神は六日間でこの世界全ての宇宙万物を創造し、七日目に休んだ事から、後に一週間＝七日間という単位が出来たのだといつ。

しかしルビは神よりも自分が遙かに偉大だと言い張った。

「神は日曜日に休んだ後、次の月曜日に再び光を作つたりはせなんだはず。私の場合、それが永遠に続くのですぞ！」

「うーん、まあそれは大変だろうけど……つて、あんたつ！ 清らかな乙女相手にさつきからなんて話題ふつてんのよつ！」

今さらのように叫び、リティアは怒りとは別の要因で顔を真つ赤

に染め、臨戦態勢へと突入。その殺氣を背中で察知したルビは慌てて逃げ出した。

「そんなご無体なつ！ 話題をふったのは殿下ではござりませぬかつ！ あつ、股間はやめてつ！ そういうわけで大事な股間なのですじやーつ！」

「何が大事な股間よつ！ そんなもんバットもボールも捻り潰して……つて、あんたつ！ 清らかな乙女になんて事言わせんのよつ！」「ごつ、ご無体過ぎまするーつ！」

いつしか追いかけっこへと変貌したリディア達の後に続いて史も走つた。狭い山道を抜け、やがて木々に覆われた広場へとたどり着く。そこは史も見知つた場所ではあつたが、今までには無かつた、これまでに見た事も聞いた事もない物体がそこには存在し、史は愕然とそれを仰ぎ見ていた。

ちょっとした屋敷ほどの大きさがあるその物体は、淡い光を發している。

「かぐや殿、これはいつたい！」

「ああ、これは小型宇宙船よ。地球人達はUFOって呼んでるそうだけど、つてこの時代のあんたに言つても分からないわね」
逃げ損なつた憐れな老人の股間をゲシゲシと踏みつけながら、リディアがそう言つている間にも、そのUFOとやらの一部が開いて、中から数人の女性が顔を覗かせた。

「みんなーつ！」

嬉しそうにそう叫び、リディアが手を振りながら駆けだすと、向こうからも六人の女性達が降りてきた。

「でんかーつ！」

久しぶりの再会に侍女達、もといルビの妻達は泣いていた。一時はリディアを死んだものと諦めていたのだから感激もひとしおであつたうづ。

ワイワイキヤピキヤピガヤガヤと、女性達が史には理解できぬ言語で話に花を咲かせている。その様子を眺め、史は新鮮な驚きでい

つぱいだった。見た事もない着物に身を包んだ女性達。髪の色もりディアと同じ黄金色もいれば赤やら茶やらオレンジやら。遠目に見える瞳の色も、青やら緑やら灰色やら色とりどりである。

暫くは呆気に取られていた史だが、取りあえず満身創痍のルビに肩を貸し、女性達の方へと歩を進めた。

「まあ、ルビ様！」

史に助けられ、ひょこひょこと歩くルビの姿を見て、ひとりの妻が叫んだ。

さらに別の妻がリーディアに問う。

「まさか殿下、ルビ様の股間をお蹴り遊ばしたのでは？」

「うん、蹴つちやつたし踏んじやつた」

悪びれる事なくリーディアがあつさりそつと、ルビの妻達は色めき立つてリーディアに詰め寄つた。

「まあなんて事を！」

「股間だけはやめてあげて下さい！」

「使い物にならなくなつたらどうなさるんですかっ！」

「私たち、あれがないともう生きていけませんのに……」

この剣幕にはさすがのリーディアもたじろいだ。

「うつ……うつ、うめんね」

「まあまあ、おかわりそうに……」

ひとりの妻がそう言つてルビの前に跪き、リーディアの目の前でルビの股間を愛おしそうにさすりだした。するとどうした事か、いや当然というべきか、ルビの股間は徐々に、だが確実に膨張していった。それを見て妻達は安堵の溜息を漏らすが、ここではい終了とはいかなかつた。リーディアが見ていると、驚く事にその膨張は止まるところを知らず、どんどん大きくなつていく。ムクムクとムクムクとただひたすらに膨張を続け、やがてズボンのボタンが弾け飛んだ。すると圧力に屈したファスナーは自動的に下がり、必然的に顔を覗かせたその物体の、あまりの巨大さにリーディアは仰天した。

「なつ、なにこれっ！」

顔を背ける事も忘れ、ルビの一物を食い入るように見てしまったリディアは途中で気付き、慌てて顔を背けるが……、しかしつつい横目で見てしまう。

あれかつ！ あたしの侍女達をたらし込んだのはあれかつ！ あれのかつ！ 何となく事情を察したリディアであった。だがこの後、リディアの視界の片隅でとんでもない事が始まった。

「今日は火曜日だから私ねつ！」

弾んだ声でそう言つたひとりの妻がルビの足元に跪き、なんとルビのデカ物をカプツと頬張つたのである。リディアはさらなる度肝を抜かれ、史も目のやり場に困つた様子で上を向く。リディアは真っ赤な顔を背けたまま、震えて照準の定まらない人差し指を突きつけて声を張り上げた。

「あつ、あ、ああつ、あんたつ！ 人前で何やつてんのよつ！」「仕方がないのです」

別の妻がそう言つた。その台詞には似つかわしくない誇らしげでうつとりとした笑顔である。

「ルビ様は一度大きくおなりになると、射精させて差し上げなければ小さくおなりにならないのです」

「そつなんです。このままではズボンをお穿きになれないのです。治して差し上げないと」

「これは立派な治療行為なのです。決して破廉恥行為ではありません」

「こつ、これのどこが治療なのよつ！」

治療を行う看護師と言うよりは、変な宗教にハマッた伝道師のように彼女達は言つ。恍惚とした表情の中で目だけが確信に満ちているというアンバランスさ。貞淑だった侍女達を何がこうも変えてしまったのか。決まつていてる。あれだ。あれしかない。そのあれの方からも声がした。

「ふふいふあふえんふえいふあ、ふあんふあつふえふあやふふ」

「口に物を入れて喋るなーつ！」

もう想定外の事が立て続けに起こりすぎて何が何だか分からなくなつてくるリディアであった。これは夢じゃなかろうかと何度も自分のホッペタをパシパシ叩いていると、妻のひとりから提案があった。

「この治療には時間要します。殿下は船の中でお待ちになられてはいかがですか？」

まだ治療言うかっ！　トリディアは叫びたい気持ちを辛うじて堪えた。どうせ言つてもよつてたかって破折屈伏はしゃくくつぶくされるだけである。船で待てと言つならそうさせてもらつた方がこちらの精神衛生上にも良いとこうものである。

「そつ、そうさせてもらつわっ！　行きましょ、史！」

こうして妻のひとりが案内に立ち、彼女達は宇宙船へと向かう。リディアが最後にチラリと振り返つて見ると、ひとりの妻がせつせとフーラチオしているその横で、別の妻が裁縫道具を取り出してズボンにボタンを縫い付けていた。実に手際が良い。こういった事が度々行われているという事だろつ。半ば呆れ、半ば感心し、リディアは船内へと足を踏み入れた。

これまでの一連の出来事は、リディア以上に史の方が驚きは大きかつたのではなかろうか。急に見知らぬ男が現れ、リディアと聞いた事もない言語で話し始めたかと思うと格闘沙汰へと発展し、さらに見知らぬ物体が急遽出現。そこから何人もの美女が出てきてそのひとりが見知らぬ男の陰茎を咥え、今まで見知らぬ物体に入つてみると、そこには見た事もない調度品の数々が並んでいる。

応接室へ通された後、史は落ち着かなげに部屋中を歩き回つてそれらの品々に見入つていた。リディアの方はソファーに腰掛け、出されたコーヒーを堪能している。

「かぐや殿、この小型宇宙船と言つたか、これはいつたといつ作つたのだ？　数日前に通つた時は何もなかつたはずだが」

「ああ、作ったというより飛んできたのよ。これは空を飛ぶ乗り物なの」

「空を飛ぶ？ そんなバカな」

「まあ口で言つても信じないでしょうね。後で分かるわよ」
リティアが見るとこり、この宇宙船はルビが個人所有するもののが
ようであつた。アロネス子爵家の紋章があちこちに掲げられている
ので、これは一目瞭然である。その仕様からしてレジヤー用とい
つたところであろうか。古いが中々手入れが行き届いていて、ルビ
の几帳面さを垣間見る事が出来る。

「いやあ、それにしても驚く事ばかりだ」

ようやく史がソファーに座り、好奇心に満ち満ちた視線をリティ
アに送つた。

「そなたの国の女性はみんなああなのか？ その、人前でも平氣で
ああいう……」

「んなわきやないでしょっ！ あれは特別よ特別！ 特別天然記念
物よっ！ 保護したいくらいだわ、まったくっ！」

侍女達の変わり果てた姿を思い出し、沸々と怒りがこみ上げてくるリティアであつた。彼女達を籠絡したあの超巨大な猥褻物が諸悪の根源なのだろう。これまでに何十回と蹴り上げておきながら、蹴り潰せなかつた事が悔やまれる。

やがて、その諸悪の根源をズボンに潜ませる男、ルビ・ラモン・アロネスがすつきりした顔で現れた。

「いやあ、お恥ずかしいところをお見せいたしました
「恥ずかし過ぎるわよっ！」

そう言つて睨みつけるリティアではあつたが、あの一物を見せつけられたからであろうか、この年寄りが化物じみた存在に思えてきて圧倒感さえ覚えてしまつ。やはり世の女性は巨根に弱いのだろうかとか、自分はそんなもんに誑かされないと、あれこれ考へてみると、その巨根の主が史の方へ顔を向け、日本語で語りかけた。

「挨拶がまだでしたな。私、メシャム王国にお仕えするルビ・ラモ

ン・アロネスと申します。リティア内親王殿下がお世話になつてい
る様子。感謝に堪えません」

「それがしは姓を中臣、名を史と申す者、以後お見知りおき下され
たく」

史が立ち上がり返すと、ルビは頷いて妻達を請じ入れた。

「私はこれから殿下と話さねばならぬ事があります。その間、史殿
には我が妻達にこの船内を案内させましょう」

そう言われ、史がリティアの顔をうががい見る限り、リティアが頷く。
「ではそつさせていただきましょう」

史達が部屋を出ていくと、ルビはソファーに腰掛けた。いつにな
く深刻な表情を浮かべているルビを見て、リティアも緊張の色を隠
せない様子である。

ルビは語り出した。「この一年間に何で起こった事。今現在、アッ
プマン公爵の専横により、国がまさに乗っ取られんとしている事。
そのアップマンがリティアの存在を知り、暗殺を企んでいる事。ア
ップマンに抗する創造主達が地下組織を築き上げ、リティアを旗頭
に迎えようとしている事。……等々。

「何卒、殿下におかれましては我らの旗頭として王家の復興に尽力
力くだされたく」

そう言つて頭を下げるルビを田の前に、リティアの心は揺れてい
た。

もう一度と祖国へ戻る事は叶わぬと諦め、この地で暮らしていく
うと心に決めていたリティアである。自分を大事にしてくれる竹取
の翁や嫗とも別れるのは辛い。きっとあの一人もリティアが居なく
なれば悲嘆に暮れるであろう。僅か一年ではあるが、もはや三人は
切つても切れない家族同然の絆を築き上げていたのである。史との
事もそう。最近では史に心惹かれるのを感じていたリティアであ
る。もう会えなくなるのかと思うと胸が締め付けられるような切な
さを感じる。やはりこの地を去るのは辛い。辛すぎる。

「あたし……、帰れない……」

ぼそりとリディアはそう言つた。

「な、なんと！ 王国をお見捨てになるのですか！」

「だつて……、だつて……」

リディアの頬を涙が伝つ。彼女の心は激しく揺れていた。地球への未練だけであれば話は簡単、この涙は無かつたであらう。しかし月にも未練があり、それがこの落涙となつていたのである。その未練とはフェイ・トリー・ダッシュであつた。

フェイに会いたい！ もう一度と会えないのだと自分の心に言い聞かせて来たが、会えるとなると無性に会いたかった。フェイに会いたい。会つてもう一度自分の気持ちを確かめたい。

このリディアの心の機微をルビは正確に洞察した。意味ありげな声色で彼は言ひ。

「月へ戻ればあのフェイにも会えますね」

「だつ、誰があんなやつっ！」

リディアは慌てたようにそう叫んだ。フェイの事となるといつもこうだつた。頑なに自分の心を知られまいとフェイの悪口ばかり言う。亡き国王アレクサンダルやルビからしてみればバレバレなのだが……。

先ほどまでの泣き顔もなんとやら。リディアの涙は一瞬にして蒸発した。

「あつ、あんなやつが居る用になんて帰りたくないんだからねつ！」

「なるほど、ではフェイが居なくなれば月へ帰つてもいいと？」

「そつ、そそつ、そうよつ！」

「分かりました。ではフェイには消えていただきましょつ」

さらりとルビはそう言つて、不気味な笑顔を作つて見せた。これにはさすがのリディアも不安を隠せない様子である。

「き、消えるつて、どどつ、どついう事？」

「消えるとはつまり死んでもらつといつ事ですじゃ。國家安寧の為ならば致し方『ぞりますまい』

リディアは焦つた。状況が状況なので彼らならば平氣でやりかね

なこと思つたのである。

「べつ、別にそこまでする事ないんじゃないかしら、あつ、あいつはムカつくやつだけど、そつ、そそつ、そうねつ、あいつがあたしに上下座して謝れば、ゆ、ゆゆつ、許してやってもいいわよつ！」
すつかりルビに乗せられてしまつコトリアであった。

第一一話

地球から見た月の裏側に位置する南極エイトケン盆地。それは太陽系内でも有数の巨大クレーターであった。直径約二五〇〇キロメートルにも及ぶその南極エイトケン盆地には、創造主達が住まう大小合わせて約五十ものドーム群が存在する。

王都エネオポリスとは、狭義においては王宮や政府の主要機関が置かれた中央ドームの事を言い、広義においてはこのドーム群全ての総称である。

そのドーム群から西へ一五〇キロメートル、もはやエネオポリスとも呼べぬその辺鄙な場所にポンとひとつドームがあった。犯罪者収容ドーム。そう呼ばれるそのドームは、文字通りいくつもの刑務所や強制労働施設などが入ったドームである。

その一画には新たに作られた第一級国事犯収容施設なるものが存在し、現在は長老院議会の長老達や、宰相アップマンに逆らつた貴族など、それなりの身分を有する者達が収容されていた。

彼らはいちおうの礼節をもつて遇されており、各自それなりの広さと設備を整えた個室が与えられ、私物の持ち込みや面談者との面会なども比較的自由で、施設の外に出られぬ以外は何不自由ない生活を送っている。

宰相アップマンは目的の為なら手段を選ばない男であり、反対者を許容しない絶対者ではあったが、その反対者に対しても必要以上の苦痛を与えるような事はしなかつたのである。

その経緯からして、ここに収容されている者はそのほとんどが老人や年配者であったが、その中にただひとり、一〇代の若者がいた。黒い髪と黒い瞳を持つ一七歳の青年、フェイ・トリニダッド准将である。

「おーい、看守くーん、先週アマゾンで購入したDVDがまだ届かないんだが、どうなつてんだ？」

「さあ、タイトルは何ですか？」

「三本あるんだ。『ハッピーハーフ巨乳イヤーツ！』ってやつと『巨乳OJのいけないアフターファイブ』ってやつと『巨乳シネマパラダイス』ってやつなんだが」

「ちょっと調べて来ますよ。しかし閣下はほんとに巨乳が好きですね」

「当然だろ、お前は嫌いなのか？」

「もちろん好きですよ、へへへへ……」

「そうだらうそうだらう、ふつふつふ……」

国王派として「五六会戦を戦ったフェイがなぜこんなところに収容されているのか」というと、それにはちょっとした事情があつた。

フェイは当初、その勇戦が認められて少将に昇進を果たのであるが、とある式典でアップマン公爵と顔を合わせてしまつたのが運の尽きであった。その席上、フェイはその欠点を遺憾なく発揮して見せたのである。つまり、相手に向かつて昂然とその非を鳴らしたわけであるが、彼はこれまでのアップマンの行状を散々非難した挙げ句、卑劣漢に始まり果てはうんこたれに至るまで實に四八もの悪口雑言を並べ立てたのである。これには泰然自若としたアップマンもこめかみに血管を浮かび上がらせて大激怒した。フェイは直ちに拘束され、再び准将へ降格の上、分艦隊司令官の任を解かれて予備役編入となり、この収容施設へ放り込まれたというわけである。軍籍を剥奪されなかつたのは奇跡と言えるが、実はこれにはアップマンの口利きがあつたという。ああいう奴は嫌いではない。彼はそう言ってフェイを軍に留め置くよう指示したという。口は悪いがその能力には定評のあるフェイである。いずれは自分に屈服させ、手駒にしようとの腹づもりなのだろうと軍上層部では理解した。

何はともあれここ一年、フェイは優雅な生活を送っていた。少なくとも本人は満足しているようである。日がな一日アニメやAVが見放題。ギターの腕も上がつたと喜んでいる。主にアニメを完コピし、その動画をユーチューブにいくつもアップしていた。最近で

はその道の人々からはちょっととした有名人となつてゐる。

しかしその優雅な生活も終わりを迎えようとしていた。

フェイが看守と巨乳談義に花を咲かせていたまさにその時。それは爆発音で始まった。

「なんだ？」

「なんでしょうね？」

そう言い合つてゐる間に、ビームライフルを手にした十名ほどの兵が突入して來た。彼らはまず看守にその銃口を向け、そして後から悠然とやつて來た指揮官らしき男がフェイに向かつて敬礼を施した。

「フェイ・トリー・ダッド閣下でいらっしゃいますね？」

「そうだが？」

「小官はスカル・ファン・ロペス大尉。グリフィノス准将麾下の技術將校です。トリー・ダッド閣下を救出に参りました」

「救出？ 僕は別に救出してほしくなどないんだがな」

このフェイの反応はファン・ロペスにとって予想外ではなかつた。グリフィノスはこの可能性を予期していたのである。対処方もロペスは聞いていた。

「そうですか。では言い方を変えます。フェイ准将。あなたは私たちの捕虜です。一緒に来ていただきましょう」

「いやだと言つたら？」

「人質を殺します」

「人質？ そんなもんが何処にいると？」

フェイがそう言つとロペスは看守を指さした。フェイは笑止だと言わんばかりに余裕の表情を浮かべて見せる。

「おいおい、その看守に人質の価値があるとでも思つてるのか？」

「では試してみましょ。おい、その看守の足を擊て」

ロペスがそう命じ、兵のひとりが銃口を看守の足に向けた。そして今まさに引き金を引かんとしたその時。

「分かつた分かつた。どうやら僕の負けのようだな」

フェイは己の敗北を素直に認めた。ロペスは勝ち誇るでもなくフェイに頭を下げ、急ぐよう促す。

「では『出立の準備をお早く』

「やれやれ……」

フェイは本棚からいくつかの本やローリーを選んでバッグに詰め、ギター・ケースを肩に担いだ。プロのミコージシヤン田描して上京する地球人の様だと自分の姿を批評し、姿見の前でポーズなどとつていると、ロペスから早くしようと催促が入る。再び『やれやれ』と咳くフェイであった。

振り返って見るとまだまだ持つて行きたいものはいっぱいあるが、今はこれがせいっぱいであります。フェイは去りざわ、残していくもの全てを看守に譲渡した。

この後、フェイが連れて行かれたのは戦艦グラン・ド・キャラバッショであった。会戦のおりに損傷した部分はすっかり修理され、今では近衛艦隊の旗艦となっている。

救出というよりはほぼ拉致に近い形で連れてこられ、やや憮然とした表情のフェイをにこやかに出迎えたのは、隻眼の司令官アレン・グリフィノス准将であった。

「よく来たな、フェイ。まあ寬いでくれ」

「寬げだと？　よく言つぜグリフィノスのおっさんよ。これはいつたい何のマネだ？」

「いや、何。お前にも俺達の仲間になつてもらおうと思つてな。それでこうやって招待したわけだ。ついでに言つとくと俺はまだおつさんじやないぞ」

「よく言つぜ。三十過ぎればじゅうぶんおっさんだろ。てかあんたの場合、見てくれがおっさんなんだよ。自覚してないのか？」

フェイは不機嫌そうにソファーに腰を下ろした。そこには士官専用ラウンジルームのソファーであり、奇しくも会戦終了後にコルトが

腰掛けたのと同じ場所であった。グリフィノスはある時と同じようにキヨロキヨロして葉巻を咥え、同じようにフェイにも葉巻を勧めた。

「おっさん議論はひとまず置くとしよう。で、話は聞いたか?」

「ああ、ここへ来る途中、あの技術将校の大尉から色々とな。技術士官なのにこんな事までやらされてるんだと散々愚痴を聞かされたぜ」

「まあ、あいつは各方面に能力のある多才な男だからな」

そう言って笑い、グリフィノスは給仕が運んできた「コーヒー」を一口啜った。フェイも釣られるようにカップを手にする。

「しかし、どれもこれも驚く話ばかりだつたぜ。あの殿下が生きていた事もそうだが、なんとタイムスリップしてたとはな」

「ああ、それを知った時は俺達も驚いたさ。何はともあれ生きていて下されて、本当に良かつた」

「ああ、それは俺もホッとしたな。まんざら知らん仲でもないしな、あの嬢ちゃんとは。で、あんたら、あの嬢ちゃんを想いでアップマングの野郎を引きずり下ろそうと思つてるんだろう?」

「ああ、その為には殿下にお戻り頂かねばならぬ」

「聞いたぜ。ルビのじいさんが迎えに行つたが不調だつたんだってな。万事休すつてわけか?」

「いや、方策はある。これを見てくれ」

グリフィノスはポケットから小さなカードのような物を取り出してテーブルの上に置いた。それは立体映像投影装置であった。グリフィノスが操作すると、カードの上にリディアとルビの姿が浮かび上がった。地球でのルビとリディアの会話が録画されていたのである。

「あいつ、この一年間で全然育つてないな。特に胸が。もうあれは一生あのままだな」

などとフェイが不敬な事を言つてゐる間にグリフィノスはキュルキュルと終盤部分のところまで早送りした。改めて二人の会話が流れ

出す。

「何卒、殿下におかれましては我らの旗頭として王家の復興に尽力されたく」

「あたし……、帰れない……」

「な、なんと！ 王国をお見捨てになるのですか！」

「だつて……、だつて……」

「月へ戻ればあのフェイにも会えますぞ」

「だつ、誰があんなやつっ！」

「あつ、あんなやつが居る月になんて帰りたくないんだからねつ！」

「なるほど、ではフェイが居なくなれば月へ帰つてもいいと？」

「そつ、そそつ、そうよつ！」

「分かりました。ではフェイには消えていただきましょつ」

「き、消えるつて、どどつ、どういう事？」

「消えるとはつまり死んでもらうといつ事ですじや。國家安寧の為

ならば致し方」ざりますまい」

「べつ、別にそこまでする事ないんじやないかしらつ、あつ、あいつはムカつくやつだけど、そつ、そそつ、そうねつ、あいつがあたしに土下座して謝れば、ゆ、ゆゆつ、許してやつてもいいわよつ！」

ここでグリフィノスはスイッチを切り、大量の汗を滴らせているフェイの顔を覗き込んだ。

「と言うわけだフェイ。お前、ひとつ地球へ行つて土下座して来い」

「アホかつ！ 何で俺がそんな事をせにやならんのだ！」

フェイはそう叫んだが、グリフィノスはそれに対しても言わなかつた。葉巻の煙を吐き出し、コーヒーを啜り、また葉巻の煙を吐き出し、コーヒーを啜り……。グリフィノスはただ黙つて待つた。フェイに選択肢のない事を、グリフィノスは知っていたのである。やがてフェイは葉巻の煙に混じらせて、諦めといつ名の大きな長嘆を吐き出した。

「ふん、死ぬか行くかの二者択一かよ。分かつたよ。行くよ。行きやあいいんだろ行きやあ」

「では頼む。ルビ殿が言つには中臣史という男が殿下とは仲が良いらしい。部下も大勢いて頼れる御仁なのだそつた。地球へ降りたらまずはそこを尋ねるがよから」
グリフィノスはそう言つて満面に意地の悪い笑みを浮かべて見せた。おっさんと言われた事へのささやかな仕返しであった。

「どうしたの？ やけに暗いわね。まるで昔の史に戻っちゃつたみたい」「

「そうかな？ そう言つたあなたの方こそいつもの元氣がないようだが？」

いつも小高い崖の上のリティアと史の会話である。ルビが尋ねて来た日から一日。あの日以来、一人はずつとこんな調子であった。

お互ひ何か話さねばと思うのだが、そう思えば思つほど話題が出てこない。会話とはそういうものである。

話題に窮した史はこれまで敢えて聞かなかつた事に触れてみた。

「なあ、そなたに求婚した四人だが、いずれはその誰かと結婚するのか？」

「しないわよ」

間髪入れずリティアが返す。

「しかし、そなたが言つた品物を持つてくれれば結婚しないわけにはいくまい」

「ああ、それは大丈夫。だつてこの時代じゃ絶対に手に入らない物ばかりだもん」

やはり 史の予想は当たつていた。

「どうしてそんな意地悪を？」

「だつてあの四人、断つても断つてもしつこいんだもん。それに身分を鼻にかけて如何にも貰つてやるぞつてな感じでさ。鼻持ちならないつたらありやしない」

「なるほど、そうだつたのか……」

ここでしばらぐ話題が途切れ、何を話そつかと考へた末、やや唐突に史が聞いた。

「ではそなた、好きな男性はいるのか?」「い、いいつ、居ないわよ! 誰があんなやつ!」

「あんなやつ?」

「なつ、何でもないわつ、忘れてちよつだい」

急の事にて口を滑らせた感のリディアであつたが、なぜかこいつう事にだけ疎い史はポケツとしている。それを見てリディアは追加発言した。

「でも嫌いなやつなら晒るわつ!」

「だれ?」

「フェイよ、フェイ! フェイ・トニー・ダッドよつ!」

リディアはフェイの悪口を言つてゐると不思議と心が落ち着く事を知つてゐる。史相手にそれを試みようとしたわけである。この後、史は散々フェイとやらの悪口を聞かされる羽田になつた。

「……つてそれでねつ、あいつつたらこいつ言つたのよつ! 乳臭いくせに乳がないつて! ええ、ええどうせあたしゃ子供ですよ。小さいですよ。胸もありませんよ。でもあんた、乳臭いくせに乳がないつて酷いと思わない? それも人前でよ! 家臣の分際でよ! 信じられるあんた? つて、聞いてんのあんたつ! まあいいわ、続けるわよつ! それでねそれでね、あいつつたらね……」

機関銃のように捲し立てるリディアの話に相槌を打つ暇もなく、かと言つて相槌を打たなければ「聞いてんのあんたつ!」と怒鳴られる始末。史は一気に疲れ果ててしまつた。約三〇分間の一方的な銃撃戦を終えた時、史は乾季で干上がつた川底に横たわる魚のようになつたりとしていた。一方でそれとは打つて変わってリディアの方は滝の急流を泳ぎ登らんとする錦鯉のようにピチピチとした元気を取り戻している。

この時、史は思つた。リディアはそのフェイとやらをとても憎悪

してあり、悪口を言つ事で気が晴れたのだろうと。後世、博学多識、神算鬼謀を謳われる中臣史ではあつたが、女心に関してはまるでダメダメ君なのであつた。

なのでこの後、史は更なる勘違いをしてしまう事となる。彼はかねてより聞こうとしていた事を尋ねた。

「そなた、今一番ほしいものは何だ?」

「……フェイのハート」

ぼそりとリディアはそう呟いた。これまた口を滑らせた感のある発言であるが、慌てて訂正しようとしたリディアの前で史は首を捻つてしている。

「フェイの鳩? 鳩とはあの飛ぶ鳩の事か?」

ホツとしつつも説明を求められ、リディアは返答に窮した。まさか正直に心だとは言えまい。なのでリディアはこう答える事にした。

「鳩じゃないわよつ。ハート。心臓よつ!」

「心臓か……、なるほど、了解した」
史の瞳に静かな殺氣が漲つた。

月の王都エネオポリス、とりわけ軍務省内ではささやかな騒動が持ち上がっていた。アレン・グリフィノス准将率いる近衛艦隊が命令もなしに王都を出撃したのである。言つてみればこれは出奔であり、宰相アップマン公爵に対する敵対行動である事は誰の目にも明らかであつた。このグリフィノスの行動に大半の創造主達は「まさか」と叫んだが、一部の者達にとつて、それは「やはり」であり、そう叫んだ者達は、グリフィノス逮捕に向けて今までに動きだそうとしていた矢先だったので、みな軍靴で床を蹴り上げて歯噛みしたという。

それに先立つ予備役准将フェイ・トリー・ダッドの国事犯収容施設脱走も、グリフィノスが手引きしたのではないかとの噂が囁かれ始めていた。これはその情報を知る一部の者にとつては既成の事実であつたが、それを知らぬ者達も憶測に基づき正鵠を射ていたわけである。もつとも一連の流れ、フェイとグリフィノスの関係、その両者を推し量れば外しようのない大きな的はあるのだが。

この騒動に関連し、宇宙軍第一艦隊分艦隊司令官コルト・パルタガス准将が軍務省にある第一艦隊司令部オフィスへの出頭を命じられたのは、グリフィノスの出奔から一一時間が経過した、翌日の早晨であった。

一二五六会戦の後、アップマン公爵は反乱に加担した者は処罰するがその下で働いた者は罰せずとの声明を発した。分艦隊司令官クラスの高級士官はその関与が疑われ、コルトも一時は拘禁されるが、その後、反乱軍の血判状とも言つべき名簿が発見されるに至り、コルトの無罪は証明された。しかしコルトの場合、国王アレクサンドルの死に直接関わつており、彼を罰すべしとの意見も少なからず存在したが、これはグリフィノスの奔走により事なきを得る。

「パルタガス准将は与えられた職責を全うしたに過ぎず、その勇戦

を処罰の対象となす事は王国軍憲章の理念に反する。そもそも陛下の死は僚艦の爆沈という不慮の事故によるものであり、その後、降伏した国王派将兵の救助、負傷兵への治療など、パルタガス准將は率先して実行し、数多の将兵がその命を救われている。この彼の行動のどこが非難に値し、尚かつ処罰の対象となす正当な理由やあらん

「このグリフィノスの弁舌は正論であり、誰もが首を横に振りざるを得なかつた。斯くしてコルト・パルタガス准將は処罰を免れ、分艦隊司令官の地位を保つていたのである。

コルトが第一艦隊司令部オフィスへ到着したのは、出頭を命じられてからちょうど一時間後であった。宇宙軍第一艦隊司令官ティオン・ディプロマティコス中将の太りきつた醜悪な姿が彼を出迎える。「まあ掛けたまえ」

「はっ、では失礼します」

このディプロマティコス中将はアップマン公爵の甥に当り、反乱後に処刑されたクラムゾン・ボウザ中将の後任として艦隊司令官に任命された男であった。コルトの見るところ、このディプロマティコスは軍人と言うよりは政治家に向いた小才子であり、権勢欲と体脂肪が異常に肥大した単なる俗物に過ぎない。

そのディプロマティコスが俗物の名に恥じぬ俗っぽい声を響かせた。

「グリフィノス准將の出奔は聞いておるな？」

「はい、昨日」

「ではこれは知つておるかな？ 先の会戦のおり、やつが時空震を発生させ、内親王殿下をお逃がし申し上げたという事を」

「それは初耳ですな」

「初耳か……、私の耳にしたところでは、グリフィノスが内親王殿下を逃がし、貴官がそれを黙認したとの情報もあるのだがな」

「さて、一向に存じませんな。そのような流言を閣下はお信じになりましたので？」

これまでの質問は出頭を命ぜられた段階でコルトも予想していた。嘘の下手なグリフィノスなどとは違い、コルトは完全にしらを切り通す自身がある。しかしディプロマティコスの方もこのコルトの対応は予期していたようであり、焦れた様子もなく薄ら笑いさえ浮かべていた。

「まあいい。貴官が素直に喋るとは私も思っていない。将官であり伯爵家の嫡子たる貴官を拷問に掛けるわけにはいかんが……、他の者は違うぞ」

そう言つてカード型の立体映像投影装置をテーブルの上に置いたディプロマティコスは薄ら笑いをさらに卑げたものへと変貌させた。

「貴官の副官。名をなんと言つたかな？」

ここに初めてコルトの表情に狼狽の色が走る。

「貴様、メアリーに何をした？」

「そ、そ、う、メアリーだつたな。見るかね？ リアルタイム映像だ」
ディプロマティコスがスイッチを入れると、立体映像投影装置の上にメアリーの姿が浮かび上がり、その無残な彼女の姿にコルトは絶句した。両腕を縄で縛られ天井から宙吊りとなつたメアリー。身上に着ける衣類は全てはぎ取られ、赤裸々となつたその全身にはいたるところに激しいムチの痕があつた。目は虚ろで口からは涎を垂らし、床には漏れ出た小水が水たまりを作つてゐる。

ディプロマティコスが指を鳴らすと、そのメアリーに男がふたり近づいた。そして前後から挟み込むようにメアリーと繫がり、前後の穴を激しく突き上げる。この時、彼女の口から零れ出了るのは悲鳴ではなく甘美な喘ぎ声であつた。

この瞬間、コルトは拳をテーブルに叩き付けた。一瞬のスパークの後、立体映像投影装置が沈黙する。

「貴様ら、メアリーに薬を……」

「まあ落ち着きたまえ」

勝ち誇った様にふんぞり返るディプロマティコス。その脂ぎった顔を粉砕してやりたい衝動に駆られつつもコルトはそれを辛うじて

押された。激発する事で事態が良い方向に進む事などないのだとう事をコルトは知っている。これまでのディプロマティコスのやりようを冷静に判断し、コルトはある結論に達した。

「で、私に何をしようと？」

「うむ、さすがはパルタガス准将。話が早い」
ディプロマティコスは満足そうに頷いた。

中臣史は現在、乳父である田辺史大隅めのとひとおおぐみの別宅たなべのぶひとおおぐみを居としていた。そこは彼の住いであると同時に義賊団のアジトでもある。

その日の朝、史は大勢の配下をそこへ集め、ある命を発した。

「野郎ども。近々フロイ・トリニダッドといつ男がこの地へやってくるやもしれん。見つけ次第その男をここへ連れてここ」

この命令に手下どもは顔を見合わせる。

「変わった名前ですが、何か特長はないんですかい？」

「服装が我々とはまったく違う。そういうやつを見付けたらまずそいつと見て間違いないだろ？」「

「ふえいとりんだど……」

「へいとりにだどう……」

手下どもが初めて聞く発音し辛いこの名を口々に反芻してみると、

門番がやって来て告げた。

「あのう、ふいとりにだあどと言つ御ご方が尋ねて来ておりますが……」

…

フロイはこの時、黒を基調とした王国軍の軍服を身に纏い、ギターケースを肩に担いでボストンバッグ片手に中庭に立っていた。史はその姿を一目見て、それがフロイだと確信する。

「ご貴殿がフロイ・トリニダッド殿か？」

「ああ、そうだ。ここを尋ねるよつて言つられてな。あんたが中臣史さんかい？」

「如何にも」

史はそう答えて早々に刀を抜いた。全身に殺氣を漲らせ、その切つ先をフェイに向ける。

「「貴殿には何の恨みもないが、その命、ちょうどいいつかまつる」

「ちょっと待て。そりゃどうこう事だ？」

予想外のこの展開にフェイは困惑した。頼れと言われて頼つて来たらその相手から殺すと言われたのだからこれは当然であろう。剛胆なフェイだからこそ困惑程度で済んでいるようなものである。

この後、史はその理由の一端を覗かせた。

「かぐや殿への数々の暴言、心当たりがないとは言わせぬぞ」

「かぐや？ ああ、リディアの事か。いや、そりゃまあ、心当たりはあり過ぎるくらいだが……、お前、何か勘違いしどりやせんか？」

「問答無用！ おい、この男に刀を貸してやれ」

史が手下に命じると、ひとりの男がフェイに刀を差しだした。

「なるほど、あくまでも正々堂々とってか？」

「その通りだ。手下どもには手は出させん。貴様が勝てば生きっこを出されると約束しよう」

「ふーん」

受け取った刀をしばらく眺め、フェイはそれを地面に突き刺した。後でお土産に貰つて帰ろうなどと考えながら懷にあるレーザー銃を抜く。

「武器なら俺も持つてるんだがな」

そう言つてフェイは一発ぶつ放した。史達が見た事もない眩い閃光が走り、遠くにあるかなり太いはずの木の枝が音もなく切断され、バサリと地面に落ちた。史の手下達は驚いて数歩後ずさる。腰を抜かして尻餅をついている者もいた。史はさすがに後ずさりこそしなかつたが、その額に汗を浮かび上がらせている。その眉間に銃口を向け、フェイは戯けたように口を開いた。

「と言つわけだ。このままじゃお前さんに勝ち目はない。かと言つて刀対刀じゃ使つた事のない俺に不公平つてもんだろう。そこでだ

……」

そう言つてフェイは銃を放り投げ、挑発するような笑みを史に向かえた。

「素手ってのはどうだ？ これが一番公平だと思うが？」

「よかろう」

史も応じた。このフェイに自分と似た矜持を感じ取り、その意気に応えたわけである。史は刀を鞘に納め、手下にあづけた。
こうして取つ組み合いが始まったわけであるが、まあ詳しい経緯は割愛。要するに殴る、蹴る、投げる、の野蛮な戦いが繰り広げられたわけである。そして両者はほぼ互角のまま約一〇分間にも及ぶ死闘を演じ、フェイと史、共にダブルノックアウトという結末を迎えるのであった。

「どうします史様。こいつ殺っちゃいますか？」

「いや、わしが勝ったわけではない。それはならぬ」

息も絶え絶えに史はそう言い、フェイを部屋へ運ぶよう命じた。その後、史はしばらく眠りに落ちた。目が覚めたのは正午過ぎ。三時間は寝ていた事になる。この時、屋敷の中で音楽が流れているほどこの音で目が覚めたのかと史は今さらのように気付く。初めて聞く楽器の音。初めて聞く旋律。聞き慣れぬその音色に誘われて、史はフェイの部屋を覗いてみた。楽器を奏でていたのはフェイであった。

「変わった琵琶だな」

「ああ、これは琵琶じゃない。ギターってんだ。こいつはフェルナンデスNO.3。通称、フェルナンデスの象さんだ」

「な、なに？」

史の目の色が変わった。

「これがフェルナンデスの象さんだと？」

「ああ、知ってるのか？」

それには答えず、史は更なる質問を浴びせた。

「試みに問うが、東風亀の最新巻なるものを知っているか？」

「ああ、こち亀な。それならバッグの中にある。俺の愛読書だから

な

フェイはバッグの中を漁り、一冊の「ミシク」を史に向かつて放り投げた。

「ほらよ。そいつがこち亀の最新巻だ」

史がページを捲つてみると、それはなんと絵と文字で物語りが綴られているという、かなり斬新なものであった。カルチャーショックに直面しつつ、史は更なる質問をする。

「で、では青鼻馴鹿のふいぎゅあは？」

「青鼻馴鹿のフィギュアは持つて来ちゃいないが、ほれ、このバッグに付いているキー・ホルダーが青鼻馴鹿だ。俺の好きなキャラなんだよ。どうだ、可愛いだろ？」

それを聞き、史は四つん這いになつてそのキー・ホルダーなるものに顔を近づけた。そこにあつたのは、見た事もない動物を模した小さな人形であつた。大きな赤い冠のようなものを被り、その冠からは角を突き出させている。その名の通り鼻が青く、確かに可愛い。史は思わず「くれ！」と叫びそうになつたが、その衝動を辛うじて押さえ、新たな質問をした。

「で、ではふらだの貌は？」

「ん？ プラダのバッグか？ そりやあさすがに持つてないが、むかし一度買った事はあつたな。リディアの嬢ちゃんにプレゼントしたんだつけ」

「プレゼントとは何だ？」

「ああ、贈り物の事だ」

「それは要するにふらだの貌とやらをそなたがかぐや殿に贈つたといふ事か？」

「そういうこつた。まあ贈つたと言つてもただの入学祝いだ。そう大層なもんじゃねえ」

「むむむ……」

史は腕組みして考え込んだ。かぐやが四人に持つてこいと言つた品物。恐らくは意味もなく適当に選んだのであるが、それが全て

この男に行き当たるのである。ひとつはフロイの持つ楽器であり、ひとつはフロイの愛読書であり、ひとつはフロイの好きなキャラクターであり、ひとつはかつてフロイがかぐやに贈ったものである。ここに至って、史は何か自分がとんでもない勘違いをやらかしているのではないかとの疑念を持つた。

「そなた、ハートと言つもの知つておるか？ 心臓だと聞いたが」「そりやまあ心臓と言えば心臓だが、ハートと聞いて心臓を思い浮かべるやつはまずいな」普通は心だら、こ・こ・る
「心……、フロイの心……」

そう呟いた史は様々な感情のこもった溜息を吐き出し、口を立ち上がった。

「分かった。後でかぐや殿のところへ案内しよう」

そう言つてポカリと一発。フロイの頭上にゲンコツを落した。

「いてつ！ なぜ殴る！」

「やかましい、この果報者め！」

そして史は大股で部屋を出て行く。その背中に哀愁が漂っていた事に、フロイは首を傾げた。

フヨイが来る！ フヨイが来る！ ピリコムー・ピリコムー・
史からの先触れの使者が訪れ、フヨイが来る事を知つたりリディア
はソワソワと落ち着かなかつた。

フヨイには会いたい。しかしルビに対し、つかりとフヨイが謝
れば用に帰るのなんのと口にしてしまつたりディアである。まだ用
には帰りたくない。竹取の翁や嫗、史とも一緒に居たい。でもフヨ
イに会いたい。でも帰りたくない。でも……。

リディアは部屋の中をうろちょろと歩き回り、時にヘラヘラと笑
い、時に深刻な顔で頭を抱え、時に悲壮な顔で涙を浮かべ、またヘ
ラヘラと笑い……と、さながら一十面相のようにその表情を田まぐ
るしく変化させていた。お陰で表情筋はすっかりとくたびれてしま
い、脳の疲弊も著しく、思考も停滞を余儀なくされるという始末。
結果として肝心な『どうしよう』といつ事に対する結論を導き出せ
ないままフヨイを迎える事となつてしまつた。

なので混乱したリディアはこんな対応をしてしまつ。

「いよ、リディア殿下、久しぶりだな」

と、やつて来たフヨイに対し、一瞬身を乗り出して嬉しそうな表
情を浮かべるもの、それもほんの一瞬。次の瞬間にはブイツと横
を向いて、

「あんた、だあれ？」

と言つてしまつたのである。これにはフヨイだけでなく史も呆れ
た。バレバレの嘘だが、いつたん言い出したら頑なに認めないリデ
ィアである。

「あたしはかぐやよ。リディアなんかじゃないわっ！」

あくまでもそう主張する。しばらくは屋敷内の一室で、あたしは
かぐやよ！ お前はリディアだ！ と言ひ争う声が続いた。

その部屋には現在、竹取の翁と嫗にリディア、それとやつて来た

フェイと史の五人が居る。そのうち竹取の翁がリディアを弁護するように口を開いた。彼もある程度の事情は理解している。リディアを連れて行かれまいとの一心からであつたろう。

「うちのかぐやがそなたの言う、リディア殿下だという確たる証拠でもござりますかな？」

「証拠？ 証拠かあ……」

そう問われ、フェイは腕組みしようとするも、途中で閃いてその動作を中断させた。ポンと膝を叩いて彼は言つ。

「あ、そうだ。リディアの太股には三日月型のアザがあるんだつた」「ああ、あれか」

ついうつかりそのまま口にしてしまつた竹取の翁がしまつたとばかりに口に手をやるが、これは小さな声だったのでもリディアやフェイには届かなかつた。しかし隣に座つている嫗はちやつかりと耳にし、片側の眉を僅かにピクリと上下させる。しかしこの時、リディアの方はピクリどころの騒ぎではなかつた。

「なつ、なななつ、なつ……」

座つたまま真つ赤にした顔を伏せ、リディアは大きく肩を震わせていた。これが嵐の前の予備動作であり熱帯低気圧が台風へと変じる前兆である事を、ここにいる誰もが知つてゐる。この動作が長ければ長いほど反動は大きい。敢えて今回のこれを数値で表すとするならばハ〇〇ヘクトパスカル。

ついにリディアは叫んだ。

「なんあんたがそんなこと知つてんのよつ！」

「えつ？ なんでつてお前、それはお前が……」

「あのアザはねえ！ 太股つつつてもかなりきわどいとこにあんのよつ！ M字開脚でもしなきや見えないとこにあんのよつ！ そんなどこにあるアザをなんあんたが知つてるわけつ？」「だからそれはお前がい……」

「いつ覗いたのよつ！」

「人聞きの悪い事を言うな！ だからあればお前が自分で言……」

「問答無用っ！」

じつなつてしまつと一切他人の言葉には耳を貸さないリティアである。一方的に捲し立てられ、まったく弁解を許してもらえないフェイであった。

「人の話を聞けーつ！」

「黙れこの変態っ！」

リティアの飛び蹴りが飛来する。フェイは咄嗟にそれを避けるが、中空で爪を立てたりティアがさらなる攻撃を放つ。フェイは部屋中を走つて逃げ回つた。

「だから俺の話を聞けっつのー。五分だけでいいからーつー。」

「何げに古いネタ引つ張つて来てんじやないわよつ！ そんな事でごまかされないんだからねつ！」

一人はドタドタと部屋中を駆け回り、板の間の板が悲鳴を上げていた。その台風はやがて隣の部屋へ、廊下へと遠ざかっていく、三人が居る部屋にいくばくかの静寂が訪れる。だが、この部屋でも新たなる低気圧が発生しようとしていた。

お茶をズズズツとすすつた竹取の嫗が湯飲みを置いた時、史はこの嫗にただならぬ気配を感じた。翁の方もそれを感じたらしく、額に汗を滴らせている。

「じーさんや？」

「なんじゃい、ばあさんや？」

「きわどことこにあるといふかぐやのアザをなぜお前様が知つておるのです？」

「それはかぐやの水遊びを覗……いたわけではないぞ、ばあさんや」「なるほど、かぐやがたまに見かけたといふ河童とはお前様の事だつたのですね、じーさんや？」

「さ、さあ、わしゃあ最近物覚えが悪うなつてしまつてのう。よう覚えとらんのじや、ばあさんや」

「やうですか。では思い出せあげましょつ。じーさんや」

そう言って嫗がその懷から取りだした呆け防止アイテムとは鎖鎌

であつた。鎌がジャラジャラと音を立て、やがて嫗がその鎌を振り回し始める。それはヒュンヒュンという音へと変化する。

「いや、それはちょっと危ないのではないか、ばあさんや？」

「大丈夫ですよじいさんや、鎌の方は勘弁してあげますから」

「いやいやあばさんや、分銅の方もじゅうぶんに殺傷能力がつ！」

「ぐつ！……ぐつ！……ぎつ！……げつ！……」

アホらしくなつた史は立ち上がり、ガ行の悲鳴を背に部屋を出た。フェイにかぐや、竹取の翁に嫗。なんだか自分が独りぼっちであるかのような孤独感が史の心を締め付けていた。

すっかり日も暮れた庭先で、史は風に吹かれて気分転換を図る事にした。月を見上げると、十三夜月が明るい光を地上へ落している。あそこがかぐやの故郷なのかと色々な想像を巡らせながら、史はしばらく月を見上げていた。

事態の変化に史が気付いたのはそれから間もなくの事であつた。殺氣が周囲を取り囲んでいる。史は刀を鞘から抜き放ち、何故か笑つた。あれこれ考え込むよりも今はありがたい、とやう言つ事である。

史は闇に向かつて声を掛けた。

「出てくるがいい」

その声に応じるように一〇人の男が現れた。その身なりから判断して、リティアやフェイと同じ月の住人だろうと史は推察したが、さらなる気配が背後からもひとり。

「ほうほう、どうやら今回は大勢来なさつたようじゃな」

それは竹取の翁……らしき顔の男であつた。鎌鎌の分銅が彼の顔をすっかり別人へと変形させていたのである。

「ここは危ない。下がつていってくれ、竹取の翁殿」

「大丈夫。わしに攻撃を当てる事など何人たりとも出来はせん」

「いや……、そなたボコボコじやないか」

「ああ、ばあさんは別格じや、まあ見ておれ」

そう言つた竹取の翁が凄まじい氣を発した。それは殺氣と/or>108

は生ぬるい。まるで鬼氣である。Iの全身を刺すよつなピロッピと
した痛みに史は覚えがあつた。

「Iの鬼氣はある時の……、なんと天狗の正体はそなたであつたのか」

「おしゃべりはここまでぞ」

月明かりの下をいくつもの閃光が走つた。翁と史は地面を転がつて避け、Iの間にも翁は転がりながら苦無くないを投げて三人を仕留めている。感嘆の呻きを洩らしつつ、史は突進して一人を切り捨てた。残るは五人。そう思つて身構える史。

しかし既に全ての敵が地面に横たわっていた。皆、苦無くないや吹き矢で一撃のもとに仕留められている。やがて暗闇から二人の男達が現れ、竹取の翁の前で片膝をついた時、史は納得すると同時にこの竹取の翁の正体にも予測がついた。

「そなた志能備しのびの頭領か？」

「ああ、名田上の頭領はな。しかし眞の頭領はばあさんじや」

「これほど説得力のある言葉をかつて聞いた事があろうか。史は苦笑と共に納得した。

やがてフェイやリティアも庭にやつて来て、自分達と同じ創造主達の遺骸を複雑な面持ちで見下ろしていると、不意に暗闇に向かって竹取の翁が声を発した。

「どうやらまだ隠れている者があるようじゃのう。殺氣はないようじゃが、出てきたらどうじゃ？」

三人の男達が姿を現した。月明かりに照らされているそのひとりの顔を見て、フェイは驚きの声を上げた。

「コルト！ コルトじゃないか！」

そう。そこにはなんとコルト・パルタガスが立っていたのである。そのコルトがおもむろに鞘を払い、刀身を煌めかせた。

「フェイ、決着をつけよう。俺と戦え」

コルトの真意を測りかね、フェイはしばらく無言で応じたが、これには何か理由があるはずだと感じ、史に手を差し出した。

「史、刀を貸してくれ」

「そなた、刀は使えんのじゃなかつたのか？」

「やつも使えん」

フェイが史から刀を受け取ると、コルトが動き出した。フェイとの間合いを保ち、半円を描くように横へ横へと移動する。ここでもうやくフェイはコルトの意図を察した。コルトと一緒に居るの二人。彼らに聞かせたくない話があるのだろうと。

コルトの意図に合わせるようにフェイも動いた。やがてコルトが突進し、上段から刀を振りおろす。フェイは水平に構えた刀でそれを受け、小声で話しかけてみた。

「お前もリディアを殺しに来たやつらの仲間か？」

「俺は違う。奴らは憲兵総監エンリケ・バルモラル大将の部下だ。俺は第二艦隊司令官ディオン・ディプロマティコス中将の命で来ている。やつらが成功しそうなら殿下をお助けせよとのな」

コルトも小声で返してきた。どうやらフェイの読みは当たったようである。一人は戦いを演じつつ話を続けた。

「あのディプロマティコスがリディアを助けると? その魂胆は?」「ああ、やつは自身の手で殿下を捕らえ、処刑するつもりなんだ」「なんでそんな回りくどい事を?」

「わからんのか? バルモラルもディプロマティコスもアップマン公爵の甥。つまりアップマン一族だ。そしてトニー・オーレ・アップマンに実子はない」

「なるほど……」

来たるべき、と彼らが信じて疑わぬアップマン王朝。その第二代国王の座を巡って、すでに水面下での争いが始まっているという事なのだろう。フェイは汚泥を胃に流し込まれたかのような気分を味わい、吐き気を禁じ得ないでいた。

「で、お前はそのディプロマティコスの片棒を担いでリディアを拘束するつもりなのか?」

「そういう事になるな」

「正気か貴様」

「メアリーが捕まっている」

「ソルトは間合いを取った。

「ソルトにしておいた。貴様とはいづれ艦隊戦にて決着をつけるとしよう」

大声でそう言つて、コルトはリティアに向き直つた。

「内親王殿下、お久しぶりにござります。私は殿下を拘束せよとの命にてはせ参じました。しかし大人しく捕まつてはいただけますまい。今日のところは出直します。明日の夜。戦闘艇二個中隊にてお出向いに参りますのでよしなに。なお現在、時空トンネルの向こう側出口は完全に我が第二艦隊が制圧しておりますので、他の助けは無きものと思し召されたい」

そう言い残し、コルトは部下を、もとい、お目付役を引き連れて去つて行つた。

「ふん、コルトの野郎め、初めて俺に頼み事をしやがつたな。まあ頼み事とは言えんか。やつめ、上手いところで話を切りやがる」

そう呴いて苦笑を漏らしたフェイが史に刀を返すと、それを受け取つた史は青い顔で佇んでいるリティアに視線を走らせ、その理由をフェイに尋ねた。フェイは答える。

「お前さん、ルビのじいさんが乗つていた小型宇宙船を見たんだつてな。戦闘艇一個中隊。つまり明日は武装したあれば四〇〇隻やつて来るという事だ」

「あんなものが四〇〇隻も?」

「ああ、もはやどうにもならん」

史は啞然と佇んだ。竹取の翁もそれを耳にし、史と同じ表情で同じように佇んでいる。やがて翁は史にその責めた顔を向けた。

「明日、大王に援軍をお願いしてみようと思つのじゃが、会つて下されるかのう?」

「わしも一緒に行こ!」

意を決したように史はそう返した。

翌朝。一人は飛鳥淨御原宮へと向かい、大王である大海人に拝謁を願つた。ほぼ拝謁は叶わぬものと覚悟していた一人ではあつたが、以外にも大海人はそれを許した。

「汝らの話は近持より聞いた。かぐやの為に兵を貸せとな?」

大海人は片膝を立てて座り、如何にも英雄然とした物腰で一人に對した。竹取の翁を見る目は些か鋭い。

「讃岐造麻呂よ。かぐやを召し出せとの余の申し出を断つて置きながら、虫が良いとは思わぬか?」

「ははあ、それは誠にもつて……、然りながらその件に関しましてはかぐやが中々首を縦に振りませず……」

「そうか、ならば此度のそなたの申し出、余も首を縦に振らねばならぬ道理はなかろうと思うが、そなたその事をどう思つぞ?」

竹取の翁は言葉を失つて平伏した。大海人はそれを見下ろして、些か意地の悪い言い方をしてしまつたと自嘲氣味に笑い、「まあよい」と言い置いて、次に史へと視線を転じた。

「その方が中臣史か」

「はつ」

「ふむ、お父上に似ておるな」

身を乗り出して史の顔を覗き込む大海人の目を、史は悠然と見返した。

「父とはどちらの事にござりましようや?」

「無論、なかのおおえのおおきみ中大兄大王かがみのおおきみが事よ。だがまあ、それは置くとしよう」

史の母、鏡女王は中大兄から鎌足に下賜された時、既に史を身籠もつていた。と言う噂がある。大海人は史の顔を見てそれを確信したが、同時に史がそれを気にも留めていない事を悟つた。自分はあくまで中臣氏の人間である。と史の目が言つている。ならばそれはそれで確認しておきたい事があつた。

「ただ、ひとつ聞いておきたい。そなたの一族、中臣家を没落せし

めたのは他ならぬ余じや。そなた、それを恨んでるか？」

「むかしば。でも今はお恨み申さず。さる女性「じょしやう」より、そんなもんは笑い飛ばして這い上がつてやるくらいの氣概を持てと言われました

故

「ふむ、その女性とはかぐやが事か？」

「さようにて」

「そなた、かぐやを好いておるのか？」

「さようにて」

「ではいすれ、あのかぐやを伴侶となす所存か？」

「出来ますれば」

言葉短く毅然と答える史に、大海人は少し意地悪い質問をしてみたくなつた。

「ふむ……、では聞くが、実は余もあのかぐやが事は氣に入つておつてな。そなたが手に入れたとして、そのかぐやを余に献上せよと申さばそなた、どうするぞ？」

「お断り申し上げます」

「ほほう、出来るかな？　余がその気になれば兵を差し向け奪い取る事も出来るのじやぞ」

「そのようなものは立ちどいろに蹴散らし、お上と刺し違えてでも守り参らせる所存」

無礼者め　と色めき立つて刀の柄に手をかける近持達を手で制し、大海人は豪快に笑つて見せた。

「こやつめ、言いおるわ」

久しぶりに痛快な気分を味わつた大海人は上機嫌であつた。

「良からう。汝らに兵二〇〇〇を授けようぞ」

「ははっ、ありがたき幸せ」

「ただし、条件がある」

そう言つて、大海人は一人の反応を楽しむように眺めた。緊張の色を隠せぬ竹取の翁に対しても悠然と構える史。大海人の見るところ、史はこの条件を正確に洞察しているようであつた。その上でこの

態度。大海人もまた、史の返事に確信を持つた。

「史よ。この騒動が落着した暁には余に仕えよ」

「ははっ、我、非才の身なれど、喜んでお仕え申し上げます」

「つむ、ではそなたの父のように、余もそなたに藤原姓を授けよう。

これよりは藤原史と名乗るがよいぞ」

こうして謁見は終了した。後世、藤原不比等として名声を馳せ、藤原氏の権勢を盤石たらしめるに至る史の霸道はこうして始まるのであった。

「どうした、竹取の翁殿？」

飛鳥淨御原宮の門前で、竹取の翁が地面に片膝をつき、史に向かつて臣下の礼を取るように頭を下げたのを見て史はそう言つた。翁はそれにこう答える。

「今日は感激いたした。これより先、我が一族をあげて史様の霸道に協力させて頂きます」

「よろしく頼む。しかし先ずは今夜の事を考えるのが先決だな」
史はそう応じ、竹取の翁の肩に手を置いた。

第十四話

中臣史改め藤原史と、竹取の翁こと讃岐さぬきのみやつこほの造麻呂が兵を整え、屋敷への帰途へついていた頃、フュイはリティアに蹴り起こされた。

「あんた、いつまで寝てんのよつ！」

「ん……なんだ、もう朝か？」

「昼よつ！」

せつかく会えたといつのにずっと放置され、おかんむりのリディアなのであつた。風船のようにぶくっとホッペを膨らませ、仁王立ちとなつて寝ぼけ顔のフュイを見下ろしている。

「あんた、昨晩あれからどうか出かけてたみたいだけど、どこ行つてたのよつ？」

「ああ、グリフィノスのおっさんに連絡を取りたい事が出来たんだな。ちょっと宇宙までひとつ飛び行つて来た。帰つて来たのは明け方なんだよ」

だからまだ眠いのだ、とフュイはそう主張したかったのだが、リディアはそこには留意してくれなかつたようである。

「時空トンネルだとか言つ出口は封鎖されてるんじやなかつたつけ？」

「ああ、しかしこういう事態は予測してたんでな。その時の為の連絡法は確保してたさ」

「まあいいわつ、出かけるからとつとと用意なさいつ！」

「やれやれ」とフュイは眠そうに皿をこすつてモゾモゾと起き出した。簡単な朝食ならぬ昼食を取り、その後、引きずられるようにフュイが連れて行かれたのは葛城川。と言つても、史とよく行くあの崖の上ではない。そこへフュイと行くのは史に悪い気がしてためらわれたのである。今回はリティアがいつも泳いでいた場所であった。「でつ？ あんた結局、何しに来たわけつ？ 昨日も全然肝心な事は話さなかつたしつ」

リディアの膨れつ面は未だ継続中であった。よく顔が疲れないもんだとフェイは思う。何度かそのほっぺを人差し指で突いてやりた衝動に駆られたが、過去にそれをやって股間を蹴り上げられた事があるフェイはそれを思い止まつた。それにそんな事をしている場合でもない。リディアの言つ通り、肝心な事を話さなければならぬいだらう。

「そうだな、じゃあ今から話そつ

いつになく深刻な顔を作つたフェイを見て、リディアのホッペが通常の大きさに戻つた。

「お前、月へ帰りたいのか、帰りたくないのかどっちだ？」

「あ、あたしは……」

「実を言つとな。俺は最初、お前がここに居たいというなら無理に連れ帰るつもりは無かつたんだよ。グリフィノスのおさん達には悪いと思つたがな」

「そ、それってフェイはあたしに帰つてほしくないって事？」

「いや、そう言つ事じゃなく……」

「そうじやないつ！」

リディアのホッペがまた膨らんだ。やれやれ、とフェイが肩を竦める。

「だから違つと言つてるだろ。俺はお前の意志を尊重したいと思つただけなんだよ。だがな、よく考えてみてそれも変わつた。お前は内親王だ。そのお前が考えなきやならん事はなんだ？ 自分の幸せか？ それとも民の幸せか？」

「そつ、それは……」

リディアは返答に窮した。言われてみれば確かにその通り。我が儘が許される身分ではない。しかしそんな議論など無用の長物と化してしまつたこの現状。もはや帰りたい帰りたくないなどと選択出来る立場ではなくなつてしまつてている。

その事にフェイは小さな溜息をついた。

「だがまあ、今は状況も変わつたな」

「そうね」

リディアも釣られるように溜息を吐き出す。

「戦闘艇二個中隊。とてもかなわないわ。史達、援軍を連れてくるつて出かけたけど、この時代の兵がいくら集まつたってかないつ connaîtもの。あたし……、どうせ死ぬのよ」

生を諦めたかのようなその台詞は、だが諦めきれないという色彩を帯びてフェイの耳に届いた。リディアの両目にじむ涙もその事を物語っている。

「ああ、そうなるかもな。だがお前、唯々諾々とやつらに殺されてやるつもりか？ どうせ死ぬなら戦つてやろうって気にはならないか？ 死ぬその瞬間まで民の為に生きる努力をしなければならないとは思わないか？」

フェイはそう言つてリディアの両肩に手を置いた。

「もしお前が戦うつてなら俺も一緒に戦つてやる。生涯、俺はお前を守つてやる。お前が死ぬ時は俺も死ぬ時だ」

「フェイ……」

リディアの涙がこれまでとは別の輝きを放ちつつ頬を伝わった。

生涯、俺はお前を守つてやる この言葉に震えたのである。リディアはこの言葉をプロポーズと受け取つた。受け取つてしまつたと言つべきか。

「わっ、わかったわっ！ あたし、戦うわっ！ 月に帰るわっ！」

猛然と立ち上がり、リディアはそう叫んだ。

そうだ。月に帰ろう。例え処刑される事にならうとも、死ぬその瞬間まで生を諦めないでいよう リディアは改めてそう心に誓つた。

「よし、その意氣だ」

フェイも立ち上がりてリディアの頭を撫でた。普段なら子供扱いするなど怒り出すリディアだが、今回はやけに素直に撫でられている。その頬にはほのかな赤みすら差していた。

「後でがっかりさせるのもなんだから言いたかなかつたんだが、実

のところ勝算はゼロじゃない」「

「ゼロじゃない?」

「ああ、上手くパンティーが乾けばだがな」

「はあ? パンティーが乾? 何言つてんのあんた?」

「ああ、別に何でもない」

口を濁すフェイにリディアはそれ以上の追及はしなかつた。そんな事よりもフェイが言つた勝算があるという言葉の方が遙かに重大である。それは例え小さくても生きる希望が持てるという事である。そうなつた時の二人の未来に思いを馳せ、リディアは声を弾ませた。

「ねえねえ、でも勝算がゼロじゃないって事はあたし達、生き延びられる可能性があるって事よね?」

「ああ、その通りだ」

「そつなつたら色々と忙しくなるでしょ?」

「そうだな。お前は女王になるかもしれんしな」

「でもねでもね、あたし、新婚旅行くらいは行きたいわつ」

「新婚旅行? オ前、誰かと結婚する予定でもあるのか?」

「え?」

なんだか雲行きが怪しい。

「あんたさつき『生涯、俺はお前を守つてやる』って言わなかつた?」

「ああ、当然だろ。俺はお前の臣下だからな」「臣下……?」

俯いたリディアの肩がワナワナと震えだした。

紛らわしい言い方をしたフェイが悪いのか、勘違いした自分が悪いのか。でもそんな事はどうちでもいい。このやり場のない怒りを晴らす絶好の物体がやつの股間にばぶら下がっている。

「いやあ、それにしても俺は嬉しいよ。お前がよく月く……つて、どうしたリディア?」

「べつ、別にあんたの為に月に帰るんじゃないんだからねつ!」

これまでにない強烈な蹴りがフェイの股間にめり込んだ。

フェイとリーディアが戻つてみると、竹取の翁の屋敷周辺は「や矛を持った兵で溢れかえっていた。

リーディアがブンブンと大股で、フェイがヒヨコヒヨコと内股で、それぞれが屋敷の門を潜つたのは、夕刻も差し迫り、斜陽が西の空を赤々と染め始めた頃であつた。東の空では月がうつすらと淡い輝きを放ち始めている。

その月周辺に異変が見られたのは、それから間もなくの事であつた。沈みきつた落陽がその周辺にのみ赤い残照を残し、東の空がものはや夜空と言つてもいい闇を備え始めた頃。その闇に無数の小さな光点が浮かび上がつた。

「あつ、あれは何だ？」

それを見て兵達が響めぐ。

その光は徐々に大きくなり、その数も次第に増していく。その神秘的な光景を兵達は呆然と見上げていた。その存在を知つていた史ですら驚きを禁じ得ないでいるのだから、兵達の驚愕は推して知るべしであろう。

やがて、光点とも言えぬ大きさとなつたその輝く物体は、付近一帯の上空を覆い尽くした。

兵達は最初、敵が空からやつてくると聞いてまさかと笑つたが、そのままかが現実となつて訪れた時、笑つた事を後悔する余裕すらなくパニックに陥つていた。

「な、何をしておるか！ 矢だ！ 矢を放て！」

各処で怒声が上がり、次いで数百にも及ぶ矢が夜空に向かつて放たれる。しかしそれらの矢は敵には届かない。矢は放物線を描いて地上へとその進路を変え、光る物体はその遙か上空を嘲笑するかの如く浮かんでいる。

矢が届かなければこちらからの攻撃は不可能であつた。愕然と空

を見上げる者、逃げ惑う者、恐慌状態へと陥つて矢を放ち続ける者。各処の組頭達は軍としての秩序を維持する事に奔走させられていた。やがて敵に動きがあつた。それは言つなれば威嚇射撃であらう。しかしその破壊力はこの時代を生きる人々を戦慄させるにじゅうぶんであった。目を覆わんばかりの閃光が走り、雷鳴の如き轟音が響く。暗闇に目が慣れていた兵達は、その視力を取り戻すのに数十秒を要したが、やがて開けたその視界に映つたものは、空を赤々と焦がす山火事であった。

それを見た瞬間、兵達は驚愕に青ざめた。火事にではない。明るく染まる夜空が山の形を浮き彫りにしているが、その山が彼らの見知つた原形を留めていなかつたのである。頂上付近が完全に吹き飛んでなくなつている。

敵のたつた一隻が放つたつた一撃でこの威力。兵達は完全に戦意を喪失した。

その彼らの頭上に声が響く。

「半時待つ。それまでにリティア殿下の出頭なくば無差別攻撃を行する。繰り返す。半時待つ。それまでにリティア殿下の出頭なくば無差別攻撃を敢行する」

この声は屋敷内にもじゅうぶんに届いた。

「おじいちゃん、おばあちゃん、あたし、行きます。今までありがとうございました」

竹取の翁、嫗を前にリティアは頭を下げた。翁は引き留めようとするがリティアは首を横に振る。

「大丈夫よ、おじいちゃん。さつきも言つたけどあたし、死にに行くわけじゃないの。自分の未来を勝ち取る為に行くのよ。きっと勝つてみせるわ」

呆然と言葉を失う翁に代わって嫗が口を開いた。

「行つてらっしゃい、かぐや」

その言葉に翁は驚く。

「そんな、ばあさんや」

「あなたは黙つてなれ、じこさんや」

「はい、ばあさんや」

嫗に凄まれ、翁が引き下がると、嫗は再び優しい笑顔をリディアへ向けた。

「あなたは女性ですからね。何れは何処かへ嫁いで行く身と覚悟しておりました。だから此度は月へ嫁いで行くものと思ひ事にしましたよ」

「ありがとう、おばあちゃん」

「ううう……、かぐやよ。辛い事があつたらいつでも帰つて来るんじゃぞ」

などと翁はやや場違いな事を言ふ、またまた嫗に睨まれる。

「ありがとうございます、おじいちゃん」

リディアはそつ言つて改めて一人に頭を下げる。

フロイはこの時、屋敷の外でかぐやを待っていたが、そこへ血相を変えた史がやつて来た。

「かぐや殿は?」

「ああ、今は中でじこさんばあさんと話していぬ

「で、どうするつもりだ?」

「俺達は行くよ。行かざるをえんだろう。でないとお前達まで巻き添えにしてしまつ」

「わしは死など恐れん。最後の一兵にならうとも戦う所存だ」

「史、お前が自分の矜持の為に死を選ぶのはかまわん。しかしそれに兵達を道連れにする事は愚行の極みだと知れ。冷静に考えればその分からんお前ではなかろう」

史は絶句した。返す言葉がない。代わつて史はフロイの胸ぐらを掴んだ。

「な、ならば誓え。わしの代わりにかぐや殿を守つてみせると。必ずかぐや殿を幸せにしてみせると。神掛けて誓え!」

「……ああ、誓おう」

幸せはちゅうと違ひうれと思つたフロイだが、口に出してはやう言

つた。史の男泣きの涙がそれ以外の言葉を許さなかつたのである。リディアが屋敷から出てきた時、史は涙を拭い、リディアに向かつて笑顔を作つて見せた。

「かぐや殿。わしはそなたの言葉で生き返る事が出来た。必ずこの国で這い上がつて見せる。そなたもそなたの国で頑張つてほしい」「ええ、頑張るわ。あたし、こんな状況でも全然死ぬ気がしないもの。きっと何となるわ。何となるつて思えば何となるもんなのよね。だからあなたも頑張つてね」

リディアらしい台詞を言い、彼女もまた笑つて見せる。

竹取の翁に嫗、史の三人に見送られ、リディアとフェイが屋敷の門を出ると、戦闘艇が一隻着陸した。ハッチが開き、降りてきたコルトがリディアに向かつて敬礼を施す。

「では内親王殿下。お身柄を拘束させていただきます」

リディアとフェイが連行され、ハッチが閉じられると、戦闘艇は地面を離れ、上昇を始めた。やがてそれは光点となつて夜空を駆けていく。

史たちはそれをいつまでも見送つていた。

「きっとかぐやはまた会えますよ。なんだかそんな気がします」

竹取の嫗が予言者のように言い、竹取の翁と藤原史は静かに頷いたのだった。

時空トンネルを抜け、現代へ戻ったフェイとリディア。彼らが連れて行かれたのは第一艦隊の旗艦である戦艦ホクトノーケンであった。

一人は手錠で両手を拘束された上に背後からビームライフルを突きつけられ、第二艦隊司令官ディオン・ディプロマティコス中将が待つ司令官室へと連行された。

「これはこれは内親王殿下。着物がよくお似合いでござりますな」
お世辞と言うには不快な声色であり、リディアの背筋をかつて無い悪寒が走った。その獲物を見るような視線も、意味ありげな笑顔も、脂ぎって太った体躯も、何もかもがリディアには野卑に見える。リディアが無言で顔を背けると、ディプロマティコスはくくくくと笑った。その気の強さがたまらんと言わんばかりの笑いである。「殿下には私が栄達する為の贅となつていただきます。その前に、少し樂しませていただくとしましょうか。くっくっく……」
淫猥な笑いを浮かべつつ、ディプロマティコスはお楽しみの獲物からコルトへと視線を転じた。

「ご苦労だったなパルタガス准将」

無言で僅かに頭を下げるコルトに向かつて、ディプロマティコスは新たな命を発する。

「フェイの方には用はない。そう言えば貴官達は同期のライバルであつたな。今ここでフェイを射殺するという榮誉を貴官に与えるとしよう」

「私にフェイを殺せと?」

「ああ、さつさとやりたまえ」

躊躇するコルトにディプロマティコスが不快な声を浴びせた。

「私に逆らえばメアリーが命を落す事になるが、良いのかな?」

コルトは心の中で歯軋りした。かつてはこの男を人質にして軍務

省内に捕らわれていて、メアリーとの身柄交換を考えた事もあったが、ディプロマティコスは自分の指示がなくともコルトが造反した瞬間、メアリーを殺せと命じているようだったので、それは危険であった。

この魔法の言葉に抗しきれずコルトは銃を抜き、その銃口をフェイへと向けた。向けてあるをえなかつた。
さすがのフェイも額に汗を滴らせるが、コルトを見返す日まだいか同情的であつた。

引き金にかかるコルトの指が、数ミリ単位で躊躇い動きを見せていると、艦橋の通信士官より司令官室へ報告が入つた。スピーカーから通信士官の声が流れる。

「何やらおかしな電文が宇宙を飛び交つてゐるようです。いちおつご報告をと思いまして」

「おかしな電文だと？」

「はい、何やら平電文で、パンティーは乾いた」と

コルトは怪訝そうに細めた目をハツと見開き、フェイの顔を凝視した。そのフェイがニヤリと笑つて頷く。そして叫んだ。

「リディア、伏せろ！」

「いやよつ！」

フェイは背後で自分に銃を突きつけている兵の腹部に肘打ちを叩き込み、苦痛で崩れたその兵の顔面ヘトドメの膝蹴りを食らわせた。その時、リディアの方は前屈姿勢となり背後の兵の股間をかかとで蹴り上げていた。中々に高度な技だが、こと股間を蹴り上げる事に関してはプロ並みの技倆を持つリディアである。相手の兵は一撃で悶絶した。

フェイに向けられたコルトの銃口は、この事態の急変に呆然とせずディプロマティコスへとその向きを変えていた。

「ど、どういう事だバルタガス准将。メアリーがどうなつてもいいと言つのか？」

「コルトはこの時「ククク……」と低く笑つた。笑わずにあれば

かつた。

「パンティーは乾いた　　と、そういう事らしいですよ、閣下」

理解しきれないで居るディプロマティコスのこめかみへ銃口を突きつけ、その耳へ嘲笑を突きつけた。

「さて、あなたは我々の人質です閣下。一緒に来ていただきましょうか」

ディプロマティコスを人質に、三人はコルトの旗艦バリューゼへと向かう。彼らがバリューゼへたどり着いた時、第一艦隊の艦艇はコルトの分艦隊を残して全て消えていた。この事態と、この時接近中であったグリフィノス率いる近衛艦隊に恐れをなし、司令官であるディプロマティコスを見捨てて逃げ去ってしまったのである。

月でこのコルト造反を聞いたディプロマティコスの部下は、メアリーを殺害せんと監禁している部屋へと向かったが、そこにメアリーの姿はなく、あちこちに張られた禁煙ステッカーを唾然と見つめたといふ。

この後、コルトはディプロマティコスを宇宙へ放り出した。その速度と軌道から、彼は地球を数周した後、大気圏で燃え尽きるであろう。メアリーの事への、これがコルトの報復であった。

その後、グリフィノスの近衛艦隊がコルトらに合流し、さらにその五時間後、ケレス駐留艦隊司令官リー・グレイ・アシュトン中将が高速艦艇を選びすぐり、ケレス駐留艦隊の半数に当たる一万五千隻の艦艇を引き連れて合流した。このアシュトンは優秀な男ではあるが、愚直な事で有名な初老の軍人で、その性格が災いして軍首脳部より忌避され、ケレスへ左遷されたという経歴を持つ男である。中々に頼もしい味方であった。

更に現在、メアリーを救出したスカル・ファン・ロペス大尉は、メアリーと共に元フェイが指揮していた旧トリニダッド艦隊でこちらへと向かっている。これは現在、グリフィノスの盟友である艦隊参謀レイ・ロックキー・パテル大佐が指揮していた。現司令官、アップマン派のハロ・ベガス・ロバイナ准将は置いてけぼりを食らい。月

で憮然とそれを見上げたという。

リディアにフェイにコルト、そしてアシュトンの四人はグリフィノスの旗艦、グランドキャラバッシュに移乗し、そこで一堂に会した。

「」でコルトはリディアに対して頭を下げ、銃を差し出した。

「内親王殿下。私ことコルト・パルタガスはあなたのお父上であるアレクサンドル陛下を弑し奉つた者。つまり殿下にとつては親の仇です。どうぞこれをお使い下さい」

このコルトの行為にリディアは憤慨したように声を尖らせた。

「あんたねえ。戦場での事をあたしがいちいち根に持つてると思つてんなら、それはあたしに対する侮辱つてもんよ。どうしてもこのままじゃあんたの気が済まないつてんなら、これからはあたしの役に立つてみなさいよねっ」

このリディアの言葉にコルトは銃をしまい、片膝をついて跪いた。「はっ、これよりは我が忠誠心の全てを捧げ、殿下のおん為に働くかせていただきます」

これを見たグリフィノス、アシュトンの二人も前に出て跪き、改めてリディアに忠誠を誓う。それを見渡して満足そうに頷いたリディアは、ふんぞり返つてフェイを睨み、コルトの横を指さした。お前もここで忠誠を誓えという事であろう。へいへい、と声に出し、フェイはその列に加わった。

「これよりは我が忠誠心の以下省略。これでいいか？」

「ど、やつてしまつところがフェイの大人げないところであろう。この後、総司令官を誰にするかという話になつた。普通なら階級が中将のアシュトンで決まりのはずだったのだが、彼はそれを辞退し、グリフィノスを推した。

「内親王殿下を」推戴申し上げるという計画を立案し、その中心となつてここまで苦労してきたのはグリフィノス准将であり、自分はその尻馬に乗つたに過ぎぬ。」に至つて自分が総司令官たる地位を得るわけにはいかぬ」

「いや、それでは軍での序列が……」

グリフィノスが翻意を促すも、頑固なアシュトンは頑なに固辞する。

アシュトンの言い分も分からなくはない。しかしグリフィノスが総司令官では准将の下に中将がつくという、軍の序列としてはおかしな事になる。

と、ここでリディアはポクポクチーンと閃いた。

「そうだわつ、こうしましよう。戦時特例昇進よつ！」

戦時特例昇進とは、戦時における緊急時などで一時的に昇進させる措置の事である。これによりグリフィノスは大將に昇進し、内親王リディア・チャーチワーデンの名において総司令官に任命された。「でつ、次はコルトね。あんたは中将つて事でつ」

こうしてコルトも中将に昇進。これには指揮系統的に大した意味はない。リディアの気まぐれ言つたところであらう。

「でつ、次は……」

リディアは次にフェイへと視線を移した。睨みつけたと言つた方が適切であろうか。あの勘違いをまだ根に持つてゐるようである。

リディアの口元がニヤリと笑つた。

「あんたは二等兵ねつ」

「おいつ、どこが戦時特例昇進なんだよ！ めちゃくちや下がつてんじゃねえか！」

「んーとねつ、戦時特例降格つてやつ？」「ねえよ！ んなもんねえよ！」

フェイの異議申し立ても虚しく陣容は決した。

近衛艦隊司令官アレン・グリフィノス大將。ケレス駐留艦隊司令官リー・グレイ・アシュトン中将。分艦隊司令官コルト・パルタガス中将。分艦隊司令官フェイ・トリー・ダッド一等兵。その總艦艇数、約三万隻。

この陣容は内親王リディア・チャーチワーデン拳銃の報と共に発表され、アップマン派の將兵達を震え上がらせた。その艦艇数はと

もかく、指揮する者達は宇宙最強の四人と言つても過言ではない。月でもリティアラに対する討伐隊が組織され、五個艦隊、約一五万隻の大艦隊が月を進発するも、士氣は今ひとつ上がらなかつた。

メアリーを乗せた、司令官代理レイ・ロッキー・パテル大佐が指揮する旧トリニダード艦隊が到着すると、フュイとコルトはそれぞれ自分の艦隊へと戻る事にした。

小型艇のある後部ハッチへと向かう途上、フュイとコルトは肩を並べて歩く事となつた。

「フュイ、貴様には借りが出来たな。この借りはいつか返させてもらおう」

「ん？ ああ、副官の事か？ 助けたのは俺じゃない。俺じゃないが、まあ返すつてなら遠慮せず受け取つておこうか」

「ふん、そうか、じゃあ貴様には招待状でもプレゼンツしよう」「招待状？ なんのだ？」

「俺はこの戦いが終わつたら、メアリーと結婚しようと思つ」「止めとけ。あ、いや、結婚をじやないぞ。お前、戦いの前にそう言つ事を口にしたやつがどうなるか知つてゐのか？ 死亡フラグが立つちまうぞ」

「ふん、それもやうだな。しかし、そういうお前の方いらぬなんだ？」

「どうなんだとは？」

「殿下との事だ。まさかお前、殿下の思いに気付いてないつて事はないよな？」

「さすがにそこまで鈍感じやないが……、しかし相手は内親王だぞ。気付かないフリをしてなきや逃げられなくなるじゃないか」

「お前がいつまで逃げられるか、楽しみに見てゐる事にするよ。しかし、もしそうなつてお前が主筋なんて事になつたら、俺はきっと謀反を起こすだろうな」

「ふん、その時は遠慮無く呪をつぶしてやるよ」

こうして二人は別れた。

フェイは戦艦フェロモンへと移乗する。実に一年ぶりの乗艦であった。

「フェロモンよ！ 私は帰つて來た！」

これまでにない感慨がこの台詞に魂を吹き込んでいた。

艦橋へ上がったフェイをレイ・ロッキーパテルが出迎える。こちらも一年ぶりの再会である。

「やつぱりこの艦隊はあなたが指揮しませんとね。期待しますよ

二等兵殿」

「ブブブツ」とドロシーが噴き出す。フェイはそのドロシーの巨乳をムニヤリと驚づかみにし、悲鳴を上げる彼女を背に司令官席へと座つた。やはりここからの眺めは最高である。

「フェロモンよ！ 私は帰つて來た！」

再びはそう叫んだフェイの後頭部にドロシーの軍靴が迫つた。

フェイが負傷兵と化していた頃、コルトとメアリーは戦艦バリューゼで再会を果していた。コルトの顔を見た瞬間、メアリーの目に涙が溢る。

「私は汚されてしましました。もう閣下の寵愛を受ける資格などないのですわ」

そう言って泣くメアリーをコルトは優しく抱きしめた。

「そんな事はない。俺にはお前が必要だ」

「でも……、でも……」

「メアリー、この戦いが終わつたら……、いや、今は言つまい」苦笑と共に言葉を閉ざしたコルトは、メアリー唇に唇を重ね、むさぼるように舌を絡ませた。

敵の大艦隊が前面に展開しだしたのは、それから間もなくの事であつた。だが展開しただけで攻め寄せてくる気配はない。皆はそれぞれの旗艦でスクリーン越しに軍議を開いていた。しかしグリフィノスの旗艦に乗り込んでいるリティアはそんなものは無用だとばかり

りに叫ぶ。

「んなもん、突撃よ突撃つ！　突撃あるのみつ！」

「殿下、軍議に口出しさなりませぬぞ」

同じく乗り込んでいるルビ・ラモン・アロネスがそうが奢めるが、アレン・グリフィノスは言ひ。

「いや、面白いかもしれん。どう思うみんな」

「賛成ですな。突撃に最適なポイントもいくつか見付けております」「コルトがそう言つて賛同すると、アシュトンも頷いた。

「敵は戦意に乏しいように見受けられる。ここは時をおかずの力攻めが上策であろう」

「ふむ」と頷いたグリフィノスがフェイにも問ひ。

「で、トリニダッド一等兵の意見はどうだ？」

「一等兵一等兵言つなつ！　まあ正面からの突撃もいいが左翼の艦隊に乱れが見える。左翼からの側面攻撃も面白いと思うがな」

「よし、では各自の作戦案を取り入れ、細かいところを詰めよう」と言つてもそれはほんの一〇分で済んだ。力攻めの速攻。要するにそつ言つ事である。作戦もへつたくれもない。

敵一五万に対し、三万のリディア軍は突撃を敢行した。

左翼側面からフェイ・トリニダッドの艦隊約五〇〇〇隻。中央にアレン・グリフィノスの艦隊約五〇〇〇隻とリー・グレイ・アシュトンの艦隊約一万五〇〇〇隻。右翼側面からコルト・パルタガスの艦隊約五〇〇〇隻。

彼らは猛然と敵艦隊に向けて襲いかかつた。荷電粒子砲の閃光が敵の艦列に穴を穿ち、その空いた空間へと突入する。

「進め進めーっ！　もうどんどん行っちゃえーっ！」

リディアが檄を飛ばし、近衛艦隊の速度が更に上がる。ルビは顔を青くしていた。前面はもちろん、右を見ても左を見ても、上を見ても下を見ても、全部、敵、敵、敵である。ルビからしてみれば世にも恐ろしい光景であった。総司令官であるグリフィノスに諫めてもらおうと思ったのだが、彼は「こいつはいい。今回、俺は何もし

なくてよせやうだぞ」と笑つてゐる始末。ヒロは老臣が諫めねばなるまい。

「でつ、殿下、深入りしそぎですぞ、ヒロは一度下がつた方が！」

「つるさいわねつ！ あたしの辞書に後退なんて文字は載つてないのよつ！ まあ類語辞典には載つてたかもしけないけどねつ」

「では類語辞典もぜひ参考にして下されーつ！」

「つるさいつつてんでしょ、ルビッ！ あんたは黙つて漢字の上にチョコンと表示されてればいいのよつ！」

グリフィノスも言つ。

「ここは殿下の言つ通りですぞ、ルビ殿。ここで下がつても何の益もない。逆に敵の攻勢を呼び込むだけでしょつ

ルビは沈黙した。その内、リティアが気付くとその姿まで見えな
くつている。

「あれ？ ルビはどう行つたの？」

「はあ……」

ひとりの下士官が申し訳なさそうに報告した。

「私は振り仮名に非ず そう仰られて白室へと引きこもられました。何やら一ートになるとかなんとか騒いでおりましたが……、呼んできましょうか？」

「別にいいわつ、白髪の一ートなんて見たかないわよつ 無情に言い捨ててリティアは指揮へと戻つた。

この頃、フェイ、コルト、アシクトンの艦隊も善戦していた。アシクトンは深入りこそしていないものの、上下に広げた艦隊を柔軟に動かし、敵を締め上げて分断し、その艦列をズタズタに引き裂いていく。その老練さは横で見ていたグリフィノスも思わず「お見事」と唸つたほどである。

そしてコルト。彼はこの四人の中では一番突撃力に秀でた存在であつたるわつ。突進しつつ敵の弱点を見極め巧みに軌道修正し、敵の内部を引っかき回している。

フェイは左翼の敵に密着し、巧緻を極めた砲撃で確実に敵を仕留

めつつ自らは決して隙を見せない。恐らく四人の中で一番自艦隊に犠牲が少ないのがフェイであろう。さらにフェイは暗号による心理作戦を実行した。敵艦隊に向けてパンティーが滑ったのパンティーが転んだのと様々な暗号を送りつけたのである。これによつて疑心暗鬼に陥つた敵艦隊は各処で同士討ちを始め、その内、本当に寝返つて来る艦隊もあらわれ始める。敵艦隊は完全に瓦解した。

この時、グリフィノスに朗報がもたらされる。それは王都にいる仲間が武力蜂起し、各処の制圧に成功しつつあるとの報であった。これは撤退の意志を見せ始めていた敵が帰る場所をなくした事を意味する。この敵が窮鼠猫を噛むの例えを実行に移す前に、グリフィノスは降伏勧告をする事にした。この降伏勧告を拒否し、徹底抗戦を叫んだのはふたつの分艦隊のみであり、その艦隊がこれまで仲間だつた艦隊に葬り去られると、宇宙での全戦闘は終わりを告げた。やがて王都も完全に制圧され、トニオーレ・アップマン公爵自書との報がもたらされた事により、みなは全てが終わった事を悟る。何はともあれ戦いは終結した。七時間という長いようで短く、短いようで長い戦闘がようやく終わりを告げたのである。

月へと凱旋したリディア達を民衆は歓呼の嵐で出迎えた。

リディアにとつて、実に一年ぶりの帰星（きせい）であつた。

HPLローグ

その後、長老員議会も復活し、アップマン公爵が擁立したセレムト王の廢嫡が可決されると、リティアは女王となる事が正式に決定された。

リティアもじばらくは多忙の日々が続いていたが、戴冠式を終えた翌日、リティアはズカズカと戦艦フェロモンへ乗り込んできた。

「フェイ、地球へいくわよつ！」

「地球へ？ なにに？」

「決まつてんじゃないの。史とおじこちやんとおばあちやんに、勝利の報告よつ！ わあ、トロニーダツド艦隊、出動！」

「アホか。そんな理由で艦隊や戦艦が動かせるかつ！ 艦載小型艇でじゅうぶん事足りるだらう。で、ちやんと報告はしてきたのか？」

「うそつ！」

「ちつ、しゃあねえなあ」

「じつしてフロイドリティアは用を出発した。したのだが……。

「おい、何か電波が飛び交つてゐるんで傍受してみたらこの俺が女王誘拐犯とか何とか言つてるんだがどうなつてんだ？」

「え？ だつてちやんと置き手紙してきたのにい」

「置き手紙だあ？ んなもん報告とは言わねえんだよ。そういうのを事後報告つつんだよ。で、ちやんと分かりやすいといつて置いてきんだろうな？」

「……あ、引き出しに入れたままだわ。しかも鍵かかつてゐるわ」

「アホか つ！」

「ごめんちやい」

「戻るぞー。今すぐ戻る！」

「ダメよつ！ 戻つたらもう一度と地球へ行けなくなるもん。みんなうるさいんだもん。行かせてくれないんだもん！」

「あ、てめえ、ワザとだな？ 確信犯だろ？」

「だつて仕方なかつたんだもん」

「帰るぞ！ 今すぐ帰る！」

「そんな事したら許さないんだからねつ！ そんな事したらフュイ
に誘拐されたつて言ってやるんだからつ！」

「わかつたよ。行きやあいいんだろ、行きやあ」

こうして聞き分けのいい運転手を確保したり、ディアは、これ以降

も度々地球へ行く事となるのであった。

さて、その後リディアとフェイがどうなつたのか。
それを今ここで語るのは止めておく事にしておき。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3926v/>

KAGUYA ~別にあんたの為に月に帰るんじゃないんだからねっ!~

2011年9月6日03時29分発行